



Title	句を包摂する接尾辞群に関する認知言語学的研究
Author(s)	平野, 啓太
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92237
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

博士論文

句を包摂する接尾辞群に関する認知言語学的研究

提出年月 2022年12月

言語文化研究科 日本語・日本文化専攻

平野 啓太

要旨

本研究で扱うのは句を包摂する接尾辞群である。接尾辞は本来、語レベルに接続し、派生にあずかる非独立的な形態素のことである。しかし、接尾辞の中には、語レベルを超え、句レベルが接続する、つまり句を包摂する接尾辞が存在する。それに属するものとして、動詞連用形及び形容詞語幹に接続するものがあり、この種の接尾辞を影山（1993）に従い、「句接辞」と呼ぶ（本研究では、動詞連用形接続のものにだけ注目する）。一方、終止形に接続し、〈推量〉を表す助動詞としての扱いを受けるものもある。本研究では、前者に関しては「たて」「かけ」「ばなし」「きり」「どおし」「放題」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」「まくり」「すぎ」「がち」「気味」「め」「加減」「そう」を、後者に関しては「らしい」「ぼい」「くさい」を扱う。

これらの接尾辞は「アスペクト」「モダリティ」といった文法の中核的な意味に関わり、日本語の体系にとって重要な役割を担っていると思われるが、同じく「アスペクト」に関わる複合動詞、「アスペクト」「モダリティ」に関わる（形式）名詞に比べ、総合的な研究は少なかったと言える。

これらの接尾辞を扱う先行研究にはいくつかの問題点が見つけられる。

まず、意味記述の問題である。本研究で扱う種類の接尾辞の意味は、個々の研究はあったものの、全体的な研究は少なかった。個々の先行研究および、先行研究がないものについては、辞書や考察を通じて、その意味を記述し、また総括的にその意味同士がどのような関係にあるかを考察する必要がある。

また、複合動詞や（形式）名詞には見られない問題として、品詞性に関わる問題がある。これは特に句接辞に関わるものである。「-の」「-な」の両形式が認められること（「まくりの」「まくりな」など）からわかるように、伝統的な品詞分類に照らせば、句接辞の品詞性は曖昧である。句接辞の品詞的な振る舞いがどのようになっているかは、その性質を知る上で重要である。

そして、もう一つは、句を包摂する接尾辞というカテゴリーの発達という側面である。先行研究で扱われてきた、この種の接尾辞は生産性が高いものが中心であり、これら特定の意味と形式を持った接尾辞群が、どのように用法を拡大し、どのように全体としてカテゴリーを形成していくのかということは注目されてこなかった。

本研究はこれらに対して次のような課題を設定し、主に認知言語学的観点から考察する。

- I. 語が前接する通常の接尾辞に対して、句を包摂する接尾辞は、どのような形式があり、またそれらはどのような意味と品詞的な特徴があるのか。そして、それらの接尾辞同士はどのような意味的、品詞的に連続する関係を結んでいるのか。
- II. 変化の側面に注目した時、これらの接尾辞がどのような用法拡大の経路をたどり、どのように構文ネットワークを形成していくと想定できるのか。

本研究は6章で構成される。

第1章ではまず、本研究における背景を述べる。次に、句を包摂する接尾辞の研究に関する先行研究を取り上げ、その問題点について論じる。そして本研究がとる認知言語学的アプローチの理論的枠組みについて概観し、最後に研究課題の設定と、本研究論文の全体構成の提示を行う。

第2章では、句接辞「たて」「かけ」「ばなし」「きり」「どおし」「放題」「まくり」「すぎ」「がち」「気味」「そう」を扱う。

まず、これらの接尾辞が<既然><途中><動作・出来事の継続><結果状態の継続><動作・出来事の反復><程度><頻度傾向><状態傾向><様態>という意味を持つことを確認する。

次に、その品詞性について、これらの句接辞が第三形容詞性接尾辞と形容動詞性接尾辞（「そう」のみ）に分かれることを確認する。

さらに、同じ第三形容詞性接尾辞に属しながらも、格標示の点から「が」格が後接することがあるか、前接動詞の項が「を」格だけでなく「の」格でも標示できるか、さらに、接尾辞が「もの」を表すことができるかという点で名詞性の強いものから弱いものまで連続していることを論じる。

そして、この連続は、形容動詞性接尾辞「そう」を含め、「-の」「-な」の出現傾向とも対応しており、名詞性が弱いとされるものほど「-な」形式が現れやすいという傾向が見られることを述べる。

第3章では第2章で主に扱ってきた生産性の高い句接辞に、生産性の低いもの（「づめ」「づくし」「づけ」「め」「加減」）を分析に加え、また接尾辞の多義性にも注目し、句接辞の変化の側面に焦点を当てる。

そして、類推・スキーマによる用法拡大の理論を援用し、類似した意味を持つ、異なる接尾辞同士が繋がりを持つことで、用法が広がっていく過程を想定できることを示す。この拡大の過程は現代語のコーパスで採取した用例の観察に基づくものである。

用法の拡大は概して以下のようにまとめることができる。

①類推的な用法の拡大（「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」）

これは、＜継続＞を表し、生産性の高い「どおし」における高頻度の前接動詞である「働く」「歩く」「立つ」などが「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」にも現れるというものである。

②主にスキーマに基づく用法の拡大（「気味」「め」「加減」と「ばなし」「きり」）

これは、例えば＜状態傾向＞を表し、生産性の高い「気味」の前接動詞が、低い頻度で広く「め」「加減」にも現れるというものである。

③意味の広がりを伴うもの（「がち」「気味」と「ばなし」「どおし」）

これは、例えば「がち」「気味」はともに＜傾向＞を表すが、＜頻度傾向＞の意味において生産性の高い「がち」の前接動詞が＜気味＞に現れ、反対に＜状態傾向＞の意味において生産性の高い「気味」の前接動詞が「がち」に現れるという、用法の拡大に、意味の広がりを伴うものである。

ここから、先行研究で扱われてきた句接辞が、閉じたクラスとしてではなく、動的な総体として捉えることができるようになり、このような過程で用法が広がっていくことによって、「句接辞」というカテゴリーそのものをより強固に定着させていくこととなると考えられる。

第4章では形容詞性接尾辞「らしい・ぼい・くさい」を扱う。これらは、接尾辞の段階と助動詞の段階に大きく分けることができる。

接尾辞の段階では、各接尾辞は様々な意味と前接品詞を持つが、＜推量＞の助動詞へとつながるとされるものは、＜モノ的属性＞の意味で名詞接続の場合である。一方、助動詞の段階においては、＜推量＞の意味を表すが、前接要素は名詞と句（終止形）接続である。

そして、「ぼい」「くさい」において比較的近年に起こったと見られる変化について、第3章と同様の立場に立ち、現代語のコーパスの用例を観察することから、これらの接尾辞同士の関係に基づいた拡張の過程を考察する。

「らしい・ぼい・くさい」において起こる拡張は、大きく以下の二つに分類することができる。

①意味拡張に関するもの（＜モノ的属性＞ → ＜推量＞）

これは、生産性が高い「名詞+らしい＜モノ的属性/推量＞」との比較から、「名詞+ぼい＜モノ的属性＞」にも＜推量＞を表す用法が現れるというものである。

②形式的拡張に関するもの（「語（名詞）接続」→「句（終止形）接続」）

これは、①に続いて起こり、生産性が高い「名詞/句（終止形）+らしい<推量>」との比較から、「名詞+ぼい<推量>」にも「句（終止形）接続」の用法が現れるというものである。

続いて拡張が起こる「くさい」は、より定着度の増したスキーマによって拡張が促進されると思われる。

ここで想定される変化の過程は、通時的にも、ある程度妥当性があるものである。

このように「らしい・ぼい・くさい」においても第3章と同様に動的にカテゴリーが形成されていく過程を想定することができる。

第5章では、第4章までに扱ってきた句接辞と助動詞（「らしい・ぼい・くさい」）における意味について、プロファイルの仕方とスケールの意味領域に基づいた認知図式をもって統一的に示すことを試みる。

各句接辞の意味は、時間軸上のプロファイルのされ方、そして、時間軸上のプロファイルが背面にいくにつれ、スケール面が前面に現れてくるという点から、連続的に表すことができるが、これは第1章で示した名詞性の強弱に基づく、句接辞の連続性とも対応していることがわかる。そして、品詞性と意味において、「らしい・ぼい・くさい」もこれに連続して捉えられることを論じる。

また、先行研究で指摘されてきた「他動詞内項の主語化」に対して、認知図式の観察から、句接辞が「単一の事態を捉える」場合に、それが現れることを論じる。

最後に各接尾辞間の連続性と接尾辞の持つ多義的な側面を認知図式によって明確に示す。第6章では、各章のまとめと研究意義、今後の課題を示す。

以上のような考察や議論を行い、本研究では以下のことを主張する。

1) 課題Ⅰに対して

句を包摂する接尾辞は形態・統語的な振る舞いから品詞的な連続性を持っており、その意味についてはプロファイルとスケールのあり方からその連続性を認めることができる。そして、連続する特定の意味と品詞性を持つ「句接辞」、「らしい・ぼい・くさい」、さらにその上位の「句を包摂する接尾辞」というカテゴリーを想定することができる。

2) 課題Ⅱに対して

各接尾辞が意味的類似性と品詞的な同一性を基盤として、生産性の高い接尾辞が生産

性の低い接尾辞に影響することで、新たな用法、意味、形式が拡張していく過程を想定することができる。さらに、それによって特定の形式と意味を持つグループが形成され、全体として「句接辞」、「らしい・ぽい・くさい」及び、さらに上位の「句を包摂する接尾辞」というカテゴリーが動的に形成されていくというモデルを提示することができる。

Abstract

This dissertation is to study a group of suffixes attached to phrasal level. In general, suffixes attach to bases and form derivatives. However, there are some cases that suffixes skip the word level and attach to phrasal level (which is called “phrasal compound”). They attach to continuative forms of verbs and adjective stem as well. This kind of suffixes, according to Kageyama (1993), is called “phrasal affixes” (This dissertation solely focused on the examples of continuative forms of verbs.). On the other hand, there are also suffixes attached as conclusive form and are accepted as auxiliary verbs to show “conjecture”. In this dissertation, regarding the former, “-tate”, “-kake”, “-ppanashi”, “-kkiri”, “-houdai”, “-dooshi”, “-zume”, “-zukume”, “-zukushi”, “-zuke”, “-makuri”, “-sugi”, “-gachi”, “-gimi”, “-me”, “-kagen” and “-sou” were involved. As for the latter, “-rashii”, “-poi”, “-kusai” were involved.

Several issues were found in the previous studies on the above-mentioned suffixes. First of all, there are issues on meaning. Though there are various studies on the meaning of the kind of suffixes mentioned in this dissertation, overall studies are rare. Thus, it is necessary to describe the meaning found on these suffixes in some of the previous individual studies and to analyze the relations among their meaning.

Secondly, there were issues on the part of speech, especially for phrasal affixes. By understanding the usages of both “-no” and “-na”, the part of speech of phrasal affixes are unclear when considering the traditional categorizing standard on part of speech.

It is important to figure out how phrase affixes behaved from the viewpoint of part of speech in order to understanding the nature of the phrasal affixes.

The third issue is the development on the categories for suffixes attached to phrasal level. Previous studies were mainly focused on suffixes with high productivity. No attention had been given to the extension on the usage of those suffixes with specific meanings and forms, or establishment of their overall categorization.

In accordance with the above-mentioned issues, this dissertation set up the studying theme as follows, mainly from the viewpoints of cognitive linguistics.

- I. For general suffixes of phrases, the form of phrasal suffix, the meaning and the characteristics on the part of speech had been studied, as well as how similar suffixes establish the continuous relationship via meaning and part of speech.

II. While attention paying to the aspects of change, the path of usage extension these suffixes followed and the formation of the construction network had been studied.

There are 6 chapters in this dissertation.

Chapter 1 was begun with the background introduction of this dissertation. Previous studies regarding suffixes attached to phrasal level had then been mentioned and discussion was carried out on the issues described. Establishment of studying theme and the presentation of overall structure of this dissertation were conducted.

In Chapter 2, suffixes “-tate”, “-kake”, “-ppanashi”, “-kkiri”, “-dooshi”, “-houdai”, “-makuri”, “-sugi”, “-gachi”, “-gimi” and “-sou” were studied. First, the meanings of “anterior”, “halfway”, “continuity of actions and events”, “continuity of result state”. “repetition of actions and events”, “degree”, “frequency-related tendency”, “state-related tendency”, “appearance” among these suffixes were confirmed.

Next, regarding the part of speech, it was confirmed that these suffixes were separated from the third adjective suffixes and nominal adjectival suffixes (“-sou” only). Moreover, though these suffixes belonged to the same third adjective suffixes, from the point of how arguments are represented, nominality from high to low degree is consecutive.

This consecution, including nominal adjective suffixes “-sou”, are corresponding to the probability of occurrence of “-no” and “-na”, which showed a tendency that object of low degree nominality appeared with the form of “-na” easily.

In addition to the suffixes of high productivity mentioned in Chapter 2, suffixes of low productivity (“-zukume”, “-zukush”, “-zuke”) were analyzed. It also looked into polysemous suffixes, and focused on the aspects of change of suffixes. By applying the theories of analogy / schema, it showed that suffixes of high productivity affected suffixes of low productivity and new usages were therefore extended.

This extension process was based on the observation on the examples obtained by the contemporary Japanese corpora.

The usage extension was concluded as follows.

- 1) Extension on the usage of presuming (“-dooshi”, “-zume”, “-zukume”, “-zukushi”, “-zuke”)
- 2) Extension on the usage mainly based on schema (“-gimi”, “-me”, “-kagen”, “-ppanashi”, “-kkiri”)

3) Extension on the usage together with meaning extension (“-gimi”, “-gachi” “-ppanashi”, “-dooshi”)

“-rashii”, “-poi”, “-kusai” were studied in the Chapter 4 and were categorized into stages of suffixes and stages of auxiliary verb.

Although these suffixes carried various meaning, the focus should be placed on their attachment to nouns and the meaning of “nature of things”. On the other hand, when these suffixes were used as auxiliary verbs, they were attached to noun or phrase (conclusive form) and the meaning of “conjecture” was indicated.

The changes occurred on “-poi”, “-kusai” were found in the recent years. Based on the relations between these suffixes, the process of extension was discussed through the observation on the contemporary Japanese corpora.

Extension occurred on “-rashii”, “-poi”, “-kusai” could be broadly divided into the following two categories. The assumption for following extensions was the same as Chapter 3 that extensions of usages were occurred when those of high productivity affected those of low productivity.

- 1) Those relating to meaning extension (“nature of things” > “conjecture”)
- 2) Those relating to form extension (“phrase (noun) conjunction” > “phrase (conclusive form) conjunction”)

Subsequently, it was considered that the extension of “-kusai” was facilitated through the further strengthened schema.

Chapter 5 attempted to carry out a united presentation for the meanings of the phrase affixes and “-rashii”, “-poi”, “-kusai”, according to the ways of profiling and the semantic domains on scale.

Meanings of each suffix, depending on the way these suffixes profile, were indicated as continuity. It revealed that, in accordance to the degree of strength of nominality, the continuity of the meanings of phrasal affixes were also corresponsive. It could be considered that the continuity on the part of speech and the meaning are linked to “-rashii”, “-poi”, “-kusai”.

In some phrasal affixes, internal argument of transitive verb functions as subject. Through the observation of their image schema, it can be explained internal argument works so only when each phrasal affix captures single event.

Chapter 6 concluded all chapters and the significance of research as well as the research topics in the future.

According to the result of above studies and discussion, this dissertation made an assertion as follows.

For Study I

Suffixes of phrasal compound syntactically held the continuity of part of speech due to its specific meaning and forms, i.e. the continuity could be recognized by the way of profile.

Suffixes attached to phrasal level have specific meaning and continuity of part of speech due to the morphological and syntactic behavior. There was also continuity on meaning through the way of profiling.

For Study II

It was assumed that the extension on examples, meaning and form was occurred by the process that suffixes of high productivity affect those of low productivity, based on similarity in meaning and identity on part of speech. Therefore, it could be supposed that categories of suffixes attached to phrasal level are actively established.

本論文の第2章から第5章は、以下の論文及び、研究発表に基づいており、その後の研究によって明らかになった内容を反映し、大幅に加筆、修正を加えたものである。

第2章：2021年3月 「動詞連用形に接続する接尾辞における句の包摂と品詞性・意味の関係について」『間谷論集』第15号 pp.67-88：大阪

第3章：印刷中 「句接辞における用法の拡大」『間谷論集』第17号

第4章：2019年12月 「推量を表す助動詞群の形成に対する構文スキーマの役割」日本語文法学会第20回大会研究発表（於：学習院大学）

第5章：2021年9月 「スケールを持つプロファイル決定子としての句接辞－「書きたて」「開けっぱなし」「休みがち」などを対象に－」日本認知言語学会第22回全国大会研究発表（オンライン開催）

第5章：2022年4月 「スケールを持つプロファイル決定子としての句接辞－「書きたて」「開けっぱなし」「休みがち」などを対象に－」『日本認知言語学会論文集』第22巻 pp.257-269：東京

目次

要旨	i
Abstract	vi
目次	xi
第1章 序論	1
1.1. はじめに	1
1.2. 先行研究	4
1.2.1. 阪倉（1966a, 1966b）と「句の包摂」	4
1.2.2. 森山（1986）と「包摂のタイプ」	6
1.2.3. 影山（1993）と「句接辞」	6
1.2.4. 新山（2020a）と「統語的述語名詞」	8
1.2.5. 三宅（2005）と「文法化」	9
1.2.6. 青木（2002, 2016a, 2016b）と「通時的研究」	10
1.2.7. 問題の所在	12
1.3. 理論的枠組みと本研究の立場	14
1.3.1. 用法基盤モデル	14
1.3.2. 構文文法	15
1.3.3. 類推とスキーマ	18
1.3.4. 認知図式	22
1.4. 本研究の目的と構成	24
第2章 句接辞と意味・品詞性	26
2.1. はじめに	26
2.2. 意味分類	27
2.2.1. <既然>と「たて」	28
2.2.2. <途中>と「かけ」	28
2.2.3. <継続>と「ばなし」「きり」「どおし」「放題」「まくり」	28
2.2.4. <動作・出来事の反復>と「まくり」	30
2.2.5. <程度>と「すぎ」	31

2.2.6. <傾向>と「がち」「気味」	32
2.2.7. <様態>と「そう」	33
2.2.8. 意味分類のまとめ	34
2.3. 句の包摂と品詞性	34
2.3.1. 第三形容詞性接尾辞	34
2.3.2. 接尾辞における品詞の連続性	37
2.3.3. 句の包摂と名詞性の強弱	40
2.3.4. 「もの」を表す「たて」「かけ」	42
2.4. 「-の」「-な」形式の分布と名詞性の強弱	44
2.5. 句接辞と意味・品詞性のまとめ	46
2.6. 本章のまとめ	46
第3章 句接辞の用法拡大	48
3.1. はじめに	48
3.2. 生産性の低い句接辞	48
3.3. 意味の分類	51
3.4. 各接尾辞の使用実態	53
3.4.1. 「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」	53
3.4.2. 「気味」「め」「加減」と「ばなし」「きり」	56
3.4.2.1. 「気味」「め」「加減」	56
3.4.2.2. 「ばなし」と「きり」	59
3.4.3. 「がち」「気味」と「ばなし」「どおし」	62
3.4.3.1. 「がち」「気味」	62
3.4.3.2. 「ばなし」「どおし」	65
3.4.4. 使用実態のまとめ	67
3.5. 理論的背景と異なる接尾辞間の結びつき	67
3.5.1. 類推とスキーマ	67
3.5.2. 異なる接尾辞間のつながり	68
3.6. 用法拡大の過程	69
3.6.1. 「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」と用法の広がり	70
3.6.2. 「気味」「め」「加減」と「ばなし」「きり」の用法の広がり	73

3.6.3. 「類推」と「スキーマ」の同時的活性化.....	75
3.6.4. 「気味」「がち」と「ばなし」「どおし」の用法の拡大.....	77
3.7. 動機付け.....	79
3.8. 本章のまとめ.....	80
第4章 「らしい・ぼい・くさい」の意味的拡張と形式的拡張.....	81
4.1. はじめに.....	81
4.2. 「らしい・ぼい・くさい」の接尾辞としての意味的な概観.....	82
4.3. 拡張と意味についての先行研究（「ぼい」を中心に）.....	83
4.3.1. 小島（2003）.....	84
4.3.2. ケキゼ（2003a）.....	86
4.3.3. 小出（2005）.....	87
4.3.4. 尾谷（2000, 2005, 2011）.....	89
4.4. 「らしい・ぼい・くさい」の意味分類.....	91
4.5. 定着度の高い前接要素の品詞.....	93
4.5.1. 「ぼい」の前接要素.....	93
4.5.2. 「らしい」の前接要素.....	95
4.5.3. 「くさい」の前接要素.....	97
4.6. 前接要素と定着度.....	98
4.7. 拡張の過程.....	102
4.7.1. 「ぼい」の意味的拡張の過程.....	102
4.7.2. 「ぼい」の形式的拡張の過程.....	104
4.7.3. 高次のスキーマの定着と「くさい」の拡張.....	106
4.8. 通時的変化とスキーマの定着.....	108
4.9. 用法基盤モデルと使用場面.....	111
4.10. 本章のまとめ.....	112
第5章 プロファイルと句を包摂する接尾辞.....	113
5.1. はじめに.....	113
5.2. 理論的概観.....	114
5.2.1. 認知図式.....	114
5.2.2. プロファイル決定子（profile determinant）.....	115

5.2.2. スケール (scale)	116
5.2.3. 接尾辞と認知図式.....	117
5.3. 句接辞と認知図式.....	117
5.3.1. <既然><途中>の認知図式.....	117
5.3.2. <結果状態の継続><動作・出来事の継続>と認知図式.....	119
5.3.3. <状態変化の程度>と認知図式.....	121
5.3.4. <動作・出来事の反復>と認知図式.....	122
5.3.5. <頻度傾向>と認知図式.....	123
5.3.6. <状態傾向>と認知図式.....	123
5.3.7. <様態>と認知図式.....	124
5.3.8. <推量>と認知図式.....	126
5.3.9. 句を包摂する接尾辞が表す意味の連続的な関係.....	127
5.4. 内項主語構造.....	127
5.4.1. 内項主語構造に関する先行研究.....	127
5.4.2. 「気味」「がち」と内項主語構造.....	128
5.4.3. 意味と内項主語構造.....	130
5.4.4. 認知図式からの観察.....	131
5.5. 抽象的な認知図式.....	133
5.5.1. 各意味の連続性と抽象的な共通性.....	133
5.5.2. 多義性と認知図式.....	136
5.6. 本章のまとめ.....	138
第6章 結論.....	139
6.1. 本研究のまとめと主張.....	139
6.1.1. 研究課題の確認.....	139
6.1.2. 第2章のまとめ.....	139
6.1.3. 第3章のまとめ.....	140
6.1.3. 第4章のまとめ.....	141
6.1.4. 第5章のまとめ.....	142
6.1.5. 本研究が扱った領域.....	143
6.1.6. 研究課題に対する主張.....	143

6.2. 本研究の意義.....	144
6.2.1. 構文文法の適用.....	144
6.2.2. 類推的拡張と意味拡張.....	145
6.2.3. 文法カテゴリーに対する位置付けとその形成.....	147
6.2.3.1. 文法カテゴリー内における位置付け.....	147
6.2.3.2. 文法カテゴリー形成に対する示唆.....	149
6.3. 今後の課題.....	150
6.3.1. 句接辞と接尾辞の境界.....	150
6.3.2. 前接要素と周辺の例.....	152
参考文献.....	155
謝辞.....	165

第1章 序論

第1章は序論として次のことについて述べる。1.1節では研究の背景を述べる。1.2節では本研究で扱う句を包摂する接尾辞に関する先行研究を概観し、その問題の所在を指摘する。1.3節では本研究が基づく認知言語学的な理論的枠組みについて概観し、本研究での立場を明らかにする。1.4節では本研究における目的と構成について述べる。

1.1. はじめに

本研究で扱うのは句レベルに接続する、すなわち「句を包摂する」（阪倉 1966a など）接尾辞である。

「単語」は単純語と合成語に分類され、さらに「合成語」は、「複合語」と「派生語」に分類される。複合語は独立して用いることができる二つ（以上の）要素の結合からなるものである。一方で派生語について、阪倉（1986）では次のように端的に説明されている。

派生語と呼ぶのは、「とり」「可愛」「大人」のような基幹になる語（これを語基と呼ぶ）に「こ」「がる」「ぼい」のような要素がついて、^{わか}派れ出た語の意味である。この、語基に接続して派生にあずかる非独立的な（語彙的）形態素がここで問題となる「接辞」であって、そのうち、「こ」のように語基の上につくものを接頭辞（接尾辞）、「がる」「ぼい」のように下につくものを接尾語（接尾辞）と呼ぶ。

（阪倉 1986: 4 下線は筆者による）

下線部のように説明された形態素こそ、接尾辞である。派生語を作る、このような接尾辞は、典型的には形容詞を名詞に変える「-さ」（「寒い」>「寒さ」）や形容詞を動詞に変える「-がる」（「寒い」>「寒がる」）のような、品詞転換に関わるものであり、実質的な意味が薄い。

また、接尾辞は種類が豊富で、(1)のように様々な品詞性のものがあり、ただ品詞転換に関わるだけでなく、様子や性質などの意味が添えられるものも多い。

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| (1) a. 男 っぷり （名詞性） | d. 客観 的 （形容動詞性） |
| b. 春 めく （動詞性） | e. 道 すがら （副詞性） |
| c. おし つけがましい （形容詞性） | |

接尾辞は、「語を形成する要素となる非自立的な形式」という、いわば非常に小さい単位であり、他の文法項目ほど目立たないためか、個別的な研究については枚挙にいとまがないものの、総合的な研究は黄（2004）などの一部を除いては十分にされてこなかった領域であると言える。

このような接尾辞の中で、先ほどの阪倉（1986）の定義に従わない次のようなものが見られる。

- (2) a. 彼は、最近学校をさぼりがちだ。
- b. 彼女は今日、ご飯を食べまくりだった。
- c. 彼は窓を開けばなしだった。
- d. 明かりがついている。彼女は今部屋にいるらしい。
- e. 彼女の様子からすると、昨日のテストはだめだったっぽい。

(2)で見られる接尾辞はいずれも(1)のような語基ではなく、句レベルに接続しており、なおかつ、後述することにもなるが、これらは「アスペクト」「モダリティ」に関する意味を持っており、いわゆる「文法カテゴリー」¹という日本語の体系に欠かせない役割を担っていると言える。

本研究で研究対象とするのは、(2abc)のような動詞連用形²に接続する形、あるいは、(2de)のような終止形（言い切り）に接続する形で句レベルが前接する接尾辞である。

本研究で対象となる接尾辞をあらかじめ示しておく、次のようなものである。

① 動詞連用形に接続するもの

「たて」「かけ」「ばなし」「きり」「どおし」「放題」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」
「まくり」「すぎ」「がち」「気味」「め」「加減」「そう」

¹ 文法カテゴリーは、仁田（2009: 8）によれば、「主として異なるいくつかの文法的意味を1つにまとめる共通する文法的意味」と説明されている。

² 後述するようにサ変動詞に接続する形式や、動詞連用形及び形容詞語幹に接続する形式の可能性もあるが、本研究の対象は動詞連用形だけに限定する。

② 終止形に接続するもの

「らしい」「ばい」「くさい」

複合動詞が「アスペクト」を示すことについて言及する研究は数多い。寺村(1984)では「動詞連用形(V₁) + 動詞(V₂)」という形で複合動詞「-はじめる」「-かける」「-だす」などが三次的アスペクトとして位置付けられている。影山(1993)は複合動詞を統語的複合動詞と語彙的複合動詞に大きく二分するが、統語的複合動詞の多くが「始動(-しかける、-しだす、-し始める)」「継続(-しまくる、-し続ける、)」「完了(-し終える、-し通す、-し抜く…)」といったアスペクト的な意味が中心になると指摘しており(同上: 140)、副島(2007)でも、このようなアスペクト的な意味を表す統語的複合動詞が、かなり生産的に作られていると指摘されている。また、影山(2013)では従来の語彙的複合動詞を主題関係複合動詞とアスペクト複合動詞に再編成し、アスペクト複合動詞(「見逃す」「死に急ぐ」など)のV₂は広い意味で語彙的アスペクトを表しているとしている。

一方、名詞(特に形式名詞など、抽象的な意味を表す名詞)に由来するものが「アスペクト」や「モダリティ」を示すことに関する研究も多い。「認識的モダリティ」(日本記述文法研究会 2003)とされる「ようだ」「はずだ」「わけだ」は(形式)名詞由来であることが知られている。また、新屋(1989)は次のような文の類型を提唱し、「文末名詞文」と名付けている³。

(3) a. 神谷直吉は返事に窮した様子だった。 (新屋1989: 86)

b. 彼は自殺する寸前だった。 (新屋1989: 84)

文末名詞文の意味の類型はここでは詳しく触れないが、新屋(2014: 92)では、実質的な意味を連体部に預けた文末名詞が述定の意味そのものを担うことにより、それぞれの語彙的意味に従い、(3ab)のようなアスペクトやモーダル成分に近づいていくと説明している。

³ 文末名詞文の定義は次のようなものである。

連体部を必須とし、コンピュータを伴って文末に位置し、主語と同値または包含関係にない名詞を便宜上「文末名詞」、文末名詞を持つ文を「文末名詞文」と名付けることにする。
(新屋 1989: 88)

角田(1996, 2011)は同じ構造を「体言締め文」あるいは「人魚構文」という名称で扱っている。

このように、動詞や(形式)名詞の一群がアスペクトやモダリティという文法的な意味に関連付けられて、多くの研究がなされてきたのに対し、本研究で扱う句を包摂する接尾辞、中でも(2abc)のような動詞連用形に接続する接尾辞を一まとめにして扱う研究は少なく、(2)のような接尾辞全体を総括的に扱った研究も管見の限り多くない。しかし、これらの接尾辞群を研究することにより、接尾辞同士の意味、品詞性の点から見た関係、そして相互の影響関係、さらにこれらがアスペクトやモダリティなどの文法カテゴリーが形成される上で、重要な役割を果たしていることが明らかになるという点で、考察に値するのである。

1.2. 先行研究

本研究で扱う個々の接尾辞に関する研究は数多くあるが、それは次章以降に譲り、ここでは全体として、句を包摂する接尾辞に関する研究を概観し、その問題点を指摘する。

1.2.1. 阪倉 (1966a, 1966b) と「句の包摂」

接尾辞が語(語基)を超えたレベルで接続する現象についての先駆的な研究は阪倉の一連の研究である。阪倉(1966a)は、次の(4)のように、「語基に上接する文節をもそのままに包摂し得る」(阪倉 1966a: 209)ものがあることを指摘している。

- (4) a. 求めつる中將だつ人来あひたる。 (源氏・帚木)
b. いはせの森の呼ぶ鳥めいたりし夜のことは・・・ (源氏・早蕨)
c. ものわかりのよい老人ぶつた物言ひをする。

阪倉 (1966a: 204 下線は原文のまま)

阪倉は、このような「句の包摂」現象を発見するだけでなく、それが起こるメカニズムを包容力の拡大と後項要素の意味の抽象化との関係から説明している。

「だつ」が接して構成される語の模型として、

聖・上臈・母君…等々の比較によって抽出されるある属性を意味内容にもつ、名詞的な語基	だつ
---	----

のごときものの存在が想定されよう。そして、その概念内容(また形態)において、こ

の模型の語基の範囲内に入り得る語（たとへば「なさけ」）が、偶然の機会にこの接尾語「だつ」をとることが實現して、（中略）ここに新語「なさけだつ」が形成される。

（中略）それによって、語基の範囲についての制限は多少緩和せられ、さらにいくつかの語が、「語基」となる可能性をもつにいたる。やがて、かうした語基の範囲の擴大が、つひには、他の種類に屬する語（たとへば「やさし」）にも語基となる可能性をあたへるにいたるのであって、それが實現して、新語「やさしだつ」が形成される。（中略）模型の語基はいよいよ擴大し、さらに他の種類に屬する語（たとへば「さかしがる」）にも語基となり得る可能性をあたへるにいたる。それ（「さかしがりだつ」）の實現によって、語基の範囲はまたさらに擴大するであらう。（中略）かくして、語基の範囲が多種類にひろがるにつれて、これに接する接尾語の意味の外延は次第に擴張し、それは當然、内包の縮小をともなつて、つひには、はなはだ抽象的・一般的な意味しかあらはさなくなる。

（阪倉 1966b: 133-134 下線は筆者による）

また、これらの接尾辞は、「語内部の構成要素にとどまらず、かへつてそれをこえて機能するといふ性格をもつ」（阪倉 1966b: 150）としている。

このような性格を持つ接尾辞は、次のような形態素の順序に位置付けられることになる。阪倉（1966a）は助辞と接辞とを截然と分けることに疑問を抱き、「語類」について以下のよ
うな語順を示している。

複合語後項 > （る・らる・す・さす・しむ・たしノ類） > 補助動詞 > 接尾語① > 接尾語
② > 助辞

これらの語類の順序は連続的なものであり、前者から後者に向かうにつれて、後接要素が中心になるものから、上接要素が中心となるものへの勾配をなす。同時に、この順に具象性の高い意味から低い意味を持っていることを表し、さらに後者に至るほど、包容力が大きくなる。そして、阪倉は「接尾語②はやがて助辞に連続すべきものと考えへることができようと思はれる」（阪倉 1966a: 209）と述べている。

1.2.2. 森山（1986）と「包摂のタイプ」

阪倉の研究では、句を包摂する接尾辞の用例は(4)のように名詞接続のものに限られていたが、森山（1986）は現代語で見られる句の包摂について、質的な違いに基づき、次の5タイプに分類している。

1. 固有名詞を自由にとれるし、ある程度引き伸ばせる。引用的な複合ではないか。

『目でみる池田の歴史』展

2. 全体を半ば形容語化する。～用、～風、～向き、～式、～的

災害の起こった時用

3. 臨時的な語彙化の働きを示すもの

進歩派の学者ぶる、大家の坊ちゃんめく、現代の若者っぼい

4. 実質語らしくないアスペクトなどを表す文法形式

(ただしサ変動詞をまるごと含むことができず、動名詞的に直接付加している)

私はその件を調査ずみだ。

アメリカ海軍の第一線で活躍中の戦闘機

5. 格助詞などをそのまま保持して基本的に節（補文）を取るし、接尾語であってもサ変動詞をまるごと含むことができるものである。～そうだ、にくい、やすい、たて、がちなど

雨が今にもふりそうだ。

彼は今朝散髪したただ。

(森山 1986: 22-23 下線は原文のまま)

1.2.3. 影山（1993）と「句接辞」

影山（1993）では句の包摂を「語の内部に句が包み込まれる」（同上: 326）現象と説明している。そして、形態素ないし語を対象とする語彙的な接辞要素が句にまで拡張する場合として、次の(5)のような用例を挙げている。

- (5) a. [テレビのスペシャル番組] 風
- b. [海外の教科書の中のニッポン] 展
- c. [神戸港に着く外国観光船の乗客] 向け

d. [ブランデーの水割り] 党

(影山 1993: 326-327 より抜粋)

またそれに加えて「もともと句ないし節を対象とする」(同上: 329) 句接辞 (phrasal affix) を挙げ、上記の語彙的接辞が句に拡大した場合は、不安定な感じが付きまとうのに対して、これら句接辞の場合は日本語として何ら不自然さを感じられないということが指摘されている。句接辞は以下の(6)(7)のように「接続詞的なもの」と「名詞的なもの」に大別されている。本研究で扱う接尾辞は(7)のような「名詞的なもの」のうちの一部、動詞連用形(及び形容詞語幹)に接続するもの(「そう」「ぱなし」「気味」「きり」「がち」「たて」「放題」)に相当するが、以降、本研究でも、このタイプの接尾辞に対して「句接辞」の名称を用いることにする。

(6) (「接続詞的なもの」)

- | | |
|------------------------------|------------------------|
| a. [アルバイトし] <u>ながら</u> 大学に通う | f. [友人を訪ね] <u>がてら</u> |
| b. [真実を知り] <u>ながら</u> | g. [学校から帰り] <u>しなに</u> |
| c. [そう思い] <u>つつ</u> | h. [羽田を離陸] <u>後</u> |
| d. [後ろを振り向き] <u>ざまに</u> | i. [仕事が片付き] <u>次第</u> |
| e. [買い物に行き] <u>ついでに</u> | |

(7) (「名詞的なもの」)

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| a. [いまにも雨が降り] <u>そう</u> (だ) | f. [お金を借り] <u>っぱなし</u> |
| b. [なにか言いた] <u>げ</u> (だ) | g. [仕事に追われ] <u>ぎみ</u> |
| c. [仕事にかかり] <u>っきりだ</u> | h. [授業を休み] <u>がち</u> |
| d. [爛をし] <u>たて</u> の酒 | i. [ビールを飲み] <u>放題</u> |
| e. [マンションを契約] <u>済み</u> の人 | |

(影山 1993: 329-330 下線は原文のまま)

その構造について、句接辞は統語的複合動詞と同様、「宏は [卒論を書き] 終えた」のような統語的埋め込み構造を取るとされる。また、以下の(8)のように、語彙的と思われる合成語は項が「の」格で現れるのに対し、統語的な接尾辞である句接辞は、項が「を」格、「が」

格などで現れる。

(8) 項の格標示

語彙的：酒の/*を [飲みっぷり]
糠漬けの/*を [食べごろ]
ドイツリートの/*を [歌い手]
統語的：[電気を/*のつけ] っぱなし
[宿題を/*の忘れ] がちな生徒
[アルバイトを/*のし] ながら

(影山 1993: 330)

1.2.4. 新山 (2020a) と「統語的述語名詞」

新山 (2020a) は統語的に語が形成される複雑述語について、(7)の句接辞も含まれるとし、それらを「統語的述語名詞」及び「形容詞型の複雑述語」に分類している。

(9) 統語的述語名詞：ぱなし、たて、すぎ、かけ、まくり、気味

(10) 形容詞型の複雑述語：そう、げ、がち、たい、やすい/にくい

(新山 2020a: 246)

(9)(10)の区分に関して新山は、(9)が一貫して修飾部に「-の」形式を用いるという形態的特徴を持つことをその分類の根拠にしている。本研究で扱う句接辞は、(9)(10)内では「ぱなし」「たて」「すぎ」「かけ」「まくり」「気味」「そう」「がち」であり、二つの分類に跨って存在する。

新山 (2020a) の関心は主に統語的述語名詞についてであるが、「名詞述語文を形成する」、「状態述語を形成する」という特徴を持つことを指摘するとともに、その意味について阿久澤 (2018) が複合動詞について分類したアスペクト的な意味に照らして、これらの意味分類を行なっている。すなわち、本研究で扱うものに限って示せば、「ぱなし」「まくり」は<継続>⁴、「たて」は<完了>、「すぎ」は<過剰>、「かけ」は<予期>、「気味」は<習慣>、

⁴ 以後、本研究で意味を表す場合には<>の記号を用いることにする。

また、「がち」は<習慣>に近いアスペクト、「そう」はモーダルな意味を表すことになる。

そして一部の形式には、(11)のように他動詞の内項が主語になること（「内項主語構造」）が可能だと述べている。

- (11) a. 本が置きっぱなしだ。
- b. パンが焼きたてだ。
- c. ビールが冷やしすぎだ。
- d. チョコレートが溶かしかけだ。

(新山 2020a: 247)

1.2.5. 三宅（2005）と「文法化」

1.2.3 節、1.2.4 節で扱った句接辞から「らしい・ぼい・くさい」に対象を変える。これらは、いずれも形容詞性接尾辞であり、句レベル（終止形（言い切り））に接続し、助動詞的なものとして振る舞う。これらを対象とした個々の研究は枚挙にいとまがないが、それは第4章で扱うことにし、ここでは「文法化」の観点から、これらの形容詞性接尾辞から助動詞への変化について、まとめて考察している三宅（2005）に触れるに留める。

文法化とは Hopper & Traugott（1993）で次のように説明されている変化のことである。

文法化とは、語彙項目や語彙構造が、ある言語の文脈の中で文法的な機能を果たすようになる過程で、いったん文法化が進むと、一層文法的な機能を果たす語に変化し続ける。

(Hopper & Traugott 1993: xv ; 日野訳 2003: xv)

三宅（2005）では、接尾辞「らしい」と似た意味を持つ接尾辞を持つ「ぼい」「くさい」が存在することを指摘し、接尾辞から助動詞に変化した「らしい」に対し、「俗語」の域を出ないものの「ぼい」「くさい」にも助動詞的な用法を観察することができるとしている。

(12) 男らしい, 男っぼい, 男くさい (三宅 2005: 64)

(13) 彼はどうやら試験に合格できなかったらしい (三宅 2005: 64)

(14) あっ、ケイタイ、忘れたっぼいくさい (≒らしい) (三宅 2005: 71)

そして、このような接尾辞から助動詞への変化が文法化と言えるかどうかについては保留している。

1.2.6. 青木（2002, 2016a, 2016b）と「通時的研究」

青木（2002, 2016a, 2016b）は本研究で扱う、動詞連用形接続（及び形容詞語幹接続）で句を包摂する接尾辞（「がち」など）や終止形（言い切り）に接続して句を包摂する接尾辞（「らしい」など）に関する通時的変遷を研究している。

青木は接尾辞において、合成語が述語句あるいは接続句へ拡張していく場合があることを指摘しており、句の包摂を通時的な「拡張」現象として捉えている。そして、現代語で見られない古代語の句の包摂として、(15)のような「かほ（顔）」「やう（様）」「げ（気）」の例を挙げている。青木は、このような拡張がいずれも文末部、あるいは接続部で「ナリ」または「ニ」を伴う形で起きていることに注目し、「形容詞（形容動詞）」または「接続詞」という、ある種の連用形成分が形成され、動詞連用形（及び形容詞語幹）といった形式が再び用言性（青木 2016a, 2016b では「述語性」）を発揮することで拡張が起こったのだと主張している。

(15) a. つまちかき梅ばかり、[春をしらせ] 顔にひらけわたりて

（「夜の寝覚」二 11 世紀後半か、青木 2002）

b. この [御参りをさまたげ] やうに思ふらんはしも、めざましきこと

（「源氏物語」竹河 1008 年、青木 2002）

c. 御前いとあまた、こと／＼しうもてないて渡い給さま、いみじう [心に入り]
げなり

（「浜松中納言物語」三 11 世紀半ばか、青木 2002）

このような接尾辞について、青木（2016a）では影山（1993）が、句接辞に対し、もともと統語的であると指摘したことを早計だと考え、(6)(7)のような現代語の句接辞も、同じ過程の歴史的変化の結果によるものではないかと考えている。

さらに、青木（2016a, 2016b）は、接尾辞から「助動詞」への変化も扱っており、その例として(15bc)に挙げた「やう（よう）」や「げ」などをその例として説明している。青木（2016a,

2016b) は「げな⁵」「ようだ」「そうだ」のような助動詞が、以下の(16)の段階を経て成立したとする。

(16) a. 語「～ゲナリ」。「～」は形容詞語幹・動詞連用形。

にくげなり、あはれげなり、ありげなり

b. 名詞句「～ゲ」+「ナ」。「～」は活用語連体形、「ナ」は活用する。

[_{NP} 流るるげ] な、[_{NP} 有ったげ] な

c. 文「～」+「ゲナ」。「～」は活用語終止連体形、「ゲナ」は活用しない。

[_S 此の如くしてある] げな、[_S 此の心ちゃ] げな

(青木 2016a: 21)

青木 (2016a, 2016b) は「げな」において、接尾辞「げ」が形式名詞的に捉えられて述語連体形によって修飾されるようになり ((16a)>(16b))、ここから<様子>という意味が「げな」という形態に焼き付けられ、助動詞としてのモダリティ形式になったとしている ((16b)>(16c))。

このような接尾辞から、再分析 (reanalysis) による助動詞への変化は、近代以降の「連体形終止の一般化」以降に起きており、連体形が文中だけでなく、文末で用いられるようになったため、(17)のような再分析による構造変化が可能になったとしている。

(17) 連体節：古典語：[[連体形 (従属節)] +ヤウ] ナリ。

現代語：[連体形 (主節) ヨウダ]。

(青木 2016a: 92)

「らしい」の変化も、このような接尾辞から助動詞へという、時代を通じて普遍的に見られる変化⁶の中に位置付けられており、青木 (2016b: 415) は、山本 (2012) における「らしい」の研究では「前接する名詞から名詞節へと拡張し、名詞節を構成する連体形述語 (= 準

⁵ 「げな」は、今日では共通語において見ることができないが、西日本の方言として残存している（「彼は知らんげな」(山口方言) など）と青木 (2016a, 2016b) で説明されている。

⁶ 小柳 (2018) はこのような「派生接辞が文法的な意味を持つ機能語になる変化」のことを「昇格機能語化」と名付け、この種の接辞を資材とした機能語の生産は時代が下がるほど見出せなくなるとしつつ、現代語における稀な例として「ばい」の助動詞化を取り上げている。

体句) が主節述語に再分析されることによってモダリティ形式が生み出された」というプロセスが示されているとして、次のような変化としてまとめている。

(18) [準体句 [連体形] らしい] . → [[述語句 [連体形] らしい] .

(青木 2016b: 416)

ここでの山本 (2012) は、明治期の「らしい」の使用に注目した研究である。山本は(19ab)のような、準体助詞「の」や形式名詞「もの」を伴う用例に注目しており、同時期の(20)のような動詞が接続する用例についても「動詞などに付くようになったとは言っても、その動詞は連体形で、名詞節 (準体句) の述部なのではないか」(同上: 179) と考察している。

(19) a. 幾許か溜^{いくらため}て帰つて来るから暫時辛抱^{しばらく}して呉れといふやうな工合で彼地へ渡つたのらしい様子

(「好因果」 1890 年、山本 2012)

b. 只見れば二三の兵卒^{へいたい}上りの人足が家財を運んで階段の溜段^{たまりだん}を塞げてみたは、同宿^{どいつ}の独乙官吏の一家が愈々引越すものらしく思はれた。

(内田魯庵訳「小説 罪と罰」 1892 年、山本 2012)

(20) (パン屋「お腹が空てやしないの?」、セイラ「エー大変空いてるんです」という会話をして別れた後で) どふして／＼、中／＼お腹はすいてたらしかつたもの。

(若松賤子訳「セイラ、クルーの話」 1893 年、山本 2012)

青木 (2016a, 2016b) はさらに近代以降、「らしい」と同様に接尾辞から助動詞への変化が起こった用例として「ぼい」「くさい」を挙げている。

そして、青木 (2016b: 416) はこのような変化をまとめて、「接尾辞に前接する要素が語から句へ拡張することは歴史を通じてしばしば観察されることであるといえる。さらに近代語以降においては、接辞要素が語 (助動詞) へと変化する事例も、様々に見られる」としている。

1.2.7. 問題の所在

ここで先行研究の問題点をあげる。

まず、意味記述の問題である。青木（2016a, 2016b）において、句を包摂する接尾辞への変化は、通時的にしばしば起こってきたことが明らかにされているが、現代語におけるこれらの接尾辞を共時的に観察したとき、「特定の意味」を持っていることが窺われる。その意味記述について、「らしい・ぼい・くさい」は多くの研究では＜推量＞を表すとされている。一方、先に挙げた新山（2020a）では、複合動詞の意味記述に照らし合わせて、句接辞に相当するものに対し、簡潔にアスペクト的な意味のラベルをつけている。他方、仁田（2013）は従来のモダリティをより広く捉えようと試み、「発話・伝達のモダリティ」「（言表）事態めあてのモダリティ」に加え、「客体的モダリティ」を設定しているが、新山（2020a）で＜習慣＞というアスペクト的な意味が割り振られていた「がち」は、＜傾向＞を表し、この客体的モダリティに属するとしている。また、仁田（2013）は直接言及していないが、同じく新山（2020a）が＜習慣＞を表すとした「気味」についても、井上（1998）など「がち」と同様＜傾向＞を表すものという研究が多くあり、これも客体的モダリティに属すると思われる。このように、アスペクトとモダリティの連続の中に句接辞があることが窺われる。また、新山（2020a）自身も主張しているように、これらの句接辞は「状態述語」である。そのため、複合動詞と違い、これらが表す意味も「状態述語」の性質に沿ったものであると考えられる。そういった点で、複合動詞での意味分析の研究成果をそのまま当てはめるのではなく、先行研究では扱われてこなかったものも含め、個々の先行研究が存在する場合はそれに照らし、見当たらない場合は、辞書的記述などを通してその意味を改めて記述していくことは意義があることだと考える。また、特定の意味を持つ句接辞及び、「らしい・ぼい・くさい」の意味がどのような関係にあるのかを考察することも価値があると考えられる。状態述語の性質から、複合動詞とは違った意味の関係が見えることが予想されるからである。

一方、先行研究では詳しく考察されず、複合動詞や文末名詞文、あるいは形容詞性接尾辞「らしい・ぼい・くさい」にはない、句接辞の性質がある。それは品詞性に関わるものである。本研究で扱う句接辞は、新山（2020a）での統語的述語名詞と形容詞型の複雑述語に跨るものであるが、新山がその分類に際し、前者が一貫して「-の」形式が用いられることを基準にしたことは先に述べた。しかし、直観的にも「まくりの」「まくりな」（「統語的述語名詞」と「がちの」「がちな」（形容詞型の複雑述語）はいずれも可能だと思われ、両者を分かつ基準としては絶対的でないことは明らかである。これら句接辞における「-の」「-な」形式の分布や、品詞性に関わる振る舞いがどのようになっているかは、句接辞の性質を知る上で重要であると思われる。

もう一つは「句を包摂する接尾辞」というカテゴリーの発達という側面である。接尾辞が句を包摂するようになるメカニズムについては阪倉（1966a, 1996b）で、通時的変遷については、網羅的ではないものの青木（2002, 2016a, 2016b）ですでに提示されてきた。しかし、このような個々の接尾辞が語彙的なものから文法的なものになっていく過程とは別に、特定の意味と形式を持った接尾辞がどのように集団的に現れていくのかということについて、先行研究は考察してこなかった。例えば、＜推量＞を表す接尾辞（助動詞）は、「らしい」だけでなく、「ばい」「くさい」も存在する。これは、先行研究で扱われてきた句を包摂する接尾辞は限定的で、生産性が高いものが中心であり、カテゴリーの形成という側面には目が向けられてこなかったということに起因すると思われる。同じような接尾辞が他にどのようなものがあるかを探り、これらの句を包摂する接尾辞というカテゴリーの成員がどのように増えていき、逆にどのような成員の集合から、句を包摂する接尾辞というカテゴリーが形づくられているかについて考察することは、句を包摂する接尾辞の総括的な研究のために重要であると考えられる。

1.3. 理論的枠組みと本研究の立場

本研究は課題に対して認知言語学的アプローチで取り組むことになるが、本節では、その理論的枠組みについて概観する。

1.3.1. 用法基盤モデル

用法基盤モデル (Usage-based model) (Langacker 1987, Langacker 2000, Barlow and Kemmer 2000 など) について、その概要を述べる。用法基盤モデルという用語の初出は Langacker (1987) であるが、このモデルは構文文法研究の流れを汲み、現在これらにおいて欠くべからざる理論となっている。

用法基盤モデルは生成文法の「極小主義 (minimalist)」「還元主義 (reductive)」「トップダウン (top-down)」を批判するものであり、その特徴は Langacker (2000) で、概して以下のようにまとめられている。

極大主義 (maximalist) :

言語習得における経験の役割を最小にしようとする生成文法とは異なり、言語の学習には膨大な量の学習が必要であることを認め、その余剰性の高さを認めるということ

非還元主義 (non-reductive) :

規則とリストは相容れないという生成文法における rule/list の誤謬に反し、言語学習における心理学的妥当性からも、文法システムの中に規則も具体的な事例も共に含めるということ

ボトムアップ主義 (bottom-up) :

高次のスキーマであろうが、それは具体的な事例に基づいており、具体的な事例から適用範囲の狭い規則性を表現する抽象度の低いスキーマが抽出され、そこから徐々に規則性の高い、より高次のスキーマが抽出されていくということ

本研究ではこのうち、特にボトムアップ主義を重視するが、これについてももう少し詳しく確認すると、山梨 (2009) が次のようにその特徴をまとめている。

用法基盤のアプローチでは、認知主体の言語使用や言葉の習得過程にかかわるボトムアップ的アプローチを重視する。このアプローチでは、言語現象の規定に際し、まず具体的な言語事例の定着度、慣用度との関連でスキーマを抽出していくプロセスに注目し、この抽出されたスキーマとの関連で他の具体事例の一般化を図っていく。また、このスキーマに適合しない事例が出現した場合には、スキーマの動的な拡張のプロセスとの関連で新しい事例の適否を規定していくという、言語使用を重視したアプローチを取る。

(山梨 2009: 135)

本研究はこのアプローチに則り、作例ではなく、コーパスや Web を使用して実際の言語使用とその生起環境のデータを収集し、分析に臨む。

1.3.2. 構文文法

構文 (construction) とは、Goldberg (1995) に従えば、以下の通りである。

C が形式と意味の対応物 $\langle F_i, S_i \rangle$ をなし、 F_i または S_i のある側面が C の構成要素から、または他の既に確立した構文から、厳密に予測することができない場合、そしてその場合に限り、C は「構文」である。

(Goldberg 1995: 4; 児玉・野沢訳 2009: 47)

また、構文文法初期の研究である Fillmore et. al (1988) は次のような let alone 構文を扱っている。

(21) A: Did the kids get their breakfast on time this morning?

B: I barely got up in time to EAT LUNCH, let alone COOKING BREAKFAST.

(Fillmore et. al 1988: 512)

生成文法においては、文法知識は語彙項目のレベル (lexicon) と統語的レベル (syntax) に二分されるが、上の用例はこれらでは十分に説明できず、「構文」という単位を設定する必要性があるとされる。

また、Goldberg (1995) は、意味的に統語的にも関連のある構文間の関係を示すために「継承リンク」(inheritance link)を設定している。すなわち「構文 A が構文 B を動機づけているといえるのは、構文 B が構文 A を継承している場合であり、またその場合に限られる。二つの構文が、ある側面では同じであるのに別の側面では異なることがあるという事実を、継承によって捉えることができるようになる」(Goldberg 1995: 72; 河上ら訳 2001: 99) としている。そして、以下の図 1.1 のように継承リンク (I_I (具体例のリンク)、I_S (部分関係のリンク) は継承リンクの下位分類) が示されるが、この図のように、構文はばらばらではなく、お互いに動機づけられたネットワークを成すものとして捉えられる。

本研究でも構文がどのようなネットワークを作っていくのかを重視する。

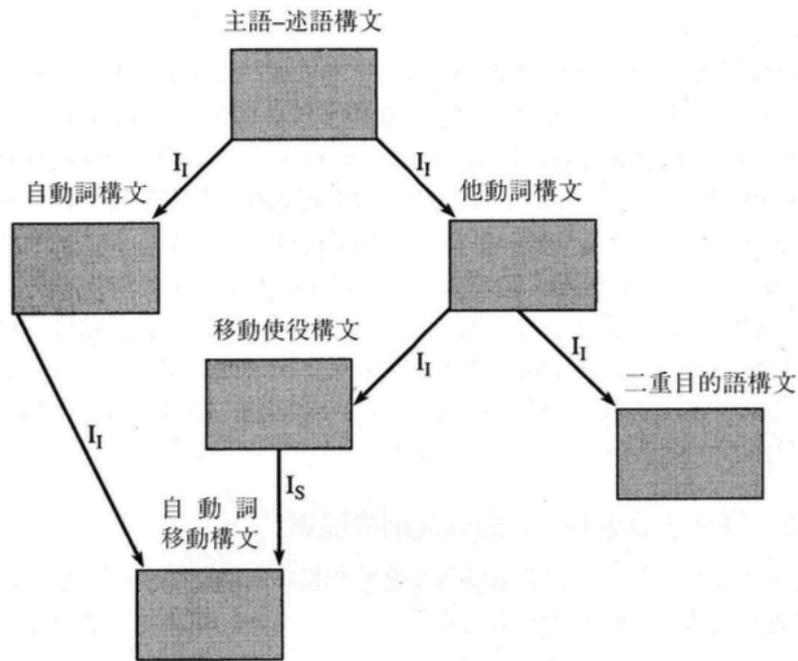


図 1.1. 構文ネットワーク (Goldberg 1995: 109 ; 河上ら訳 2001: 145)

構文文法は研究者によって立場が異なる部分が多い理論であるが、村尾 (2013a) は認知言語学における構文観は、だいたい、次のような項目にまとめることができるとしている。

(22) 構文は形式と意味が対となった記号である

構文間はネットワーク構造を成して言語知識を構成する

構文理論は使用基盤モデル (*本研究での用法基盤モデル) に依拠する

(村尾 2013a: 209)

これは本節内でここまで述べてきたことをまとめたものとなっている。

また、構文文法における「構文」の定義は研究者間によって異なる。Goldberg (1995) で定義された構文の定義は、Goldberg (2006) では次のように修正されている。

いかなる言語パターンも、形式あるいは機能のある側面が構成要素あるいは他の構文から厳密に予測できない場合、「構文」として認める。加えて、たとえ形式あるいは機能のある側面が、構成要素あるいは他の構文から完全に予測することができるとしても、

そのパタンが高頻度で生起する場合には「構文」として認める。

(Goldberg 2006: 5 ; 児玉・野澤訳 2009: 47-48)

つまり、「構成性の原理」に従う場合も、言い換えると、完全に分析的と思われるような場合にも構文として認められる。さらに、Goldberg (2013) では次のように定義されている⁷。

(23) Constructions are defined to be conventional, learned form-function pairings at varying levels of complexity and abstraction

(Goldberg 2013: 13)

本研究では、Goldberg (2013) の構文の定義に従い、分析的なものも構文に含め、様々な複雑さと抽象性のレベルにおいて構文は存在すると考える。

また Booij (2010) は構文形態論 (constructional morphology) を唱え、構文文法が従来、句やイディオムを単位としていたのに対し、「構文」概念を形態論の分析 (morphological analysis) の領域に援用して発展させているが、本研究が扱う接尾辞も構文文法の対象となっていることわかる。

本研究ではここまでをまとめた(22)のように構文を捉え、上記のように構文の定義は(23)に従うものとする。

1.3.3. 類推とスキーマ

新たな表現パターンを生み出す方法については、類推 (analogy) に基づくか、スキーマ (schema) に基づくかという議論が長くなされてきた (Booij 2010: 88)。

類推は、Bybee (2015) を参考にすると「既存の形式やパターンに基づいてある形式を作り直すこと」(Bybee 2015: 112 ; 小川・柴崎監訳 2019: 146) と定義できる。類推では、必ずしもそうである必要はないが、次の(24)のように事例を並べた四項比例式でしばしば表される⁸。

⁷ 他にも Taylor (2012) では、構文とは、「学習の結果から得られた、話し手の言語知識の部分を構成するあらゆる言語要素」(Taylor 2012: 126 ; 西村ら訳 2017: 201) を指すものとされている。

⁸ 日本語の語形成においても、例えば、西尾 (1988) は複合語についての類推的創造 (analogical creation) を次のように述べている。

(24) seem : seemed :: dream : dreamed

(Bybee 2015: 94 下線は原文のまま)

一方、認知言語学では、新表現を形成する場として抽象的なスキーマを重視する立場もある。

類推とスキーマ、どちらに基づくかについての研究において、例えば、Kay (2013) は all-cleft 構文が生産的で、ルール (本研究でのスキーマ) に従うのに対し、A as NP[very“A”]のパターンは、下の(25)のように多くの表現がこれに当てはまるが、これを元に自由に新たな表現を生産することはできない、つまり字義通りの解釈になるとし、この場合、類推 (に基づく coinage) によって可能なパターンが作られると考えている。

(25) dumb as an ox / green as grass / dead as a doornail / happy as a lark / strong as an ox / flat as a pancake

(Kay 2013: 37 より抜粋)

しかし、類推とスキーマが二者択一という考えには批判もあり、例えば Langacker (2000) は次のような主張をし、純粋に類推のみだと思われるアプローチにも何らかのスキーマ (共通性) の抽出が必要になるとしている。

純粋に類推だけにに基づき、いかなる抽象化もスキーマの抽出も想定しないようなアプローチは、言語に見られるパターンは一般性の低いものから高度に一般的なものまであらゆるレベルの一般性を持つという使用依拠的な考え方にはっきり反するものであ

複合語が新たに形成されるのは、既存の複合語の実例が作り出している「型」をモデルとして類推的創造 (analogical creation) が行われるためである。したがって、ある型が有力であるかどうか、生産的な語形成様式であるかどうかは、その型に属する実例数の大小によるどころが大きいであろう。

西尾 (1988: 109)

また、石井 (2007) は、同じく複合語の形成において、西尾が言及した類推的創造の働きを認めており、「朝日記」という語について「朝に (から) 日記をつけること」という命名概念からの複合名詞化が、「朝酒」や「朝風呂」とまったく無関係に、個別に起こったと考えるよりも、適当であろう。」(石井 2007: 191) と述べている。

る。それだけでなく、そうした考え方はそもそも矛盾していて、(類推の基盤として必要になる) 個々の具体的な表現の習得さえも実際の使用事象からの抽象化やスキーマの抽出を必要とすることを見落としている。

(Langacker 2000: 59 ; 坪井訳 2000: 138-140)

つまり、(24)のような、事例レベルの比例式も、何らかの共通性を背景にして初めて成立するということである。

Tuggy (2007) は-jet の発達を類例とし、それが inkjet から始まり、次に inkjet を類推の基盤として、特有のプリンターのブランド名のために deskjet や laserjet などの語が作られ、そこから拡張して N-jet、さらには V-jet (Thinkjet など) や Adjective-jet (Quietjet など) のように広くスキーマに基づき、新表現が生まれるようになっていったとしている (図 1.2) ⁹。Tuggy はこのようにスキーマが抽出されるまで、類推が喚起されるとしつつ、認知文法では両者の違いは程度問題であると述べ、両者が同時に活性的になると主張している。

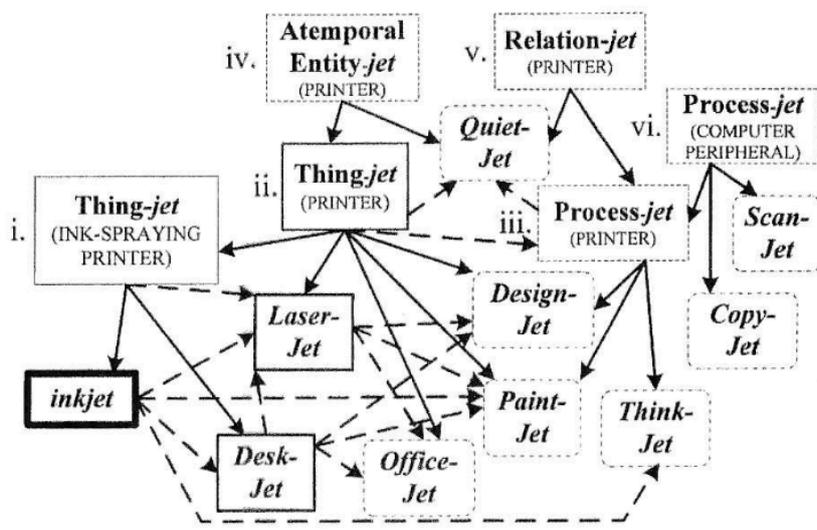


図 1.2. Example of analogy (Tuggy 2007: 102 より抜粋)

同様に、Booij (2010) は、「何かについての政治的スキャンダル」を表す -gate (英語からの借用) について、オランダ語母語話者が次のような事例を作ることを紹介している。

⁹ Tuggy (2007: 114 注) は-jet などの新語形成の経路を描く上で、「仮に歴史的な順序が実際に違ったとしても、上の経路は、初めてこれらの表現を聞いた者の経験を表すことができている」と述べている。本研究も通時的過程を保証するものではないが、現代語話者が心内に持つ文法を表していると考えている。

- (26) a. kippen-gate ‘chicken-gate, scandal concerning chickens’
 b. Stadion-gate ‘financial problems concerning renovation of the Olympic Stadium’
 c. Zuid-Holland-gate ‘financial scandal concerning the province of Zuid-Holland’

(Booij 2010: 90)

この時、話者は元来のモデルである Watergate を直接参考にする場合（つまり、類推の場合）も、(27)のようなスキーマを合成に利用する場合もあり、区別がつかないと述べている。

- (27) [[x]N_i [gate]N]N_j ↔ [political scandal pertaining to SEM_i]j

(Booij 2010: 94)

類推とスキーマがどのような段階で働くかについては、通時的な研究である Traugott & Trousdale (2013) でも考察されている¹⁰。Traugott & Trousdale は、snowclone（特定の表現を入れ替えて作ることができる、もじり語のようなもの）について語彙的構文化の例を挙げている。

- (28) a. Junior’s **not the sharpest knife in the drawer.**
 b. she’s as nutty as fruitcake, a stuck-up mean girl, and **not the brightest bulb in the park**
 c. Poor Bill Frisk was **not the quickest bunny in the warren.**

(Traugott & Trousdale 2013: 224)

これらは、[[not the ADJest N₁ in the N₂]] ↔ [‘not very clever’]で形式化され、sharp / bright / quick などのメタファー的に「知性」に関係する形容詞を使い、かつメタファー的ではない

¹⁰ 石崎 (2020: 14) は、文法化研究と構文文法研究の発展に相まって 2010 年ごろから、Traugott & Trousdale (2013) などをはじめとする「通時的構文文法的とよべるような研究」が見られるようになったと述べている。この研究で扱う「構文化」(constructionalization) とは、早瀬 (2019: 215) を参考にすると、従来の「文法化 (内容語 > 機能語)」と「語彙化 (機能語 > 内容語、あるいは内容語 > 内容語)」という、相反する歴史変化を包括的に扱おうとするものであり、新しい形式や意味が作られた場合、まず構文を生じたとみなすものである (構文化)。この場合、内容語になるか機能語になるかの方向性は定まっておらず、この構文に基づき、機能語的な表現ができれば文法的構文化が、内容語相当の表現が産出されれば語彙的構文化が起こったことになるが、その区別はあくまで連続的であるとされる。

意味も利用しており（例えば、ナイフ (knife) は鋭い (sharp) 先端を持つことで知られることなど）、元の具体的な表現に基づく類推が働いていたと思われるが、次第に意味が抽象化し、知性を表す意味が一般的になり、‘not very clever’ から‘not very ADJ (metaphorical)’ へと変化していく。下の例では sweet がメタファー的に pleasantness に結びつき「そんなに楽しくない(not very pleasant)」といった意味を表している。

(29) He's **not the sweetest candy in the box**, but I would be real reluctant to accuse him of this level of lying about Paul's stance.

(Traugott & Trousdale 2013: 225)

本研究でも、Tuggy (2007) や Booij (2010) などの先行研究を支持し、具体的な事例に基づく類推と、抽象的なスキーマは二者択一ではなく程度問題であり、ある時は、より具体的なレベル（類推）、ある時は、より抽象的なレベル（スキーマ）に基づくことで、新たな表現パターンを生み出していくと考える。

1.3.4. 認知図式

Langacker (2008) では、次の図 1.3 のような認知図式が提示されているが、これは、左図は「モノ」をプロファイルし、右図は「プロセス」をプロファイルしており、名詞は抽象的には左図のように、動詞は抽象的には右図のように定義される。

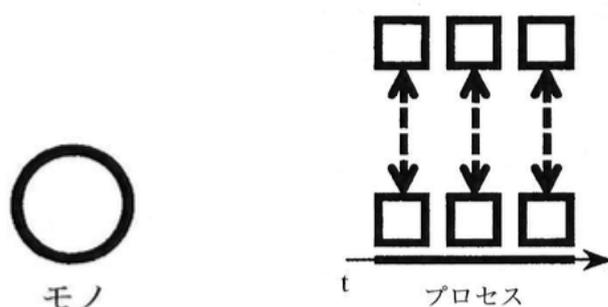


図 1.3. 基本カテゴリーの定義 (Langacker 2008: 99 ; 山梨監訳 2011: 126 より抜粋)

Langacker (2008) は認知文法 (cognitive grammar) において、図式を用いる有用性について

て、次のように述べている。

図表は本質的に**理解を手助けするもの**であると考えている。どのように慎重に描かれた図表であっても数学的な厳密さは欠けている。しかし、作成過程において、分析者は、意味の記述と文法の記述の際に普通は無視される、無数の詳細な記述を吟味しなければならない。図表の大半は、ほとんどの目的を達成するために正確に描かれており、明示的でわかりやすく、発見を促すようなある種の有用性も兼ね備えている。

(Langacker 2008: 10 ; 山梨監訳 2011: 12 太字は原文のまま)

このように Langacker は認知図式を用いることの発見的 (heuristic) な意義を主張している。実際に、同じく Langacker (2008) では、前置詞と副詞の共通性や、名詞における可算／質量と動詞における完了／未完了の区別の類似性 (図 1.4) など、認知図式を用いることで、以前は気付かれなかった関係を効果的に示している。

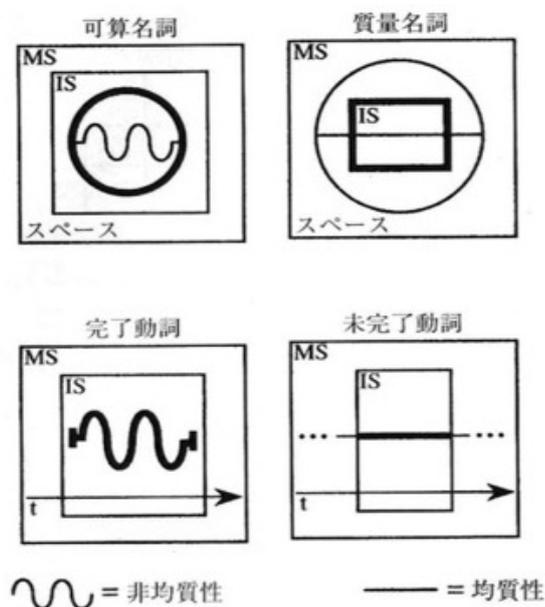


図 1.4. 名詞と動詞の対応 (Langacker 2008: 153 ; 山梨監訳 2011: 194 より一部改変)

例えば図 1.4 は、端的に言うと、可算名詞はプロファイルされるモノが、直接スコープ (IS) の中で区切られており非均質的であるが、完了動詞もプロファイルされた関係が時間軸で変化するために非均質的であること、質量名詞はプロファイルされるモノが、直接スコープ

の中で区切られておらず均質的であるが、未完了動詞も安定した状況の継続をプロファイルするために均質的であるという平行性が明示的に示されている。

本研究でも効果的に接尾辞同士の関係を示すために認知図式を用いることになる。

1.4. 本研究の目的と構成

ここで、本研究の目的として次のような研究課題を設定する。

- I. 語が前接する通常の接尾辞に対して、句を包摂する接尾辞は、どのような形式があり、またそれらはどのような意味と品詞的な特徴があるのか。そして、それらの接尾辞同士はどのような意味的、品詞的に連続する関係を結んでいるのか。
- II. 変化の側面に注目した時、これらの接尾辞がどのような用法拡大の経路をたどり、どのように構文ネットワークを形成していくと想定できるのか。

本研究の構成は下の図 1.5 のようになり、第 2 章、第 3 章は句接辞を、第 4 章では「らしい・ぼい・くさい」を扱うことになる。

第 1 章では、まず本研究における背景を述べる。次に、句を包摂する接尾辞の研究に関する先行研究を取り上げ、その問題点について論じる。そして本研究がとる認知言語学的アプローチの理論的枠組みについて概観し、最後に研究課題の設定と、全体構成の提示を行う。

第 2 章では句接辞の意味と品詞性について考察、記述し、また、これらの句接辞の統語的・形態的な振る舞いに基づいてどのような連続体として位置付けられるかを論じる。

第 3 章では、第 2 章での句接辞の分析を踏まえた上で、句接辞の生産性の高低とその多義性に注目し、これらの接尾辞同士が結びつき、類推、スキーマに基づいて用法が拡大していく過程について考察する。

第 4 章では、形容詞性接尾辞「らしい・ぼい・くさい」を扱うが、このうち、「ぼい」「くさい」は、比較的近年、接尾辞から助動詞への変化が起こったとされる。第 3 章では接尾辞同士が繋がることで用法が拡大するという立場をとるが、第 4 章では主に意味・形式に関わる拡張が起こる過程について考察する。

第 5 章では、これらの句接辞と「らしい・ぼい・くさい」の意味的な連続性をプロファイルとスケールを用いることで統一的に示す。

第 6 章では、各章のまとめと研究意義、今後の課題を示す。

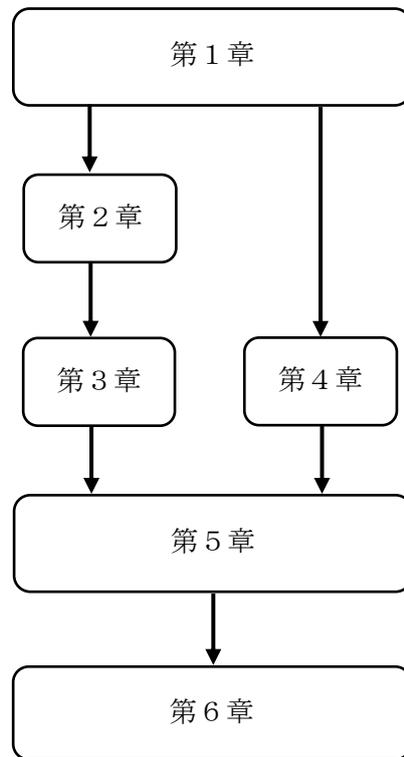


図1.5. 本研究の構成

第2章 句接辞と意味・品詞性

第2章では先行研究で扱われることが少なかった句接辞がどのような意味と品詞性を持つのかを明らかにする。

2.1節では本章での目的と、句接辞の意味と品詞性についての先行研究での指摘を確認する。2.2節では先行研究などで個々に記述されてきた意味を概観し、それらを簡潔にまとめる。2.3節では第三形容詞性接尾辞の存在に注目し、句接辞と品詞性の関係について考察する。2.4節では、本章で扱う各接尾辞の「-の」「-な」形式の分布と名詞性の強弱について論じる。2.5節ではそれまでの考察についてまとめ、句接辞が名詞性の強弱に従って連続的な関係を持つことについて述べる。そして2.6節を本章のまとめとする。

2.1. はじめに

本章で扱う動詞連用形接続における句の包摂が起こる接尾辞は、以下の(1)で示している第1章で提示した影山(1993)で挙げられた形式「たて」「ばなし」「きり」「放題」「がち」「気味」「そう」に、「かけ」「どおし」「すぎ」「まくり」を加えたものである¹¹。

- (1) a. [いまにも雨が降り] そう (だ)
- b. [仕事にかかり] っきりだ
- c. [爛をし] たての酒
- f. [お金を借り] っぱなし
- g. [仕事に追われ] ぎみ
- h. [授業を休み] がち
- i. [ビールを飲み] 放題

(影山 1993: 329-330 より抜粋)

現代語においては、どのような接尾辞においても句の包摂が起こると言うわけではなく、

¹¹ 本章で取り上げる句接辞の形式は必ずしも網羅的とは言えないものの、本章で議論しようとしている問題をかなりの程度カバーしているものとする。実際、新山(2020a)などでも、同様の形式に注目していることから、これらが記述的、理論的に興味深い特性を持つことが次第に注目されてきていると言える。

また、本章では扱う句接辞は比較的生産性が高いと思われる形式が中心であるが、第3章では生産性が低いと思われる句接辞も扱うことになる。

それが起きるのは、むしろ特別な事例であると言える。阪倉（1966b）では、「句の包摂」が起きる場合の接尾辞における意味の抽象性の高さを問題にしているが、具体的にどのような意味において接尾辞が句の包摂が起こすか、そして、その意味と関係し、このような接尾辞がどのような品詞性を持つかは、句接辞の総合的な研究にとって重要であると考えられる。

本章で扱うような句接辞（とそれに相当するもの）の意味について、Sugioka（1984）や影山（1993）ではアスペクト接辞（や時間名詞接辞）には、動詞句を選択するものがあるとしている。新山（2020a）は、やはりこれらを一面的な意味を表すものとしているが、詳細な研究は管見の限りない。

品詞性については、影山（1993）は句接辞を「接続詞的なもの」と「名詞的なもの」に大別しているが、本研究で対象となる(1)のような形式は、「名詞的なもの」として扱われている。また、「動的名詞文」(Kinetic Noun Sentence)¹²の一部として（谷守 2018）、あるいは「合成名詞」の一部として（新屋 2014 など）、これらの句接辞に相当するものが扱われることがある。これまでの研究では全体的に「名詞（的なもの）」として扱われていることが多かったように思われるが、青木（2016a, 2016b）のように文末部では「形容動詞」として解釈されるという指摘があり、あるいは新山（2020a）では、「句接辞」は「統語的述語名詞」「形容詞型の複雑述語」に跨って分類されているなど、考察の余地が残されているのではないかとと思われる。

2.2. 意味分類

本節では句接辞の意味分類を行う。個々の接尾辞の意味については詳細な研究がなされてきたが、ここでの意味分類は各形式が持つ多義性に留意しつつ、できるだけ簡潔にまとめたものである。なお、句を包摂する用例であることを強調するために、ここでは、各例文の「を」格を太字で表現している。

¹² 「動的名詞文」とは、谷守（2018: 154）によると広く動的事態を表す名詞（「動的名詞」）を文末名詞とする名詞文のうち、措定文、指定文、あるいは体言締め文（角田 1996, 2011）に相当しないものとされ、以下のような文例がそれに当たる。

- (i) 駅は次の角を左折だ。
- (ii) その作業は基礎部分をやり直した。

（谷守 2018: 150）

2.2.1. <既然>と「たて」

「たて」に関する研究は、類義語「-たばかり」との比較を行う中村（2001）、語彙的概念構造から「たて」に関する構文生成のメカニズムについて考察する山田（2005, 2016）、「たて」（や「かけ」）が名詞的に働く場合について考察する藤巻（2018）などの研究があるが、ここでは藤巻（2018）での表現から<既然>の意味を表すものとする。

(2) 彼はダンスを習いたてだ。 <既然>

2.2.2. <途中>と「かけ」

「かけ」の意味については、<途中読み>のみと考える研究（Toratani 1998）と、<途中読み>と<開始前読み>の二つを認める分析（Tsujiura & Iida 1999）などがある。さらに、より包括的に意味の範囲をカバーし、<途中読み>と<開始前読み>を区別しない<動作・出来事成立前読み>とする分析（高見・久野 2006）がある。本研究は高見・久野（2006）の意味分類を受けた楊（2012: 16）の「事象成立に向かって状態変化の途中にある」という記述から<途中>を表すものとする。

(3) 彼は本を読みかけだ。 <途中>

2.2.3. <継続>と「ばなし」「きり」「どおし」「放題」「まくり」

「ばなし」については先行研究でその多義性が特に注目されている（渡邊 2000、小西 2001、須賀 2003、藤城 2006、中村 2009 など）。そのうち中村（2009）は、これらの先行研究内で共通するものとして<動作・出来事の継続>用法、<結果状態の継続>用法、<放置の状態>用法の3つを挙げている。

新山（2018）は、中村（2009）の意味分類を受け、<動作・出来事の継続>用法と違い、<放置の状態><結果状態の継続>用法の意味においては、次のように他動詞の内項が主語として現れる自動詞構造が生成されると述べている。

- (4) a. ランプが点け**っぱなし**だ。 （結果状態の継続）
b. 本が読み**っぱなし**だ。 （放置状態の継続（ママ））

（新山 2018: 53）

これらの用法は、「そのままの状態が続く」という点で意味的な共通性もある。本研究ではこのような構文的、意味的な共通性を鑑み、＜結果状態の継続＞用法、＜放置の状態＞用法を＜結果状態の継続＞にまとめ、「ばなし」の意味用法を＜動作・出来事の継続＞＜結果状態の継続＞にやや簡略化して二分しておく。

(5) a. 彼は三時間歌を歌い**っぱなし**だ。 <動作・出来事の継続>

b. 彼はドアを**開けっぱなし**だ。 <結果状態の継続>

「きり」については、藤城（2006）で扱われているような「動詞過去形+きり」と違い、「動詞連用形+きり」は、生産性がそれほど高くないと考えられる。これは次の(6)のように「ばなし」と同様、＜動作・出来事の継続＞、＜結果状態の継続＞の意味を持つものと思われる。

(6) a. 多勢の来場がありましたが、初めてキャンピングカーを見る方が多く、今日もしっかりとキャンピングカーの楽しさをしゃべり**っきり**の一日でしたね。

<動作・出来事の継続>

< <http://www.lthomes.co.jp/blog2/archives/date/2017/01/09> >

b. はるるは、先週の土曜日は朝から出かけており、19時に帰宅するまでの間ずっと家中を閉め**っきり**でした。 <結果状態の継続>

< <https://www.haruru29.net/blog/post-6744/> >

また、「どおし」についても句の包摂は起こり得る。『日本国語大辞典』（第二版）には「その動作を続けてする意味を表わす」という記述があり、次の(7)のように＜動作・出来事の継続＞と＜結果状態の継続＞の意味を共に表す。

(7) a. ルピック氏が、けさからかれをからかい**どおし**なので、つい、にんじんは、どえらいことをいってしまった。 <動作・出来事の継続>

(岸田国土訳「にんじん」 1995年、BCCWJ)

b. 彼は一日中立ち**どおし**だ。 <結果状態の継続>

「放題」について、『日本国語大辞典』（第二版）での記述は次の通りである。「接尾語的に、名詞や動詞連用形、希望の助動詞「たい」などに付いて、その動作、作用の行われるままにしておく、また、意志のままに任せるなどの意を添えるのにも用いられる」。また、新山（2020c）では「放題」に本研究での〈結果状態の継続〉の意味（(8b)）と同時に〈状況可能〉の意味（(8a)）を認めている。また、句を包摂する用例を(8c)に示しておく。

- (8) a. あの店は、子供はジュースが飲み**放題**だ。 （可能） （新山 2020c: 57）
b. 庭が荒れ**放題**だ。 （結果状態） （新山 2020c: 57）
c. 高校時代は、ベントレーに乗って通い、今でも、父親名義のクレジットカードを使い**放題**だと明かした。 〈結果状態の継続〉

<<https://gakumado.mynavi.jp/freshers/articles/29265>>

ただし、ここでの〈状況可能〉の意味は、「制限の不在」という点で〈結果状態の継続〉と共通するものがあり、ここでは、一括して〈結果状態の継続〉の意味にまとめておく。

また、次の2.2.4節で扱う「まくり」にも〈動作・出来事の継続〉に解釈できるような用例がある。

- (9) 彼は一時間歌を歌いまくりだった。 〈動作・出来事の継続〉

2.2.4. 〈動作・出来事の反復〉と「まくり」

「まくり」も(9)や次の(10)のように句の包摂を起こす接尾辞である。意味について、接尾辞としての「まくり」は辞書では、その項目が見当たらないため、複合動詞「-まくる」を参考にすると、『日本国語大辞典』（第二版）では「動作を休みなく、また激しく行う様子を表す、盛んに...する」との記載がある。また城田（1998: 146）は「旺盛・強化相」と名付け「うごきが休みなく、回数を重ね、激しく行われることを示す」ことを表すとしている。さらに、宮島（1972）では「いきおい」のよさを表す接尾辞とされ、その勢いは「速度」「程度」に関係があり、また「回数面におけるニュアンスを持っている」とされる。

「まくり」は、複合動詞「-まくる」の先行研究で記述されたような意味を持ち、次の(10)のような〈動作・出来事の反復〉を表すと考えられる。

(10) 私の彼氏は空手をやって鍛えて鍛えて胸板を厚くする努力をしまくりです！

<動作・出来事の反復>

(Yahoo!知恵袋 2005年、BCCWJ)

また、先に示した(9)のように<動作・出来事の継続>の意味も持つ。

2.2.5. <程度>と「すぎ」

由本(2005, 2012)は、「すぎる」が形容詞につくことも踏まえて、「すぎる」が広く「程度性」の要素に「過剰」を付与することを指摘しており、これらの記述は「すぎ」にも当てはまるとしている。

(11) a. 継続相の動詞と結合して行為の時間の過剰を意味する。

b. 反復の解釈が可能な動詞と結合して頻度の過剰を意味する。

c. 対象(Theme)の状態変化を含意する非対格自動詞や他動詞と結合すると、結果状態に段階性が認められる場合にはその状態の行き過ぎの解釈が優先され、段階性が認められない場合には対象の数量の過剰の解釈が生じる。

d. 経路を補語とする動詞と結合した場合のみ、主語の数量の過剰を意味する可能性がある。

e. 存在・出現を表す非対格自動詞や所有・作成を表わす他動詞と結合すると、前者は主語、後者は目的語の数量の過剰の解釈が優先される。

(由本 2005: 244)

ここでは、「すぎ」は<程度>を表すと考えておくと、その<程度>の過剰は、本章における上記の<動作・出来事の継続>、<動作・出来事の反復>に加え<状態変化の程度>の意味において付与されていると考える。

(12) a. 彼はさっきから歌を歌いすぎだ。 <動作・出来事の継続>

b. 彼は最近、ミスをしすぎだ。 <動作・出来事の反復>

c. 彼はパンを焦がしすぎだ。 <状態変化の程度>

なお、「数量」についての過剰は、<動作・出来事の反復>に属するものと考えておく。

2.2.6. <傾向>と「がち」「気味」

井上 (1997:108) では、「やすい」が表す<傾向>について、「傾向の構成要素として『逸脱性』と『反復性・頻発性』『状態変化』の三つが指摘できる」とし、続く井上 (1998) では、「やすい」に加え「がち」「ぎみ」を同じく、<傾向>を表す表現として三者を比較しており、その中で「がち」は<頻度傾向>を表し、「気味」は<状態傾向>を表すとしている。本研究もこの意味ラベルを用いることにする¹³。このような「がち」と「気味」を扱った意味的研究には、他にも井上 (1998)、島岡 (1998)、中村 (2002)、八尾 (2006)、幸田 (2011)、大江 (2014) などがある。

(13) a. 思いつくままにしゃべる人間は、不用意な機知を弄し**がち**である。

<頻度傾向> (「赤と黒」、八尾 2006)

b. 彼は部下を**持て余し気味**だ。 <状態傾向>

特に<頻度傾向>を表す「がち」は、「繰り返して同じ動作がなされる」という点から、<動作・出来事の反復>を表す「まくり」と近い関係にあると思われる。

また八尾 (2006) では、「がち」は主に<事例の多さ> (<頻度傾向>に相当) の意味を持つとしつつ、「気味」に加え、一部の「がち」の用例が<状態の傾き> (<状態傾向>に相当) を表すことを指摘している。そして、「がち」において<状態傾向>を表すとされる場合、以下のような語が接続するとしている。

(14) 名詞...黒目 岩山 : 遠慮 伏し目

動詞...うつむく 途切れる 夢見る ためらう

(八尾 2006: 130)

(14)に加えて、「気味」とでき、次のような頻度を表しているものでないと思われる「がち」の用例も<状態傾向>を表すと考えておく。

¹³ <頻度傾向>を表していると思われる「気味」の使用もあるが、これについては第3章で扱うことになる。

(15) この試合は相手に押され**気味がちだ**。 <状態傾向>

2.2.7. <様態>と「そう」

「そう」については「助動詞」とする考え方と、本研究のように「接尾辞」とする考え方がある。寺村（1984）の記述を引く。

先のダロウの類、このあとで見る、ヨウダ、ラシイに比べると、話し手が感覚で捉えた外界の様相、典型的には視覚に映じた様相を直感的に描写的にいう色彩が強く、頭の中で推量するという色彩が最もうすい。ふつう「様態」を表す助動詞といわれるゆえんであろう。（もっとも助動詞の中に含めない（松村 1969 など）や、ソウダを接尾語+形式動詞とする考え方（北原 1981）もある。）

（寺村 1984: 239）

寺村や多くの研究者が指摘するように推量するという意識（「主観性」）の薄さが「らしい」などの助動詞と接尾辞の間に跨がるように感じられる原因となっていると思われる。

意味用法についての研究は多く、例えば森田（1990）のように細分化する分類（<様態><推量><予測><形勢><非実><寸前>）や大場（1999）のように意味用法を大きく「推量系」と「描写系」に分ける立場もある。

(16) a. 台風 11 号は、今夜半過ぎ、日本列島に上陸し**そう**だ。 （推量系）

b. 棚からかばんが落ち**そう**だ。 （描写系）

（大場 1999: 75）

ここでは詳細な意味研究があることに触れつつも、上の寺村（1984）をはじめ、広く知られる<様態>の意味を持つものだと考えておく。

同じく寺村（1984）をはじめ、多くの研究で指摘されるように「そう」には、様々な品詞の終止形に接続し、<伝聞>を表す用法もあるが、本研究で対象とするのは動詞連用形に接続する(17b)のような<様態>のみになる。

(17) a. 従兄は明日、日本を発つ**そう**だ。 <伝聞>

b. 彼はノートを落としそうだ。 <様態>

2.2.8. 意味分類のまとめ

ここまでの接尾辞の意味の分類をまとめると、以下の通りである。

意味	接尾辞	意味	接尾辞
既然	たて	程度	すぎ
途中	かけ	頻度傾向	がち
結果状態の継続	ばなし、きり、放題、 どおし	状態傾向	がち、気味
動作・出来事の継続	ばなし、きり、どおし まくり	様態	そう
動作・出来事の反復	まくり		

表 2.1. 句の包摂と意味

2.3. 句の包摂と品詞性

本節では、これらの接尾辞がどのような品詞性を持つかについて考察していく。本研究で扱う接尾辞の品詞について、「名詞 (的なもの)」として扱われることが多いことはすでに述べた。

ここで、これらの接尾辞を個別的に見るために、既存の辞書を参考に接尾辞の分類を試みた山下 (1994)、田村 (2016) を参考にすると、山下 (1994) では「がち」は形容動詞性接尾辞として分類されている。また田村 (2016) では「がち」は名詞性接尾辞に分類されている。

このように、分類者間で「ゆれ」が見られることがわかる。これは、「がち」に「がちの」「がちな」の二つの形式が認められることが原因であると思われるが、伝統的な品詞分類では、この種の接尾辞を十分に扱えないことがわかる。

2.3.1. 第三形容詞性接尾辞

村木 (2012) は、従来の形容詞、形容動詞に加え、第三形容詞の存在を主張している。

これについては、三尾 (1942) において、すでに「ノ形容詞」の名称で、基本形の語尾が

「の」で終わる形容詞の存在が指摘されており、以下の(18)のように、もともと副詞であったものに助詞「の」が結合したものとされている。

(18) ほんたうの 當然の 勿論の 實際の おほかたの せつかくの かりそめの
十分の おほよその あんまりの そつくりの よぼ／＼の かなりの
わづかの はじめての すべての

(三尾 1942: 165)

三尾は「ノ形容詞」は副詞形が必ずしも「に」を取らないこと、基本形が「の」であることを除けば、「だ」「です」の活用部分は全く「ナ形容詞（形容動詞）」と変わらないとしている。

村木（2012）ではその数の多さと種類の豊富さに注目し¹⁴、「真紅」「素っ裸」「抜群」「互角」などの例を挙げ、第三形容詞の特徴を次のように規定している。

(19) 第三形容詞の特徴

- (i) 「-が」「-を」の形式で用いられた例がない。もしくは稀である。
- (ii) 「-の」の形式で名詞を修飾限定する連体用法が多い。
- (iii) 「-だ」「-だった」「-です」「-でした」といった形式で、述語としての用法がみられる。
- (iv) 「-に」（稀に「-で」）の形式で後続の動詞・形容詞を修飾する用法がみられる。

(村木 2012: 213)

また、より近年の村木（2019: 293）では、第三形容詞の特徴として「連体修飾を受けない」ことも挙げられ、この点で名詞とみなせないことが指摘されている。

そして、村木（2012）では、句の包摂、句接辞といった用語を用いず、それに相当する第三形容詞性接尾辞の働きについて以下のように述べている。

¹⁴ 第三形容詞の豊富さについて、陳（2007: 15）は、形容詞を新しく作り、増やすことが困難になっている現代日本語において、「あらゆる語類から転換可能であり、また、あらゆる形態素の組み合わせによって成立する」第三形容詞は生産性において形容詞と形容動詞の欠点を補っていると考察している。

一方で、合成語を構成する要素の文法性が発揮される現象もみとめられる。(中略)
「(兵学校に入り) たて のころ」「(縄梯子をおろし) っぱなしの家」のように、「はいりたて」「おろしっぱなし」の「はいり-」「おろし-」という動詞の「兵学校に」や「縄梯子を」という名詞をうける能力が発揮されている。このような単語は、動詞と形容詞の間物(分詞)とみるのが、もっとも正当であろう。両方の品詞の特徴を同時にそなえているのである。

(村木 2012: 206-207)

村木(2012)では、このような働きを持つものがあるという言及に留まるが、実は、本章で扱う類の、動詞連用形接続で句の包摂を起こす接尾辞のほぼ全てがこの第三形容詞性の接尾辞であることがわかる。すなわち、「たて」「かけ」「ばなし」「きり」「放題」「がち」「気味」は全て、村木(2012)内で第三形容詞性接尾辞として分類されている。また、上記の第三形容詞の特徴に照らせば、「まくり」「どおし」「すぎ」もここに分類されるものと思われる¹⁵。

村木(2012, 2019)における品詞分類の記述から、本章で扱う部分を抜き出すと、名詞、第三形容詞、形容動詞の違いを次の基準①～③を用いて示すことができ、表 2.2 のようにまとめることができる。

(20) 品詞分類の基準

- ① 「-が」「-を」の形式で用いられる。
- ② 「-の」形式で名詞を修飾限定する。
- ③ 連体修飾を受けられる。

¹⁵ 村木(2012: 155-156)においては、本章で扱うような「生まれたて」「開けっぱなし」「つきっきり」「曇りがち」や「働き盛り」「用済み」「飲み残し」など動詞性の語基を含む形容詞の一部は、(典型的な「静的」な属性を表す形容詞と違い、)動的な属性を表し、時間性に関与していると指摘されている。

	①	②	③
名詞	+	+	+
第三形容詞	-	+	-
形容動詞	-	-	-

表 2.2. 名詞、第三形容詞、形容動詞の分類基準

上の基準に基づけば、動詞連用形に接続する接尾辞の中では「ぷり」「方」などは、名詞性接尾辞に当てはまる。同じく、この基準で判断すると形容動詞性接尾辞は「的」「やか」などがあるものの、生産的に動詞連用形が接続するものとなると実質、句接辞である「そう」のみである¹⁶。先ほど、第三形容詞性接尾辞に、この種の句の包摂が見られる接尾辞のほとんど全てが含まれると述べたが、残りはこの形容動詞性接尾辞（「そう」）である。

2.3.2. 接尾辞における品詞の連続性

2.3.1 節では従来の名詞性接尾辞、形容動詞性接尾辞に加え、どちらかに属するとは言い難い第三形容詞性接尾辞について確認したが、本節ではさらに、第三形容詞性接尾辞内の振る舞いの違いを観察し、接尾辞の連続性について述べる。

ここで、「ぷり」「がち」「そう」について、基準①に従って「-が」形式を用いた例を示す。

¹⁶ 形容動詞性接尾辞自体が少ないことについては、黄（2004: 34）においても指摘がある。また、「そう」と同じく形容動詞性接尾辞である「げ」は青木（2016a, 2016b）によると、古典では句の包摂が盛んに見られた（1.2.6 節参照）。

(i) 御返など、[あはれをしり]げに聞えさせかはさんを、いと憂くのみおぼゆれば、
 （「夜の寝覚」巻三 11 世紀後半か、青木 2016a）

しかし、1.2.3 節でも確認したように影山（1993: 329）でも句接辞の例として扱われているが、現代語では「動詞連用形+た+げ」を除くと、動詞連用形に「げ」が付くのは「ある」の場合のみであり、また「自信ありげ」などは可能だが、「レストランがありげ」のように「が」格を挟んだ使用はしないと思われる。そのため本研究では分析対象としていない。

¹⁶ これらの句接辞と品詞性の関係は重要である。議論を先取りすることになるが、第 3 章で扱う「加減」は、「焼き加減がとていい」のような「程度」と置き換えられる意味を持つが、これは名詞的な使用であり、句を包摂することがない。句を包摂する場合は、「彼女は声を抑え加減だった」のように<状態傾向>の意味を表し、第三形容詞性接尾辞として使用する場合のみである。

- (21) a. 昨日の酒の飲み**っぷり**がすごかった。 (名詞性接尾辞)
 b. ??はしゃぎ**がち**がよくない。 (第三形容詞性接尾辞)
 c. *笑い**そう**がよくない。 (形容動詞性接尾辞)

第三形容詞性接尾辞「がち」は (21b) で見られるように、「-が」形式での使用は容認しにくく、その点で名詞性接尾辞「ぷり」と区別される。しかし第三形容詞性接尾辞の中でも「がち」と異なり、次のように「-が」形式で用いられ得るものがある。

- (22) 座り**っぱなし**が体によくない。

(22) の「ばなし」の用例は、名詞性接尾辞の使用と重なっている。

ただし、以下のように連体修飾を受けられるかどうか (=基準③) という点では「ぷり」のような名詞性接尾辞と振る舞いが一致しない¹⁷。

- (23) a. ?ひどい飲み**っぱなし**
 b. ひどい飲み**っぷり**

ここまで、従来の品詞分類に加え、第三形容詞性接尾辞の存在、および第三形容詞性接尾辞内での振る舞いの違いを見たが、同じ品詞とされてきたものの中での振る舞いの違い、そして品詞間の連続性については、寺村 (1982: 第1章) などで指摘がある。例えば、寺村 (1982: 66-70) では、「元気」について「が」「を」「に」などの格助詞とともに用いられるという点で、名詞であると判断できるが、名詞と形容動詞 (寺村 1982 では「名詞的形容詞」) を分かつ基準として、修飾する際「-の」であるか「-な」であるかというテスト (本章での基準②) に照らすと、「元気」は場合によっては、以下のように両形式が可能になるとしている。

- (24) a. 元気 $\left[\begin{array}{l} \text{ナ} \quad \text{オバアサン} \\ *ノ \end{array} \right.$

¹⁷ 「ばなし」は「長時間の飲みっぱなし」のように「一部」の連体修飾を受けられる。このことも本研究で扱うような「品詞の連続性」に関係する現象だと思われるが、詳しい分析は今後の課題としたい。

b. アノオバアサンノ元気 $\left[\begin{array}{l} \text{ノ } \underline{\text{モトハ}}, \text{ 畑仕事ニアラシイ} \\ *ナ \end{array} \right.$

(寺村 1982: 69 下線は原文のまま)

すなわち、「元気」は名詞でありながら、寺村(1982)が言うところの「桜」「京都」などの「名詞らしい名詞」と違い、より名詞と形容動詞の境界の側に位置付けられることになる。先に言及した「がちの」「がちな」の「ゆれ」についても、伝統的な品詞分類において、一つの品詞に分類することの困難さを示唆しており、品詞が連続性を持つことの証左となるであろう。

本研究はこのように品詞が連続性を持つという立場に立つが、表 2.2 に示した複数の基準を満たすかどうかに従い、接尾辞の品詞の連続性を示すと以下の通りになる¹⁸。

(25) 名詞性接尾辞 > 第三形容詞性接尾辞 > 形容動詞性接尾辞

さらに、同じ第三形容詞性接尾辞内での振る舞いの違いに注目すると、「-が」形式を取れる(=基準①)「ばなし」の方が、「がち」と比べると、より名詞側に位置すると考えられる。

(26) 名詞性接尾辞 > 第三形容詞性接尾辞 > 形容動詞性接尾辞
「ばなし」 「がち」

ここではもっぱら「ばなし」「がち」を扱っているが、他の接尾辞については、「ばなし」と同じように「-が」形式で用いられる「たて」「かけ」「きり」「放題」「どおし」「まくり」「すぎ」と、「がち」と同じように「-が」形式で用いられない「気味」とに分けられる。

¹⁸ 名詞から形容動詞に至る品詞的な連続性は、形容動詞という範疇の認定に関する問題とも関わり、これまで議論なされてきた。

例えば、加藤(2003)ではその問題点を次の3つにまとめ、このような形容動詞論は「品詞的枠組み全体」に関わる問題であるとしている。

- ① 形容動詞と他の品詞との連続性
- ② 形容動詞の担う意味の問題
- ③ 品詞体系の記述上の問題

(加藤 2003: 89)

また、基準②「-の」「-な」形式の標示については、各接辞において分布に違いがある。これについては、2.4 節で詳しく見ていくことにし、次節からは、基準①を基にし、(25)(26)のような連続を名詞性の強いものから、弱いものへの連続として捉え、考察していく。

2.3.3. 句の包摂と名詞性の強弱

本節では句の包摂と名詞性の強弱との関係について考察する。

影山(1993)では(27)のように句の包摂が起きない接尾辞(語彙的な合成語を作るもの)は項が「の」格で標示され、句の包摂が起きる、統語的な接尾辞は項が「を」格で標示されるとしている。

(27) 項の格標示

語彙的：酒の /*を [飲みっぷり]
糠漬けの /*を [食べごろ]
ドイツリートの /*を [歌い手]
統語的：[電気を /*のつけ] っぱなし
[宿題を /*の忘れ] がちな生徒
[アルバイトを /*のし] ながら

(第1章(8)の再掲)

しかし、(27)における「っぱなし」については「がち」と違い、名詞性接尾辞「ぶり」と同様に、「電気のつけっぱなし」のように項の「の」格標示も可能であると思われる。

そこで「っぱなし」について、項が「の」格で標示されるか、「を」格で標示されるかについて、その生起環境を観察すると次のようになる。

(28) a. 湯の出し**っ放**しがよくない。

b. ??湯を出し**っ放**しがよくない。

c. 風呂は湯の出し**っ放**しだ。

(谷守 2018: 166)

d. 風呂は湯を出し**っ放**しだ。

(谷守 2018: 166)

前節で「っぱなし」は、他の名詞性接尾辞のように「-が」形式の前方で用いられる(基準

①を満たす) ことを指摘したが、その場合、(28ab) のように「の」格標示は可能だが、「を」格標示は容認しにくい。一方、(28cd)のように文末部(述部)では「の」格標示も「を」格標示も可能である。(28b)のように「-が」形式とともに用いられる場合、項の「を」格標示が認めにくいことから、句の包摂現象は、名詞性の弱さと結びついていると考えられる。先行研究で挙げた青木(2002, 2016a, 2016b)で接尾辞が「文末部」(と「接続部」)で用いられることで句の包摂が起こるという指摘がすでにあり、上の観察はそれに沿ったものであるが、「ばなし」のように、文末部でも「-が」(及び「-を」)形式でも使えるものと、「がち」のように、そもそも「-が」(及び「-を」)形式では用いられないものの2種があるということを示言することができる。

本章で取り上げる他の接尾辞についても、項が「の」格で標示され得るかという点で分類すると以下のように分類できる。

(29) 「ばなし」類

電気のつけっぱなし、パンの焼きたて、りんごの食べかけ、窓の閉めつきり、勉強のしどおし、ゲームのやり放題、迷惑のかけまくり、お酒の飲みすぎ

「がち」類

*宿題の忘れがち、*学校のサボり気味、*ご飯の食べそう

本節での考察を(26)で示した連続性と掛け合わせて、まとめたものが以下の表2.3になるが、名詞性の強弱と項の表れ方に相関性があり、句の包摂は名詞性の弱い接尾辞において起きやすいことがわかる。

	名詞性が強い ←			→ 名詞性が弱い
	名詞性接尾辞	第三形容詞性接尾辞 ¹⁹		形容動詞性接尾辞
「の」格標示	○	○	×	×
句の包摂 (「を」格標示)	×	○	○	○
接尾辞	「ぶり」「方」	「ばなし」「たて」 「かけ」「きり」 「放題」「どおし」 「まくり」「すぎ」	「がち」 「気味」	「そう」

表 2.3. 品詞の連続性と句の包摂

2.3.4. 「もの」を表す「たて」「かけ」

表 2.3 において、第三形容詞性接尾辞の中でも「がち」「気味」が、より形容動詞性接尾辞に近い、つまり名詞性が弱いことが示された。本節では表 2.3 においてより名詞性接尾辞の側に位置する、「ばなし」が属するグループ内での名詞性の強弱について考察し、その上で名詞性の強弱と意味の対応についてまとめる。

このグループ内に属する「たて」「かけ」が名詞的に働く使用法について、藤巻 (2018) は「パンの焼きたて」、「リンゴの食べかけ」がそれぞれ、「焼きたてのパン」「食べかけのリンゴ」と同等の意味を持つと指摘している。つまり「たて」「かけ」が「もの」を表していると考えられる。

(30) a. 太郎は [リンゴの食べ**かけ**] を手に取って食べた。

b. 太郎は [パンの焼**きたて**] を口にほおぼった。

(31) a. 太郎は [食べ**かけ**のリンゴ] を手に取って食べた。

b. 太郎は [焼**きたて**のパン] を口にほおぼった。

(藤巻 2018: 102)

¹⁹ ただし、第三形容詞性接尾辞なら必ず句の包摂を起こすというわけではないことに留意する必要がある。例えば、村木 (2012) では、「盛り」(「食べ盛り」)「忘れ」(「消し忘れ」)なども第三形容詞性接尾辞として挙げられているが、句の包摂が可能だとは認めにくい。

(i) a. *私の子供はご飯を**食べ盛り**だ。

b. ??彼は黒板を**消し忘れ**だ。

一方、その他の「ばなし」「きり」「放題」「どおし」「まくり」「すぎ」が名詞的に用いられた場合（ここでは基準①を満たす場合）を考えると、必ず次の (32) のように「こと」を表す。

(32) a. 電気のつけっぱなし / きりが良くない。

b. 眉毛、口回り等、顔のうぶ毛の伸ばし放題は NG。

< <https://ameblo.jp/lilybonbon/entry-11985827108.html> >

c. 迷惑のかけどおし / まくりが人間関係を悪くする。

d. 肉の食べすぎが体に悪い。

Croft (2001: 89) では、次の表 2.4 のように意味クラスと命題行為の組み合わせが類型論的に無標の結合である場合、類型論的プロトタイプを形成するとしており、従来の「名詞」「形容詞」「動詞」という用語は、それを記述するものであるとしている。すなわち、「物体について指示」するものが「名詞」であり、また「属性により修飾」するものが「形容詞」、「動作の叙述」をするものが「動詞」である。

	指示	修飾	叙述
物体	無標の名詞	属格、形容詞化、 名詞につく前置詞句	述語名詞類 連結詞
属性	形容詞由来の名詞	無標の形容詞	述語形容詞
動作	動作名詞類、補部、 不定詞、動名詞	分詞、関係詞節	無標の動詞

表 2.4. 品詞の形態的にマークされた構造的符号化構文 (Croft 2001: 88 ; 山梨監訳 2018: 106)

このような品詞をプロトタイプとの関係で見る文法観に従えば、具体的な実体としての「もの」を表す用法のある「たて」「かけ」の方がより名詞性が強く、「こと」を表す「ばなし」「きり」「放題」「どおし」「まくり」「すぎ」は、それと比べ名詞性が弱いと考えることができる。

2.4. 「-の」「-な」形式の分布と名詞性の強弱

前節までは基準①に基づき、名詞性の強弱という観点で考察をしてきたが、本節では、基準②である「-の」形式の出現、そして「-な」形式の出現について考察する。この基準②については、2.3 節の冒頭で触れた「がち {の/な}」の例のように、ある一つの品詞に分類することの困難を示唆しており、品詞が連続性を持つことの証左となっている。

Uehara (1998)、上原 (2003,2007) では、名詞と形容動詞の連続性（継続性）について論じている。Uehara (1998) は『分類語彙表』での最頻出語に掲載された形容名詞（本研究での形容動詞）264 語について、『岩波国語辞典第4版』での記述に基づき、それが名詞的に振る舞うか（「-の」をとるかとらないか、格助詞と共起する否か）を調査し、次の表 2.5 のような結果を得ている。このように形容動詞とされながらも、名詞的に振る舞うものが4分の3 (188/264) に及んでおり、名詞と形容動詞の曖昧さが一部の例外にとどまることではないことを主張している。

	格助詞の表記なし	格助詞との共起	合計
「の」をとらない	76 (28.8%)	75 (28.4%)	151 (57.2%)
「の」をとる	37 (14.0%)	76 (28.8%)	113 (42.8%)
合計	113 (42.8%)	151 (57.2%)	264 (100%)

表 2.5. 頻出形容名詞語彙計 264 語の文法的ふるまい調査結果（上原 2007: 138）

そして、「-な」形式の出現について「形容動詞の特徴的な修辭である「な」の使用を動機づけているのは、典型的には、その語彙意味の持つ程度性である」（上原 2003: 66）と指摘している²⁰。また、このような「程度性」は典型的な形容詞の特徴であることも指摘されている（Uehara1998）²¹。

Uehara (1998) の主張を支持する研究として、田野村 (2002) は、「-な」は程度性、「-の」は択一的属性を指すとし、焦 (2020) は名詞化辞「-さ」との共起から、形容動詞に比べ、「の形容詞」（本研究における「第三形容詞」）は程度性を持つ用例が少ないと述べている。

以下の表 2.6 は本章で取り上げる「句接辞」における連体形式「-の」「-な」の出現数について、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』（検索ツール「中納言」）を用いて

²⁰ 過去に広く使われていた「特別の」が現在「特別な」に取って代わられているように、「-の」「-な」の出現比率については、歴史的に変化する可能性もあることが Uehara (1998)、村木 (2012) で指摘されている。このような「-の」「-な」形式の通時的変遷については、中山 (2004)、永澤 (2011) などに詳しい。

²¹ ただし、程度性は形容詞であることの必須条件というわけではない。このことは、西尾 (1972) などですでに指摘されており、この種の形容詞は北原 (2013) に詳しい。

観察したものである（なお「そう」は必ず「-な」形式で現れるものとする）²²。

	「-の」	「-な」	「-な」の割合
かけ	38	0	0%
どおし	10	0	0%
放題	81	0	0%
たて	174	1	0.57%
ばなし	219	2	0.90%
気味	83	7	7.78%
すぎ	137	20	12.7%
まくり	24	6	20.0%
がち	49	826	94.4%

表 2.6. 句接辞における「-の」「-な」形式の出現数²³

ここでの「-の」形式、「-な」形式の違いとは「遊びまくりの人」「遊びまくりな人」のようなものであるが、「かけ」「どおし」「放題」「たて」などには「-な」形式がほとんど見当たらないのに対し、「すぎ」「まくり」「がち」などでは、「-な」形式の割合が高くなり、「そう」では常に「-な」形式となる。ここでは、「-な」形式の出現の多さを形容詞性の強さと考え、同時に名詞性が弱いことを意味すると考える²⁴。このような表 2.6 の分布は、表 2.3 の名詞性の強弱ともほぼ対応していることがわかる。

²² 「あの人はまだ高校生な気がする」のように、後接要素によっては前接要素が典型的な名詞の場合も「-な」が出現する場合もあるが、それも含めた数を示している。

²³ 「キー：[語彙素=X][品詞=接尾辞]+前方共起：[活用形=連用形]という条件（Xは該当の接尾辞）で検索して、不適切な用例を除いて接尾辞の全例を抽出した後、[-の][-な]形式を抜き出した。ただし、「かけ」「どおし」は動詞「掛ける」「通す」で登録されており、この条件で検索した後、多くの複合動詞の用例などが混じったデータの中から「接尾辞」と思われる用例を抜き出している。また「気味」も同様に名詞として登録されており、名詞として検索した後、適切な用例を抜き出している。加えて「まくり」については、複合動詞「-まくる」の用例として混ざっていたものも検索し、表の総計に加えている。

²⁴ 本研究では、形容詞性の強さを名詞性の強さと対立するものとして考えているが、名詞性の弱さと形容詞性の強さの違いについては今後の課題とする。

- ① 句接辞が表す意味は<既然><途中><結果状態の継続><動作・出来事の継続><動作・出来事の反復><程度><頻度傾向><状態傾向><様態>という特定のものにまとめられる。
- ② 句の包摂と品詞性との関係について、句を包摂する接尾辞は形容動詞性接尾辞「そう」を除いて第三形容詞性接尾辞に分類され、これらは名詞性の強弱において連続的な関係に位置付けられる。また名詞性が弱い場合、句の包摂が起きると言うことができる。

第3章では、このような句接辞の用法の広がりについて考察することになるが、そのためには本章で明らかになった句接辞が特定の「品詞性」と特定の「意味」を持つまとまりであるという点は重要である。

第3章 句接辞の用法拡大

これまでの先行研究は、比較的生産性が高い句接辞のみを取り上げてきたと言える。第3章では、第2章で論じた意味と品詞性の類型に当てはまる生産性の低い句接辞も分析の対象に加え、また句接辞の多義性に注目することで、句接辞の用法の拡大について考察していく。

3.1節では本章の目的を述べる。3.2節では生産性の低い句接辞が先行研究内でどのように記述されてきたかを確認する。3.3節では、扱う接尾辞の生産性の高低と意味の分類を確認する。3.4節では各接尾辞の使用実態を、コーパスに基づいて調べる。3.5節では理論的背景と接尾辞同士の繋がりについて述べる。3.6節では、使用実態に基づいて、大きく3つのパターンに分けてその拡大の過程を考察していく。3.7節では、使用拡大の動機付けとしての意味の類似性について検討する。最後に、3.8節で本章のまとめについて扱う。

3.1. はじめに

先行研究である影山（1993）、新山（2020a）や第2章で扱ってきた句接辞は「たて」「かけ」「ばなし」「きり」「どおし」「放題」「まくり」「すぎ」「がち」「気味」「そう」などである。これらは「きり」を除けば、高い生産性を持っているものばかりであると言える。

しかし、後述するように、それとは別に句接辞の中には生産性の低いものも存在する。これらを分析対象に加え、また句接辞の多義性に注目することで、句接辞について、今まで注目されてこなかった用法の拡大という側面に焦点を当てる。

そして、本研究は現代語でのいくつかの句接辞（とそれに類するもの）の使用実態を記述し、その観察から、類推的であれ、スキーマ的であれ、モデル²⁵が他の接尾辞から提供されることで用法が拡大し、句接辞全体のネットワークが広がっていくことを示す。

3.2. 生産性の低い句接辞

生産性が比較的低い句接辞としては、次の「づめ」「ずくめ」「め」「加減」などがある。

これらは句接辞として扱われてこなかったものの、村木（2012）においては第三形容詞（性接尾辞）として、田中（1990）においては動詞連用形とともに用いられる接尾辞として、意味や前接要素などが示されている。次にそれぞれの研究で、これらの接尾辞が示された箇所

²⁵ 本研究での「モデル」とは用法拡大の模範を意味している。

を見ていく。

村木 (2012) では、<持続相>を特徴づけるものとして、「ばなし」「きり」「続き」とともに「づめ」を位置付けている。

- (1) 開け**っ**放しの (ガラス戸) / 敷き**っ**ばなしの (布団) / かけ**っ**ばなしの (ラジオ) / やり**っ**ばなしの (仕事) 歩き**づ**めの (一日) / はたらき**づ**めの (毎日)
つき**っ**きり (看病) スキャンダル**続**きの (政界)

(村木 2012: 194 より抜粋)

「め」「ずくめ」については、本研究のように動詞連用形接続ではなく、それぞれ形容詞性語基につくもの、名詞性語基につくものとして「だらけ」「みどろ」と併記されている。

- (2) 「一**ず**くめ」: 黒**ず**くめの (衣装) / 規則**ず**くめの (学園) / 贅沢**ず**くめの (生活)
「一**め**」: 大き**め**の (箱) / 太**め**の (糸) / 薄**め**の (ノートパソコン)

(村木 2012: 199 より抜粋)

田中 (1990: 51) では、「動作の継続、持続をあらわすもの」として、「ばなし」「どおし」「きり」「放題」とともに「づめ」が挙げられている。

- (3) a. 置き**っ**ばなし、攻め**っ**ばなし、読み**っ**ばなし
b. 立ち**づ**め、働き**づ**め、笑い**づ**め、叱られ**づ**め
c. 話題で持ち**き**りだ、親にまかせ**き**り、医者にかかり**っ**きり
d. 髪をのばし**ほうだい**にのばす、言いたい**放題**に言う

(田中 1990: 51 下線は原文のまま)

また、「程度、傾向、状態、性質などをあらわすもの」として、「具合」「心地」「気味」とともに「加減」も挙げられている。

- (4) a. お湯のわき**一**加減をみる、うつむき**加減**に話す、・・・
b. ふとり**一**気味、遅れ**一**気味、疲れ**一**気味、・・・

3.3. 意味の分類

3.2 節で取り上げた先行研究から、本章で初めて扱う生産性の低い接尾辞においても、第2章で取り上げた接尾辞と同様の意味類型として扱われてきたことがわかる。そのため、意味分類については第2章で示したものがこれらにも有効であると考えられる。

本章では〈動作・出来事の継続〉〈結果状態の継続〉〈状態傾向〉〈頻度傾向〉の意味を表す接尾辞を扱う。生産性が高いものとしては、「ばなし」「がち」「気味」「どおし」、生産性が低いものとしては「きり」「づめ」「ずくめ」「め」「加減」であるが、意味の分類をまとめると、以下の表のようになる²⁶。

²⁶ 「すぎ」「まくり」のように〈動作・出来事の継続〉の意味を表し得るが、本章で扱わない他の意味も同時に表し得るものはここでは除く。同様に「放題」も〈結果状態の継続〉の意味を持つが、第2章で触れたように、〈状況可能〉に解釈できる用法も含まれると思われるので、本章で扱わない。

生産性が高い 接尾辞	意味の範囲	生産性が低い 接尾辞	意味の範囲
ばなし	<結果状態の継続> (つけっぱなし) <動作・出来事の継続> (走りっぱなし)	きり	<結果状態の継続> (閉めつきり) <動作・出来事の継続> (しゃべりつきり)
どおし	<結果状態の継続> (座りどおし) <動作・出来事の継続> (働きどおし)	づめ	<結果状態の継続> (座りづめ) <動作・出来事の継続> (働きづめ)
がち	<状態傾向> (途切れがち) <頻度傾向> (書きがち)	ずくめ	<結果状態の継続> (座りずくめ) <動作・出来事の継続> (働きずくめ)
気味	<状態傾向> (疲れ気味) <頻度傾向> ²⁷ (書き気味)	め	<状態傾向> (控えめ)
		加減	<状態傾向> (俯き加減)

表 3.1. 生産性の高さの意味の分類

接尾辞自体の生産性の高低に加え、第2章で示したような句接辞の多義的な側面にも本章では注目する。これらの意味用法の使用頻度には、本章でも確認するように偏りがあり、表内に太字で表したものが主な用法である。

なお、田中（1990）で挙げられている「お湯のわき加減を見る」や「勝ちめ（を失う）」「折りめ（を見つける）」における「加減」や「め」は、名詞性接尾辞としての使用であり、

²⁷ 「気味」が<頻度傾向>を持つことについては、第2章で記述していない。この用法については、3.4.3.1節で扱うことになる。

この場合は句を包摂することはない。「め」「加減」が第三形容詞性接尾辞として<状態傾向>を表す場合のみが句を包摂する可能性がある。

また、本研究では句接辞かどうかを統語的要素が前接する用例があること（「を格」の包摂やサ変動詞の接続など）で判断しているが、統語的要素が前接する用例は見つからないものの、「どおし」「づめ」「ずくめ」と同様に主に<動作・出来事の継続>を表す接尾辞として「づくし（e.g. 働きづくし）」「づけ（e.g. 働きづけ）」などが存在する。これらについても句を包摂する可能性がある接尾辞として分析対象に含める²⁸。

3.4. 各接尾辞の使用実態

3.4 節では表 3.1 でまとめられた意味を持つ接尾辞の使用実態について記述する。使用実態は以下のようなパターンに分かれる。このパターンに基づいて 3.6 節でその用法の広がり の過程を考察していくことになる

3.4.1 節では、「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」を扱うが、これは生産性の高い「どおし」において頻度が高い前接要素がその他の接尾辞にも現れるものである。

3.4.2 節では「気味」「め」「加減」と「ばなし」「きり」を扱う。「気味」「め」「加減」で説明すると、「控えめ」「俯き加減」の一部の事例を除いて、生産性が高い「気味」の前接要素が低い頻度で、広く「め」「加減」にも現れるものである。

3.4.3 節では「がち」「気味」と「ばなし」「どおし」を扱う。これらは「がち」「気味」で説明すると、「がち」において高い頻度で現れる「頻度傾向」の用例が「気味」においてもわずかに現れ、逆に「気味」において高い頻度で現れる「状態傾向」の用例が「がち」においてもわずかに現れるという分布を示すものである。

3.4.1. 「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」

主に<動作・出来事の継続>を表す接尾辞である「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」のうち、最も生産的なのは「どおし」である。以下に『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』（検索ツール「中納言」）での用例を見る。「どおし」は、「接尾辞」として分類されていないため、条件として「キー:[語彙素=通す]+前方共起:[活用形=連用形]

²⁸ 青木 (2016a) は、現代語の句接辞を接尾辞からの通時的な変化の結果であると推察している。本研究では、「づけ」「づくし」は、差し当たり句を包摂する可能性を持つものとして扱うが、この問題については第 6 章で再度述べる。

で検索し、576 件を得た。その後、誤解析や複合動詞と思われる使用例などを除き、79 件を抽出し、2 件以上検出された前接動詞を提示すると表 3.2 のようになる²⁹。

順	前接動詞	例数	順	前接動詞	例数
1	する	17	6	苦勞を掛ける	3
2	歩く	5	6	泣く	3
2	働く	5	9	思う	2
4	立つ	4	9	悩まされる	2
4	迷惑を掛ける ³⁰	4	9	駆ける	2

表 3.2. 「どおし」の前接動詞

また、「する」についての内訳は、「苛々する (4 件)」「緊張する (3 件)」「心配する (2 件)」「オロオロする (1 件)」「苦勞する (1 件)」「ハラハラする (1 件)」「感心する (1 件)」「ビクビクする (1 件)」「後退する (1 件)」「ムカムカする (1 件)」「後悔する (1 件)」である。

ここで「どおし」で 3 件以上検出された前接動詞が、他の接尾辞ではどの程度現れるかを調べる。生産性の低い接尾辞の用例を集めるため、BCCWJ に代えてウェブコーパス『Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11)』(検索ツール Sketch Engine) を用いた。検索は「[lemma=働く]+[lemma=詰め/尽くめ/尽くし/漬け]」³¹という条件で行った。誤解析や不適当な用例を除いた検索結果が次の表 3.3 である³²。

²⁹ 「生き通し」(3 件) は宗教に関する用語であるため、表からは除いている。

(i) 金光教の教祖様は、「人間は生き通しが大切である。生き通しとは死んでから後、人が拝んでくれるようになることである」と、み教えてください。

<<http://webkonkokyo.info/data/n1334725542>>

³⁰ 格標示については「迷惑のかけどおし」や「心配のしどおし」なども「の」格標示のものも含めている。

³¹ [lemma=詰め/尽くめ/尽くし/漬け]における「/」は、「詰め」、「尽くめ」、「尽くし」、「漬け」それぞれの場合で検索をしたことを意味する。本研究での以降の検索条件の表記もこれに従う。

³² 検索に際しては、誤解析や明らかに不適当な用例を除くほか、主に以下のような調整を行っている。これらは以降の検索結果においても同様に行なっている。

- (i) 一語として登録されたものが混在している場合も検索し、結果に反映している(「立ちどおし」「働きづめ」「歩きづめ」など)。
- (ii) 前接の語彙素が連用形の形でそのまま登録されているものが混在している場合も検索し、合算している(「[lemma=働き]+[lemma=尽くめ]」における「働き」など)。
- (iii) 複合動詞の連用形と思われる用例は排除している(「読み尽くす」の連用形「読み尽くし」として用いられている用例など)。
- (iv) 「どおし」は、実際は複合動詞「V 連用形+とおす」と区別なく登録されていることが多

	どおし	づめ	ずくめ	づくし	づけ
働く	208	1658	190	7	3
歩く	275	201	38	0	0
立つ	132	68	42	5	0
迷惑を掛ける	99	0	0	0	0
苛々する	108	0	0	0	0
緊張する	45	0	0	0	0
苦労を掛ける	13	0	0	0	0
泣く	334	2	1	2	0

*列はBCCWJ内での「どおし」の前接動詞の降順

表 3.3. 前接動詞の比較（「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」）

また、「どおし」以外の各接尾辞において、他にどのような動詞連用形が前接要素として現れるかについても、「[tag=V.g & infl_form=Cont.g]+[lemma=詰め/尽くめ/尽くし/漬け]」という条件で検索した。「づめ」と「ずくめ」においてはやや広い範囲の前接要素が見られる（特に「づめ」については 3.6.3 節でも触れることになる）。その一方で「づくし」「づけ」の前接要素は限られている。「づくし」は「歌う」（2件）、「語る」（2件）、「悟る」（1件）、「話す」（1件）、「歩む」（1件）、「出かける」（1件）、「づけ」は「飛び込む」（1件）、「飲む」（1件）、「舐める」（1件）、「食べる」（1件）、「痛む」（1件）が見られた。そして、全体として5件以上検出されたものは「づめ」における「動く」（15件）、「通う」（9件）、「歌う」（6件）、「ずくめ」における「食べる」（5件）といった程度であった³³。

いずれにせよ、「働く」をはじめ、「歩く」「立つ」という一部の前接要素に各接尾辞の用例が集まっていることがわかる³⁴。

く、「[lemma=働く]+[lemma=通す]」のような条件での検索も行い、抽出されたものから接尾辞と思われるものを抜き出して合算している。

³³ 「踊りづめ」「戦いずくめ」「遊びづけ」などの前接部が名詞か動詞か判然としないもの、「使い詰め」（競馬用語）、「出尽くし」（証券用語）などの専門用語、「食べ尽くし」のような複合動詞での使用「食べつくす」からの転成だと考えられるもの（つまり「食べることを継続する」の意ではなく、「あるものを全部食べる」の意を表しているもの）は除いている。

³⁴ 「迷惑を掛ける」「苛々する」といった、「どおし」において頻出の前接動詞が他の接尾辞に現れないことは、注 28 での青木（2016a）の指摘のように、接尾辞から句接辞へと変化していくという立場を取り、「どおし」以外の接尾辞が十分に「句接辞」として定着していないと考えれば、

3.4.2. 「気味」「め」「加減」と「ばなし」「きり」

3.4.2.1 節で「気味」「め」「加減」、3.4.2.2 節では「ばなし」「きり」の使用実態を見ていく。

3.4.2.1. 「気味」「め」「加減」

続いて、主に<状態傾向>の意味を表す「気味」「め」「加減」の関係を見る。「気味」「め」「加減」の中で、とりわけ生産性が高いのは「気味」である。その頻出の前接動詞について、趙（2016）が BCCWJ を用いて調べた結果である表 3.4 を次に示す。

順	前接動詞	例数	順	前接動詞	例数	順	前接動詞	例数
1	疲れる	41	8	諦める	10	12	被る	5
2	太る	33	8	切れる	10	12	落ちる	5
2	遅れる	33	9	酔う	9	13	曇る	4
3	押さえる	26	10	掠れる	8	13	凹む	4
4	開く	16	10	荒れる	8	13	伸ばす	4
5	ばてる	14	10	上がる	8	13	逃げる	4
5	持て余す	14	10	焦る	8	13	引き締める	4
6	下がる	13	11	引く	7	13	びびる	4
6	慌てる	13	11	狼狽える	7	13	痩せる	4
7	サボる	12	11	押す	7	13	減る	4
8	乾かす	10	12	垂れる	5	13	落ち込む	4

表 3.4. 「気味」の前接動詞（趙 2016: 42 を一部改変³⁵）

一方で、「め」「加減」は BCCWJ で検索するには使用例が少ないため、Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11) を用い、「気味」における頻出の前接動詞が「め」「加減」において、どのように現れるのかを調べた。

(10) a. と言うか、かすれ目で画面がよく見えないや。

妥当な説明を与えられる。つまり、影山（1993）に従えば、通常の接尾辞は統語的な要素を介入させないが、ここでの「苛々する」（動名詞）、「迷惑を掛ける」などは統語的な要素と考えられるため、「づめ」以下の接尾辞には現れにくいと説明できる。

³⁵ 趙（2016）では「切れ気味」「酔い気味」「焦り気味」を名詞接続の例としているが、本研究では動詞連用形接続の例として考える。また、「サボり気味」の前接要素も「サボる（動詞）」（4件）、「サボり（名詞）」（8件）として分類されているが、本研究ではこれらを合計した12件を動詞連用形接続の例として考え、それぞれ表 3.4 に反映している。

b. この方の太り**加減**がとても好き。

(jaTenTen11)

検索にあたっては、3.3 節で述べたように(10a)のような実質名詞としての「目」の使用や、(10b)のような「程度」を意味する「加減」の使用は、＜状態傾向＞を表す第三形容詞性接尾辞の例ではないため除外し、表 3.5 のような結果を得た。

	気味	目	加減		気味	目	加減
疲れる	5143	12	1	焦る	2032	1	0
太る	2679	24	1	引く	4288	63	9
遅れる	4622	60	14	狼狽える	63	0	0
押さえる	4287	6801	11	押す	1605	4	2
開く	1088	28	75	垂れる	1169	13	3
バテる	2153	0	0	被る	414	0	0
持て余す	1258	0	0	落ちる	1478	58	9
下がる	3170	709	5	曇る	553	1	18
慌てる	222	3	0	凹む	1278	0	18
サボる	2975	1	3	伸ばす	231	5	6
乾かす	167	7	0	逃げる	106	0	1
諦める	1602	0	32	引き締める	52	1	2
切れる	864	0	14	びびる	589	5	4
酔う	584	4	12	痩せる	1320	15	1
掠れる	659	7	1	減る	230	1	5
荒れる	1568	9	6	落ち込む	1142	0	16
上がる	1193	666	9				

*BCCWJ 内での「気味」の前接動詞の降順

表 3.5. 前接動詞の比較（「気味」「め」「加減」）

ただし、表 3.5 で 0 件の用例も全く存在しないわけではなく、インターネット上では、以下の「バテめ/加減」「持て余しめ/持て余し加減」のように、用例がわずかに見つかるものもある。

(11) a. 広々とした会場ではあるものの、ものすごい熱気でいつもより汗多め少しバテめでしたがフルパワーで挑みました

<https://note.com/shoma_kumamoto/n/n186ab0bb45b1>

b. 11:00 前 社が森

この付近より、H氏、ややバテ加減だ。

<<https://www.yamareco.com/modules/yamareco/detail-238742.html>>

(12) a. そしてひまをもてあまし目にした木原実さんの復帰話。

<<http://2ch.sagac.info/r/mendol/1521266420/>>

b. 当方 2 サムで時間を持て余し加減ではありましたが、前の組のマナーの悪さに参りました

<https://booking.gora.golf.rakuten.co.jp/voice/detail/c_id/310003/page/8/>

「め」「加減」における高頻度の用例は、表 3.5 内における「押さえめ」、そして「控えめ」「俯き加減」である。Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11) において、「押さえめ」は 6801 件（「押さえる+目」で 150 件、「押さえ+目」で 65 件、「押さえめ」で 6586 件）、「控えめ」は 97112 件（「控える+目」で 1008 件、「控え+目」で 87 件、「控えめ」で 96017 件）、「俯き加減」は 4299 件（「俯く+加減」で 3976 件、「俯き+加減」で 323 件）検出される。いずれも表 3.5 における「め」「加減」の他の用例に比して圧倒的に多い。このことから、「押さえめ」「控えめ」「俯き加減」は語彙に近いレベルで定着していると考えられる。

また、「め」「加減」において表 3.5 で示された以外の前接要素がどのように現れるかについて、「[tag=V.g & infl_form=Cont.g]+[lemma=め/加減]」という条件で検索した。各前接要素には(10ab)のようなものも多数混在している。本研究で対象とする<状態傾向>を表す用例について、表 3.5 に示されているものを除けば、10 件以上現れるものは、「め」においては「急ぐ」(242 件)、「下げる」(92 件)、「落ち着く」(58 件)、「冷やす」(42 件)、「乾く」(15 件)、「巻く」(13 件)、「離す」(12 件)など、「加減」においては「傾く」(44 件)、「振り向く」(27 件)、「引っ張る」(15 件)、「閉じる」(13 件)、「浮く」(11 件)が検出される。「振り向き加減」(27 件)が「振り向き気味」(9 件)より多いことを除けば、これらはいずれも「気味」と共に用いられた場合の用例より少なく、また「押さえめ」「控えめ」「俯き加減」ほど突出して多い用例は見当たらなかった。

ここまでの使用実態の観察から、一部の語彙的な定着を除けば、「め」「加減」は、各前接動詞の頻度の差自体に留意する必要はあるものの、「気味」と共通する前接動詞が大体の項

目で広く使えること、その一方でその頻度が「気味」に比してかなり低いということがわかる。

3.4.2.2. 「ばなし」と「きり」

「ばなし」と「きり」はともに<結果状態の継続>において、用例数の多い接尾辞である。生産性が高い接尾辞は「ばなし」であるが、BCCWJ を用いた「キー：[語彙素=放し][品詞=接尾辞]+前方共起：[活用形=連用形]」で検索すると 1590 件が抽出される。以下に上位 10 位までを提示する³⁶。

順	前接動詞	例数
1	点ける	133
2	開ける	111
3	出す	75
4	置く	72
5	入れる	59
6	立つ	56
7	掛ける	40
8	開く	33
9	座る	31
10	やられる	27

表 3.6. 「ばなし」の前接動詞

一方、BCCWJ 内の「きり」の用例を検索（「キー：[語彙素=きり][品詞=助詞]+前方共起：[活用形=連用形]」すると、誤分析や不適当な用例（「とびっきり」など）を除いて 170 件見つかるが、大部分が「任せる」「掛かる」で構成されており、用例に偏りがあることわかる。以下の表 3.7 に 5 件以上の用例を示す。

³⁶ 「打ちっぱなし」は 70 件抽出されたが、その多くが「コンクリート打ちっぱなし」のような本研究で対象外となるような用例であったため、表 3.6 から除いている。

順	前接動詞	例数
1	任せる	66
2	掛かる	47
3	籠もる	19
4	付く	13
5	閉める	5

表 3.7. 「きり」の前接動詞 (BCCWJ)

このような用例の偏りは、Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11) を用いても同様の結果を示す。「[tag=V.g & infl_form=Cont.g]+[lemma=きり]」を条件として検索すると 17610 件を得るが、そのうち適切な「きり」の用例として判断した全件を以下の表 3.8 に示し、同コーパス内の「ばなし」の用例と比べる³⁷。

³⁷ 用例からは「追い切り (競馬)」「撮り切り (映像)」のようなある種の専門用語、「呼び切り」のような方言と思われるもの、「結び切り」(水引を固結びにしたもの)などは除いている。

また、特に用例が多い「掛かりっきり」「付きっきり」の前接要素は語彙素「掛かる」「付く」としては登録されておらず、「掛かり」「付き」で登録されていたものを検索して表 3.8 に反映している。

前接動詞	きり	ぱなし	前接動詞	きり	ぱなし
任せる	5348	1053	おぶさる	3	0
籠もる	2207	643	踏む	3	471
掛かる	2174	(450)	閉じる	3	107
付く	473	(1071)	任す	3	6
閉じこもる	168	84	回す	2	658
閉める	104	370	出る	2	2567
寝かせる	27	60	伸ばす	2	802
座る	25	3497	乱れる	2	153
入る	21	1334	上がる	2	3220
浸る	21	87	つける	1	(1186)
浸かる	16	147	窺う	1	0
構う	12	37	起きる	1	431
与える	12	98	見張る	1	5
向かう	12	169	賑やかす	1	0
死ぬ	11	92	向く	1	133
泊まる	10	51	向ける	1	27
嵌まる	8	255	言う	1	2425
取り掛かる	8	5	塗る	1	162
委ねる	8	10	囚われる	1	29
通う	7	38	従う	1	5
かまける	6	6	立つ	1	8261
預ける	6	700	捕まる	1	64
渡す	6	33	倒れる	1	57
引き籠もる	5	112	出す	1	5557
引っ張る	5	21	寝かす	1	21
寄る	4	22	伸びる	1	490
入り浸る	4	4	置く	1	7088
止まる	4	165			

*列は「きり」の前接動詞の降順

表 3.8. 「きり」の前接動詞 (ja Ten Ten 11)

表 3.8 内の「掛かりっきり」の「掛かる」は「仕事にかかりっきり」など「従事する」の意味だが、「掛かりっぱなし」の「掛かる」は「電話がかかりっぱなし」「病気にかかりっぱなし」などで現れる用例であり、明らかに意味が異なる。加えて「付けっ/付きっきり」も「患者につきっきり」など、「人に寄り添う」といった意味で用いられているが、一方「付

けっ/付きっぱなし」は大半が「電気をつけっぱなし」「電気がつきっぱなし」などの用例で用いられており、(13) のような「付けっ/付きっきり」と同様の意味で用いる場合は3件ほどにすぎなかった。すなわち、「きり」に前接する動詞の多くを占める「掛かる」「付ける」は、「ぱなし」とその使用を同じくしていない（そのため、表 3.8 内では「ぱなし」の用例数を（ ）で表現している）。

(13) ほとんど、お客様に付き**っぱなし**で仕事が終わりました

(ja Ten Ten 11)

「きり」の前接動詞は、「任せる」「籠る」「掛かる」「付く」がそのほとんどであり、その他には、「ぱなし」と共通する前接動詞が広く、低い頻度で用いられている。このような傾向は、「気味」と「目」「加減」の使用傾向と類似する。

3.4.3. 「がち」「気味」と「ぱなし」「どおし」

ここでは多義性に注目し、「がち」と「気味」、そして「どおし」と「ぱなし」の関係を扱う。接尾辞自体の生産性の高低に注目した先ほどとは違い、この観点からは、「がち」と「気味」、そして「どおし」「ぱなし」は、それぞれ生産性が高い接尾辞である。しかし、3.4.3 節では、特に意味用法レベルの使用の頻度に注目する。

3.4.3.1. 「がち」「気味」

ここでは多義的な接尾辞「がち」と「気味」の関係を扱う。まず、「気味」と同様、BCCWJ を用いて「がち」の前接動詞について検索した趙（2016）を引用した表 3.9 を示す。

順	前接動詞	例数	順	前接動詞	例数
1	成る	602	15	傾く	20
2	為る	399	15	曇る	20
3	有る	221	16	沈む	19
4	思う	109	17	夢見る	17
5	考える	84	18	途絶える	16
6	躊躇う	71	19	行く	14
7	忘れる	61	19	走る	14
8	遅れる	46	20	引き籠もる	13
9	陥る	42	20	送る	13
10	見落とす	28	20	滞る	13
11	閉じこもる	27	21	頼る	11
12	偏る	25	22	俯く	10
13	籠もる	23	22	見逃す	10
14	起こる	22	22	見失う	10
14	休む	22	22	見る	10
14	途切れる	22	22	失う	10

*補助動詞「てしまう (293 例)、ておく (2 例)、ていく (3 例)、てくる (2 例)、てくれる (1 例) を除いたもの

表 3.9. 「がち」の前動詞 (趙 2016: 35)

表 3.1 のように「がち」は<頻度傾向>と<状態傾向>の意味を持つ。現代語における「がち」の意味については、まず頻度や反復に関わるものとして説明される (井上 1998、島岡 1998、中村 2002、幸田 2011、大江 2014 など)。以下に用例を示す。

(14) 彼は最近ミスをし**がち**だ。 <頻度傾向>

八尾 (2006) は、「がち」は頻度傾向を持つことが多いとしているが、同時に「がち」の用法について、「気味」と同様に<状態傾向> (八尾 2006 では<状態の傾き>) を表すものがあるとしている。この場合は(15)のように限られた「一部の」名詞や動詞が前接すると指摘している。(16)にその用例を示す。

(15) 名詞…黒目 岩 山 : 遠慮 伏し目

動詞…うつむく 途切れる 夢見る ためらう

(16) この人は俯き**がち**に話を聞いていた。〈状態傾向〉

本研究は、動詞連用形接続に注目するものであるが、「うつむく」(22位)「途切れる」(14位)「夢見る」(17位)「ためらう」(6位)は、いずれも表3.9に現れることからわかるように、比較的頻度が高く、語彙的な定着度が高いと考えることができる。この点、3.4.2節の「控えめ」「俯き加減」などに似ている。

また、第2章でも触れたことであるが、八尾(2006)が挙げた前接要素のみならず、上記の表内の「遅れる」(8位)や「持て余す」「サボる」などのような動詞は〈頻度傾向〉というより、〈状態傾向〉という解釈が可能となる用例がある。BCCWJ内で「がち」の前接動詞として「遅れる」は46件、「サボる」は3件、「持て余す」は1件見つかると、以下の(17)にそのような用例を示すが、この「遅れる」「持て余す」「サボる」は「気味」における頻出の前接動詞でもある(表3.4内で「遅れる」(2位)「持て余す」(5位)「サボる」(7位))。

(17) a. このように狭くて高い部分のステアリングを握っていると、一度に切れる舵角の量が少なくなるので操作が遅れ**がち**にもなる

<<https://www.webcartop.jp/2018/03/220504/>>

b. 落って美味しいのですが、、、葉っぱが持て余し**がち**になるのはわたくしだけでしょうか。。。

<<https://ameblo.jp/sekihin-hibi/entry-11981724274.html>>

c. 帰りが遅くなると書き込みがサボり**がち**だなあ。

<http://blog.livedoor.jp/mustuainitidaimae23/?ref=head_btn_home&id=1740638>

一方で、次の(18)のような用例に見られるように「気味」は〈状態傾向〉を表す。

(18) 彼は今の彼女を持て余し**気味**だ。 〈状態傾向〉

従来「気味」は、上のような〈状態傾向〉を表し、井上(1998)などで指摘されているように「あり気味」「読み気味」などの使用は容認されないとされ、前接動詞に制限があると考えられてきた。実際にBCCWJ内ではそのような例は見つからない。しかし、本来は認可

されないと思われる次のような用例が Web 上で見つかる。

- (19) 最近、身の回りの事を書き**気味**なので、今日は、仕事の事に関して書きたいと思います。

<<http://rihachi8.blog.fc2.com/blog-entry-46.html?sp>>

- (20) まいどです。最近とろみがかったラーメンを食べ**気味**です。

<<https://ameblo.jp/8fugu/entry-10817273115.html>>

(19)(20)のような「気味」は、「がち」と同じく頻度傾向>を意味する新奇な用法として解釈するのが妥当だと考える。

3.4.3.2. 「ばなし」「どおし」

また「ばなし」には、以下の(21)(22)のように<結果状態の継続>の他に<動作・出来事の継続>の意味があるが、これが「ばなし」にとって周辺的な意味であることは、表 3.6 の BCCWJ 内の前接動詞を見てもわかる。「ばなし」は、前接要素は「つける」「開ける」などの瞬間動詞が多く、それに対応して<結果状態の継続>の意味を表すことが多いと想定される³⁸。

- (21) 彼は部屋の窓を開け**ばなし**だ。 <結果状態の継続>

- (22) 彼は1時間歌を歌い**ばなし**だ。 <動作・出来事の継続>

一方、<動作・出来事の継続>を表すと思われる用例は BCCWJ 内では多くないと思われる。<動作・出来事の継続>を多くの場合表す継続動詞は、最も多い用例で「言う」(18件)であるが、この18件には(23)(24)のように<放置の状態>(第2章で<結果状態の継続>との共通性から、一つにまとめた意味)と解釈できる用法が混在しており、<動作・出来事の継続>の解釈の用例はさらに限られる。

³⁸ 「ばなし」の前接動詞の種類と意味の関係については、中村(2009)がより詳しく、主体動作動詞の場合、本研究での<動作・出来事の継続>を表すことが多く、主体変化動詞あるいは主体動作・客体変化動詞の場合、<結果状態の継続>を表すことが多いことを示している。

(23) 特に知恵袋は言**いっぱなし**ですから、下劣な質問は登場しほうだいです。

(Yahoo!知恵袋 2005年、BCCWJ)

(24) なにが監督と監督との対談だよ。言**いっぱなし**の無責任な発言。

(Yahoo!ブログ 2008年、BCCWJ)

その他の継続動詞の前接要素も「走る」(7件)「働く」(1件)「歩く」(2件)など一部に留まっている。

次に「どおし」についてである。「どおし」に前接する動詞は表 3.2 に示しているが、もっぱら<動作・出来事の継続>を表す。

(25) 彼は1日働き**どおし**だ。 <動作・出来事の継続>

一方、「どおし」が<結果状態の継続>を表す場合、つまり、瞬間動詞が前接要素である場合、BCCWJ内では「立つ」だけが、前接動詞全体の中でも高い頻度で用いられ、(26)のような「立ちどおし」の使用というのは、<結果状態の継続>を表す用例の中では、際立っているとと言える。それ以外にも(27)のような瞬間動詞の用例が Web 上の一部で見られるが、主な使用ではないと思われる。

(26) 彼は廊下に立ち**どおし**だった。

(27) 奥歯の型取りだったので、お口を開け**どおし**でした お疲れさまです。

<<https://blog.goo.ne.jp/masamasa0808/e/423d88986a6e6e50327ac9a6b95bc667>>

興味深いことに「がち」「気味」と「ぱなし」「どおし」の意味は相補的な分布を見せている。<傾向>の意味については、<頻度傾向>は「がち」が、<状態傾向>は「気味」が主に担っている。一方で、<継続>の意味については、<結果・状態の継続>は「ぱなし」が、<動作・出来事の継続>は「どおし」が主に担っている。このように形式を超えて両者が合わせて<傾向><継続>全体の意味をカバーしている。

	ばなし	どおし
動作・出来事の継続	少	多
結果状態の継続	多	少

	がち	気味
状態傾向	少	多
頻度傾向	多	少

表 3.10. 「がち」「気味」と「ばなし」「どおし」における相補的分布

このような分布の中で、「がち」が<状態傾向>、「気味」が<頻度傾向>、「ばなし」が<動作・出来事の継続>、「どおし」が<結果状態の継続>の意味で使用される頻度は低く、その点で 3.4.2 節で見られた関係と同様である。

3.4.4. 使用実態のまとめ

3.4.1 節では「どおし」において頻度の高い前接動詞（「働く」「歩く」「立つ」）が他の接尾辞にも現れていることを確認した。3.4.2 節では語彙的な定着度が高い「め」「加減」が、低い頻度ではあるが「気味」と同様の前接動詞が広く用いられており、同じ関係が「きり」と「ばなし」にも見られることを確認した。3.4.3 節では一部の「がち」の用例が、「気味」と同様<状態傾向>表しており、その反対に一部の「気味」の用例が、「がち」と同様に<頻度傾向>の意味を表していること、また同じ関係が「ばなし」と「どおし」にも見られることを確認した。

3.5. 理論的背景と異なる接尾辞間の結びつき

3.4 節で示した使用実態をどのように説明できるだろうか。第 1 章で述べた類推、スキーマに基づく用法の拡大を確認し、異なる接尾辞間が抽象的なレベルで繋がることについて述べる。

3.5.1. 類推とスキーマ

新表現の産出において、類推に基づくかスキーマに基づくかという立場があるが、本研究

では、第1章でも示したように、構文³⁹という観点を取り入れ、具体的な事例に基づく類推(28)と、抽象的なスキーマ(29)のどちらか一方ではなく、ある時は、より具体的なレベル(類推)、ある時は、より抽象的なレベル(スキーマ)に基づくことで、新たな表現パターンを生み出していくと考える。

(28) seem : seemed :: dream : dreamed (第1章(24)の再掲)

(29) [[x]Ni [gate]N]Nj ↔ [political scandal pertaining to SEMi]j (第1章(27)の再掲)

3.5.2. 異なる接尾辞間のつながり

類推的变化は、上の Langacker (2000) の指摘のように、「何らかの共通性に基づいて」なされると考えられるが、どのように類推が働くかは先行研究で必ずしも特定されているわけではなかった。しかし、本研究で3.3節までに示した各接尾辞における前接動詞の分布は、類似した意味を持つ接尾辞同士が共通の前接動詞を接続させることを示している。これを説明するためには、類推(事例)レベルであれ、スキーマレベルであれ、生産的な接尾辞をモデルにすることで、ある接尾辞がその用法を拡大させると想定することが合理的であると考える。

では、実際に拡大においてはどのような要因が存在するのだろうか。本研究では、次の図3.1で示されるような、意味と形式⁴⁰の類似・共通性に基づく異なる接尾辞間の結びつきが重要だと考える。

³⁹ 本研究での構文の定義は、第1章で示した Goldberg (2013) の次の記述に従うものとする。

(i) Constructions are defined to be conventional, learned form-function pairings at varying levels of complexity and abstraction (第1章(23)の再掲)

⁴⁰ 本章での接尾辞(句接辞)の品詞性は、第2章での考察の通り、第三形容詞性接尾辞(と形容動詞性接尾辞)に相当するが、簡潔に示すため、単に「接尾辞」と表記している。

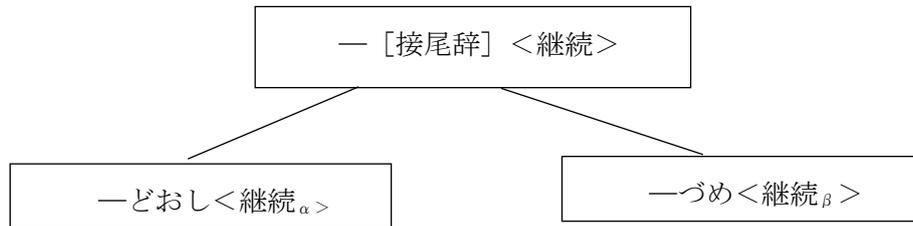


図 3.1. 異なる接尾辞間の結びつき

図 3.1 では、「どおし」と「づめ」は、下位レベル（具体的レベル）では形式が異なり、それぞれが表す<継続>の意味もそれぞれ微妙に異なっている（ α/β で表現）が、上位レベル（抽象的レベル）においては、同じ形式と意味であることが見出され、両者が結びつく⁴¹。この抽象的な共通性に基づき、「どおし」と「づめ」の比較が可能になると考える。

第 1 章で示した Tuggy (2007) や Booij (2010) の研究は、-jet や(29)における-gate などの合成表現の前部に新たな形態素が入ることで新用法が形成されていくという過程を想定している。本研究ではこのような過程を、上記のようにより広く想定することで、「どおし」「づめ」などの異なる接尾辞で同じような前接動詞が現れることを説明することができるかと主張する。これにより、個々の合成表現の使用の拡大だけでなく、それを包括する句接辞というカテゴリー全体の広がりをも説明することが可能になると考えられる。

3.6. 用法拡大の過程

3.6 節では用法拡大の過程について考察する。3.6.1 節は「どおし」に基づく類推的な使用の広がり、3.6.2 節は「気味」に基づくスキーマレベルの使用の広がりについて考察する。3.6.3 節では、3.6.1 節と 3.6.2 節での考察を基本としつつ、どちらのケースにおいても類推とスキーマの両方が用法の拡大に関わる可能性について述べる。3.6.4 節では用法の広がりが意味の拡張に及ぶ場合を扱う。

⁴¹ このような異なる形式の接尾辞間に抽象的な共通性（スキーマ）を見出すことは、新しい発想というわけではない。Tomasello (2003) は、言語獲得において「パターンの発見」が重要であると主張しているが、その類似性は必ずしも表面的である必要はなく、“X hugs Y” “A kisses B” “M kicks N”のような動詞、動作主、対象が異なる場合でも、その関係性から抽象的なパターンを見出すことができるとしている。

3.6.1. 「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」と用法の広がり

3.4.1 節で見てきたように「働く」「歩く」「立つ」など「どおし」における一部の高頻度の前接動詞が他の接尾辞にも現れている。

このような用法が現れるようになる過程はどのようなものだろうか。「づめ」の場合を例にすると、「どおし」と「づめ」においては、ともに「働く」という前接要素が多く、これを起点として事例レベルで「どおし」「づめ」の比較がなされたと想定できる。以下にその比例式を示す。

$$(30) \text{働きどおし} : \text{働きづめ} = \text{歩きどおし} : \text{歩き}[X] \quad [X=\text{づめ}]$$

これらの接尾辞は共通して<継続(動作・出来事の継続+結果状態の継続)>の意味を表す。

(30)の比例式は図 3.2 のように「V 連用形+ [接尾辞] <継続>」⁴²が「働きどおし」「働きづめ」の背景にあり、それを基盤として両接尾辞が比較されることで成り立つ。

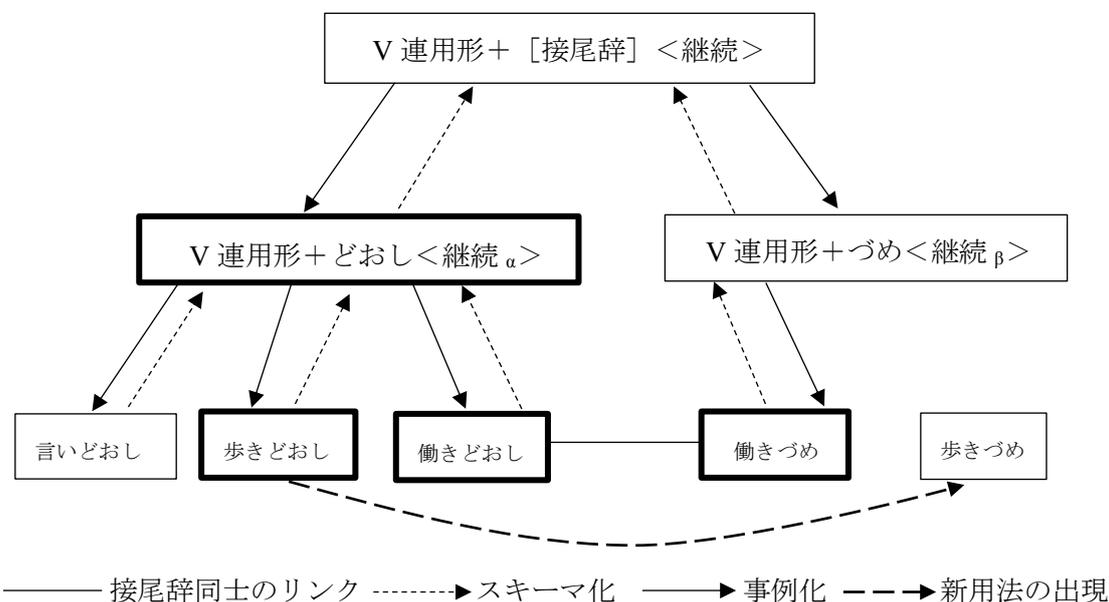


図 3.2. 「づめ」の使用拡大

Barðdal & Gildea (2015) は、次の図 3.3 のようにタイプ頻度とトークン頻度のうち、定着

⁴² 本研究では構文をこのように、「形式<意味>」の形で表す。

度が高いものを太枠で示している。タイプ頻度が高い図 3.3(a)では、スキーマが話者の脳内に定着しており、トークン頻度が高い図 3.3(b)では、個々の事例が定着し、事例から抽出されるスキーマが脳内で意識されることはないとしている⁴³。

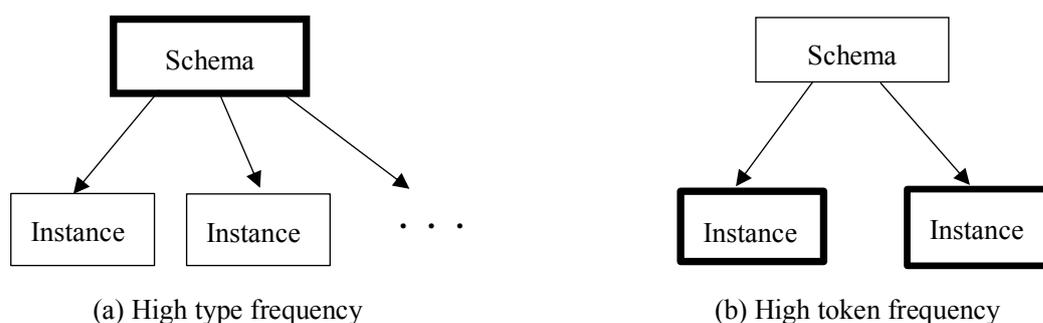


図 3.3. 異なるレベルの定着 (Barödal & Gildea 2015: 33)

図 3.2 はこれに従い、それが事例レベルであれ、スキーマレベルであれ、話者の脳内で強く定着しているレベルを太枠で示している。また、「どおし」のようにスキーマレベルで定着していても「働きどおし」のように、事例レベルで特に頻度が高いものがある場合、そのレベルでの定着度も高いと考え、同様に太枠で示している。

両接尾辞における共通の背景としての抽象的なスキーマ「V 連用形+[接尾辞]<継続>」や、「V 連用形+づめ<継続>」というスキーマの定着度は低い。そのため、事例レベルで定着している「働きづめ」と「働きどおし」が繋がる。直接比較される、このような繋がり のことを便宜上「リンク」と呼んでおく。これに基づき、「歩きどおし」から「歩きづめ」が現れることになる。一方、頻度の低い「言いどおし」からは「言いづめ」は出現しない。他の接尾辞においても同じ過程が想定できる⁴⁴。

⁴³ 「頻度」と定着度の研究における日本語の合成語の研究としては、浅尾 (2007, 2013) による複合動詞の研究がある。浅尾は複合動詞について頻度的なデータに基づいて、どのようなスキーマレベルが定着しているかを分析しており、その境界は曖昧ながらも統語的複合動詞は定着度が高いスキーマに支えられ ([V-始める]など)、語彙的複合動詞は個別に定着している (「見破る」など) と述べている。

⁴⁴ 本節内で扱う接尾辞の<継続>の下位には<動作・出来事の継続><結果状態の継続>の各用法があり、サブスキーマとして「V 連用形+どおし<動作・出来事の継続>」などが形成されていると考えられる。しかし、生産性がより低い接尾辞だとわかりやすいが、「働きづくし<動作・出来事の継続>」「立ちづくし<結果状態の継続>」のように数少ない前接要素の中に両方の意味が現れており、本節内で見た、事例ベースの拡大過程においてこのようなサブスキーマは有効に働いていないと考え、表示していない。

しかし、「ずくめ」の場合は、動詞連用形ではなく、名詞接続使用が中心である。「ごちそうずくめ」「いいことずくめ」などの用例があり、＜モノやコトの多さ＞を表す。そこから、(31)のように動詞連用形に接続し、＜継続＞の意味を表すようになったと思われる。では、このような過程でどうして「働かずくめ」が多くなるのだろうか。

(31) ごちそうずくめ、いいことずくめ → 働かずくめ、立ちずくめ
 <モノの多さ> <コトの多さ> <継続>

「N+ずくめ」の用例は BCCWJ で 162 件見つかる（「キー：[語彙素=尽くめ][品詞=接尾辞]+前方共起：[品詞=名詞]」）。前接要素は「黒」（70 件）、「こと」（43 件）が多いが、注目したいのは「仕事」（1 件）である。

他の接尾辞を見ると、「どおし」は通常、名詞接続は認めにくい⁴⁵。一方「づめ」は動詞接続ほど生産的ではないが、名詞接続が可能である。これらに先ほどの「ずくめ」と同様に名詞接続が主である「づくし」「づけ」を含め、Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11) 内で「仕事」との共起を検索した結果が表 3.11 である。

仕事どおし	2 件
仕事づめ	90 件
仕事ずくめ	70 件
仕事づくし	38 件
仕事づけ	608 件

表 3.11. 前接要素「仕事」の用例数

興味深いことに、通常、名詞接続が認めにくい「どおし」にも、以下のような「仕事どおし」の用例がわずかに 2 件だけが見つかる。

- (32) a. 画像は本日の弁当～今日は仕事**通**しで、今休憩です(ω⁻A)
 b. あーいかわらず寝ずの仕事**通**しで。

⁴⁵ 「夜通し」のような、名詞「夜」を接続させ、副詞として用いられる場合はある。

前接要素「仕事」と「働く」は品詞としては異なるものの、意味的に近く、一方の使用が一方を連想させることで用法が広がったことを窺わせる。すなわち、「どおし」「づめ」は、用例数の多い「働きどおし/づめ」から「仕事どおし/づめ」が可能になり、逆に「ずくめ」「づくし」「づけ」は用例数の多い「仕事ずくめ/づくし/づけ」から「働きずくめ/づくし/づけ」が可能になっていったと考えられる。

さらに、このような「仕事」と「働く」の類似性に基づく動機付けだけでなく、他の接尾辞に基づく動機付けも働く。例えば(33)のように「仕事づめ」と「仕事ずくめ」が結びつくことで「づめ」と「ずくめ」が比較され、定着度の高い「働きづめ」から「働きずくめ」の使用が可能になると考えられる。

(33) 仕事づめ：仕事ずくめ＝働きづめ：X ずくめ [X＝働き]

ここでは、前接要素の拡大と同時に、「ずくめ」の意味拡張（＜モノ・コトの多さ＞から＜継続＞）にも他の接尾辞が関わっていることになる。同じ過程は「づくし」「づけ」にも当てはまるものと考えられる⁴⁶。

3.6.2. 「気味」「め」「加減」と「ばなし」「きり」の用法の広がり

3.4.2.1 節で述べたように、「め」「加減」は「控えめ」「俯き加減」などの語彙的な定着度が高い⁴⁷。その一方で、低い頻度で「気味」と同様の前接動詞が広く用いられている。本節では「め」「加減」の用法が広がる過程を考える（図 3.4）。

⁴⁶ この関係と類似するものとして、名詞接続が多いと思われる「びたり」において、「酒びたり」に対し「飲みびたり」のような用例が見つけられる。

(i) そんなこと言っていますが、私も酒の誘惑にはすぐ負けてしまうので飲み**浸り**の日を送っています。でも、考えることが好きなのでいろいろ考えています。

< https://www.jfpi.or.jp/ JBFA/seminar/0902_20/index04.html >

⁴⁷ Langacker (1987) は、合成構造において、それぞれの成分構造が貢献していると意識する度合いのことを分析可能性 (analyzability) と呼んでいる。3.4.2 節で確認したように、「控えめ」「俯き加減」、そして「任せっきり」などは、他の前接要素から成る場合よりも、際立って頻度が高く、「動詞連用形」と「接尾辞」の組み合わせで作られているという意識が低いため、分析可能性が低いと思われる。

「加減」の場合を例にすると、「加減」は「俯き加減」での定着度が非常に高い。まず、「俯き加減」を中心とする使用から「V 連用形+加減<状態傾向 β >」が抽出される。一方で、多くの事例から抽出され、定着度が高い「V 連用形+気味<状態傾向 α >」が存在する。「V 連用形+加減<状態傾向 β >」自体の定着度はそれほど高いわけではないが、両者の間に共通するスキーマ「V 連用形+ [接尾辞] <状態傾向>」を基盤としてリンクができる。

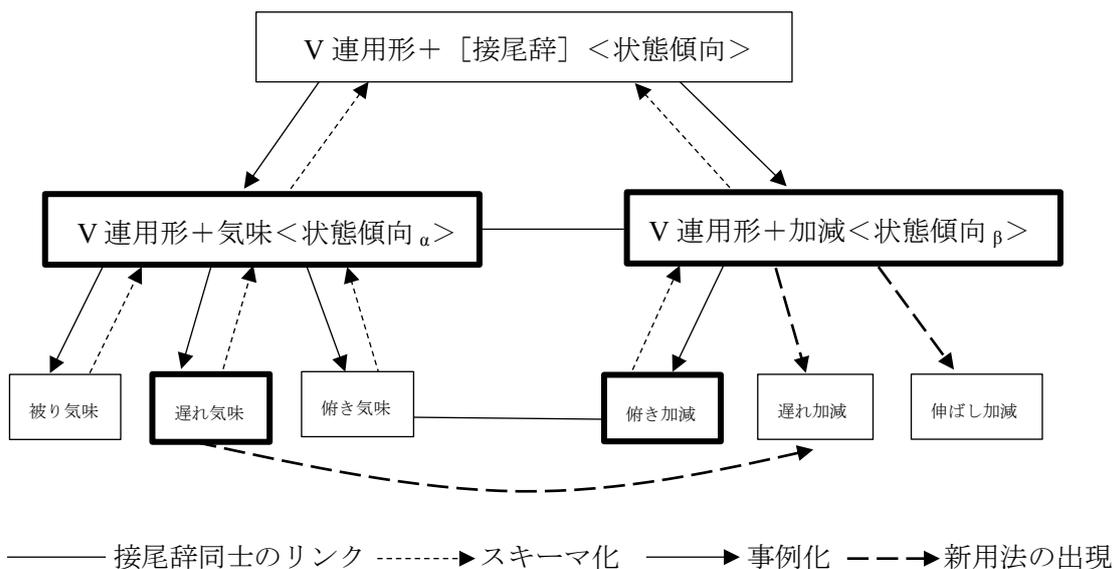


図 3.4. 「加減」の使用拡大

このようなスキーマレベルのリンクは、3.6.1 節のように事例レベルにおいて定着度の高い「俯き加減」に対して同じ前接要素を持つ「俯き気味」が存在し、両者にリンクができることにも支えられる。

定着度の高い「V 連用形+気味<状態傾向 α >」と結びつくことで、「V 連用形+加減<状態傾向 β >」が一時的に活性化する(図 3.4 内ではあらかじめ太枠で示している⁴⁸)。これで、語彙的に定着していた「俯き加減」が分析的に捉えられるようになる。これにより「V 連用形+加減」を基に用法が拡大する。前節とは異なり、スキーマに基づく用法拡大のモデルは、「疲れる」「遅れる」のような「気味」において高い頻度で現れる前接動詞だけでなく、「伸ばす」のような「気味」においてそれほど頻度が高くない前接動詞も、「加減」において出

⁴⁸ 厳密には図 3.4 における「V 連用形+加減<状態傾向 β >」は一時的な活性状態にあり、定着しているわけではないが、便宜上、同じ太枠で示す。定着と活性化の関係については別稿で論じたい。

現する（「伸ばし加減」）ことを説明可能にする。ただし、ここでの「V連用形」はどのようなものでも可能であるわけではなく、「V連用形+気味」との比較に基づいており、「気味」に前接し得る動詞に限られる。「V連用形+気味」の用例における「気味」が「加減」に置き換わる形で用法が拡大するのである。

同じく 3.4.2.2 節で分布を見た「ばなし」と「きり」においても図 3.4 で説明した過程を当てはめることができる。「ばなし」と「きり」はほとんどの場合、共通して<結果状態の継続>の意味を持ち、「ばなし」は全体的に生産性が高く、「きり」においては、「任せっきり」のような事例レベルで定着度が高い用法がある。そして、図 3.5 で表されるように「ばなし」の前接動詞が「きり」においても出現する。

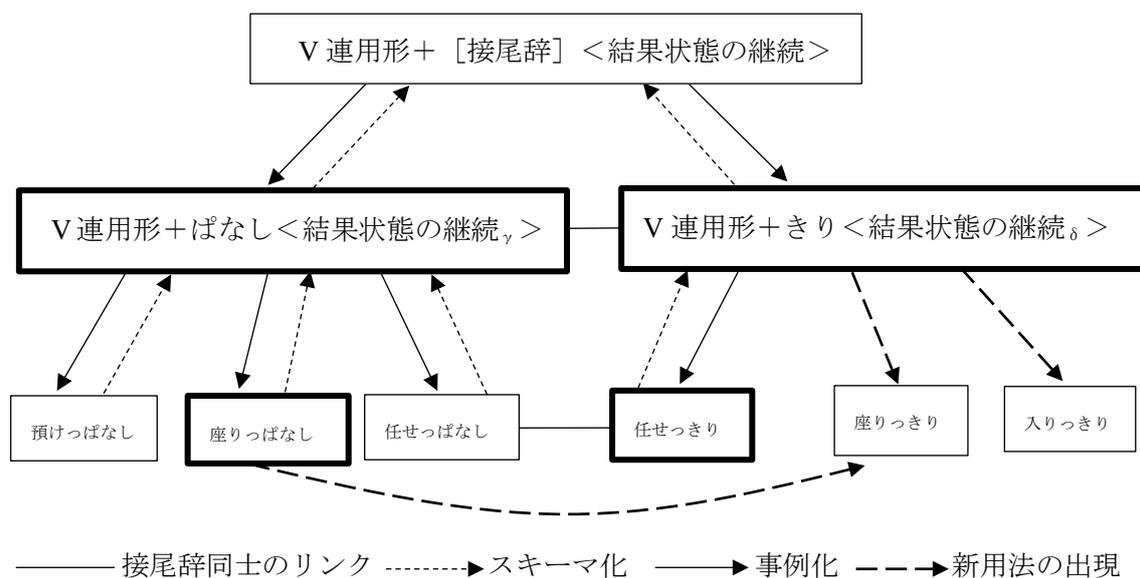


図 3.5. 「きり」の使用拡大

3.6.3. 「類推」と「スキーマ」の同時的活性化

3.6.1 節では類推（事例レベル）、3.6.2 節ではスキーマに基づく用法の拡大について論じてきたが、本研究では類推とスキーマのどちらか一方が必ずしも、排除されるわけではないという立場を取っている。

3.6.2 節の図 3.4 において、「遅れ気味」から「遅れ加減」間の矢印で示しているが、先に述べた「俯き加減」と「俯き気味」との事例レベルのリンクに基づき、「遅れる」のような「気味」において使用頻度の高い前接要素が「加減」にも現れるという経路も想定することができる。幅広い用法の広がりの説明するのにスキーマを用いることは合理的ではあるが、

事例レベルの類推的な用法拡大の経路自体が否定されるわけではない。図 3.5 における「座りっぱなし」から「座りっきり」間の矢印も同様である。

また、3.6.1 節で扱った接尾辞も、3.4.1 節で述べたように完全に「働く」「立つ」「歩く」だけが前接要素として現れているわけではない。特に「づめ」においては Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11) で「[tag=V.g & infl_form=Cont.g]+[lemma=詰め]」という条件で検索すると、「め」「加減」ほどではないものの、頻度が低いながらも比較的幅広い前接要素を接続させることがわかる。表 3.12 に「どおし」における同じ前接動詞の件数を併記したものを提示する。

	づめ	どおし		づめ	どおし
働く	1658	208	食べる	2	32
歩く	201	275	走る	2	56
立つ	68	132	描く	2	5
動く	15	25	言う	1	3
通う	9	2	向かう	1	3
歌う	6	34	走り回る	1	1
話す	4	14	弾く	1	7
叩く	3	2	入る	1	1
出る	3	2	鳴く	1	63
喋る	2	147	冷やす	1	0
泣く	2	332	唸る	1	0
書く	2	3			

*列は「づめ」の前接動詞の降順

表 3.12. 「づめ」に前接する動詞連用形の分布と「どおし」との比較

上の分布は、「気味」「め」「加減」を扱った表 3.5 にやや近づいている。この場合、類推を中心としつつも、「V 連用形+どおし」とリンクした「V 連用形+づめ」というスキーマも働いていると想定することで、むしろ、より「づめ」の分布に沿った用法拡大の説明をすることができる。

3.6.4. 「気味」「がち」と「ぱなし」「どおし」の用法の拡大

ここでは「気味」が、「がち」と同様の〈頻度傾向〉の意味を表すようになる過程を考察する(図3.6)。「気味」は〈状態傾向〉、「がち」は〈頻度傾向〉の意味での用法で、それぞれ生産性も定着度も高いが、それを図3.6内では太枠で示している。

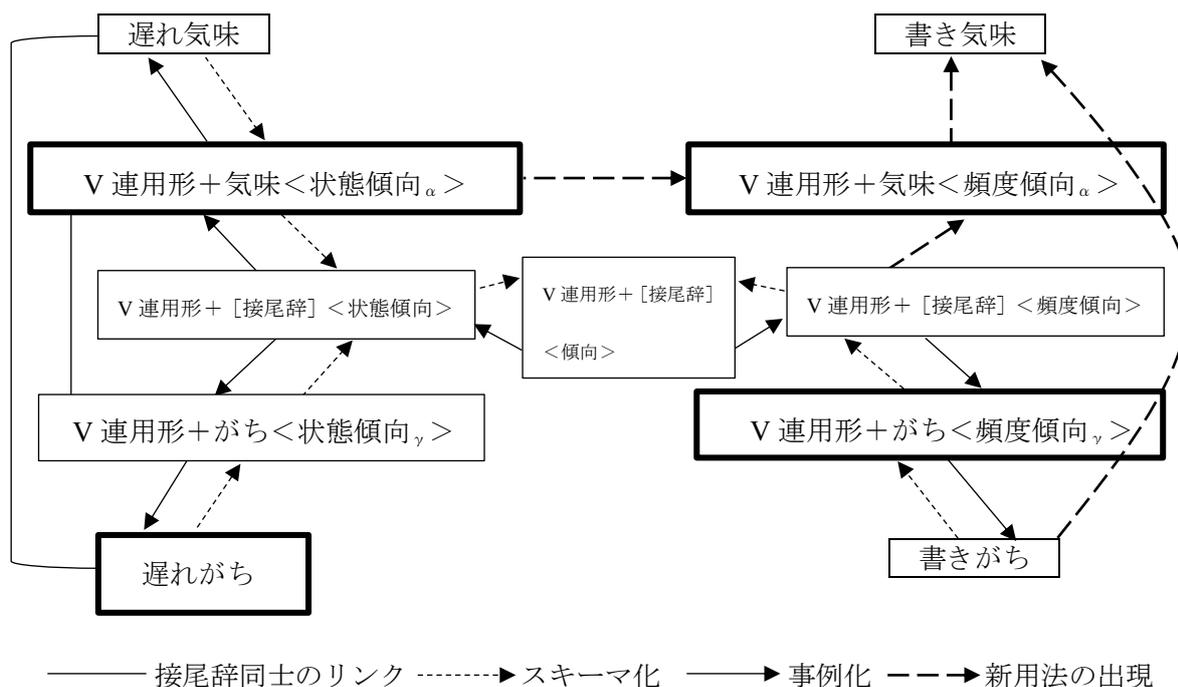


図3.6. 「気味」の使用拡大

「気味」「がち」はそれぞれ、〈状態傾向〉〈頻度傾向〉において生産的な接尾辞であるため、そこから抽出された「V連用形+気味〈状態傾向_α〉」と「V連用形+がち〈頻度傾向_γ〉」は、共通のスキーマとして「V連用形+[接尾辞]〈傾向〉」を持つ(図3.6中央)。しかし、これは両者にとってかなり抽象度が高い共通性であり、これをきっかけに両者が強く結びつくことはやや想定しにくい。

注目したいのは、「がち」にも〈状態傾向〉の使用が可能であるという点である。「V連用形+気味〈状態傾向_α〉」と「V連用形+がち〈状態傾向_γ〉」が、共通する「V連用形+[接尾辞]〈傾向〉」を背景に結びつく(図3.6左部分)。これにより、「V連用形+がち」と「V連用形+気味」の比較が可能になる。

また、「気味」は「遅れる」のような前接動詞において、「がち」と使用が重なる(趙2016参考)。下の(34)における「がち」は、〈状態傾向〉〈頻度傾向〉のどちらにも解釈できる

が、このような「がち」の使用が「気味」とのリンクになることにも、両者の結びつきは支えられる。

(34) このように狭くて高い部分のステアリングを握っていると、一度に切れる舵角の量が少なくなるので操作が遅れがちにもなる

((17a)再掲)

また、「V 連用形+ [接尾辞] <傾向>」(3.6 図中央)を共通のスキーマとして、「V 連用形+がち」は<状態傾向>だけでなく、<頻度傾向>の意味を持つ。

こうして、「V 連用形+がち<状態傾向_γ>」と「V 連用形+気味<状態傾向_α>」との関係に比べられる形で、「V 連用形+がち<頻度傾向_γ>」に対し「V 連用形+気味」にも「がち」が置き換わる、つまり「V 連用形+気味<頻度傾向_α>」に基づく用法が出現することになる(図 3.4 や図 3.5 と同様にこのスキーマが一時的に活性化していることは太枠で示している)。また、3.6.3 節で述べたように、「がち」において比較的定着度の高い「遅れがち」と「遅れ気味」という事例レベルの比較(類推)を通じて、「書きがち」から「書き気味」が可能になるという経路も想定することができる。

これとは逆に「がち」が「サボりがち」「持て余しがち」などの形でわずかな頻度で<状態傾向>を表す場合にも同じ経路をたどると考えることができる。

また、「ばなし」と「どおし」の関係も、表 3.6 で見たように「がち」と「気味」の関係と同様である。

「ばなし」の場合を考えると、「ばなし」も上記の過程をたどることで<動作・出来事の継続>を表せるようになると考えられる。以下の図 3.7 にその過程を表している。「V 連用形+ばなし<結果状態の継続_γ>」と「V 連用形+どおし<結果状態の継続_α>」のリンクから、「V 連用形+ばなし」と「V 連用形+どおし」の比較が可能になり、「V 連用形+どおし<動作・出来事の継続_α>」における「どおし」が「ばなし」に置き換わる、つまり「V 連用形+ばなし<動作出来事の継続_γ>」に基づいて例が出現する(このスキーマが一時的に活性化していることは太枠で示している)。なお、事例レベルでのリンクは「立つ」のような、<結果状態の継続>の意味を表し、「どおし」において頻度が高い前接動詞が想定できる。反対に、「どおし」が「開けどおし」などの形で、わずかな頻度で<結果状態の継続

>を表す場合にも同じ過程が考えられる⁴⁹。

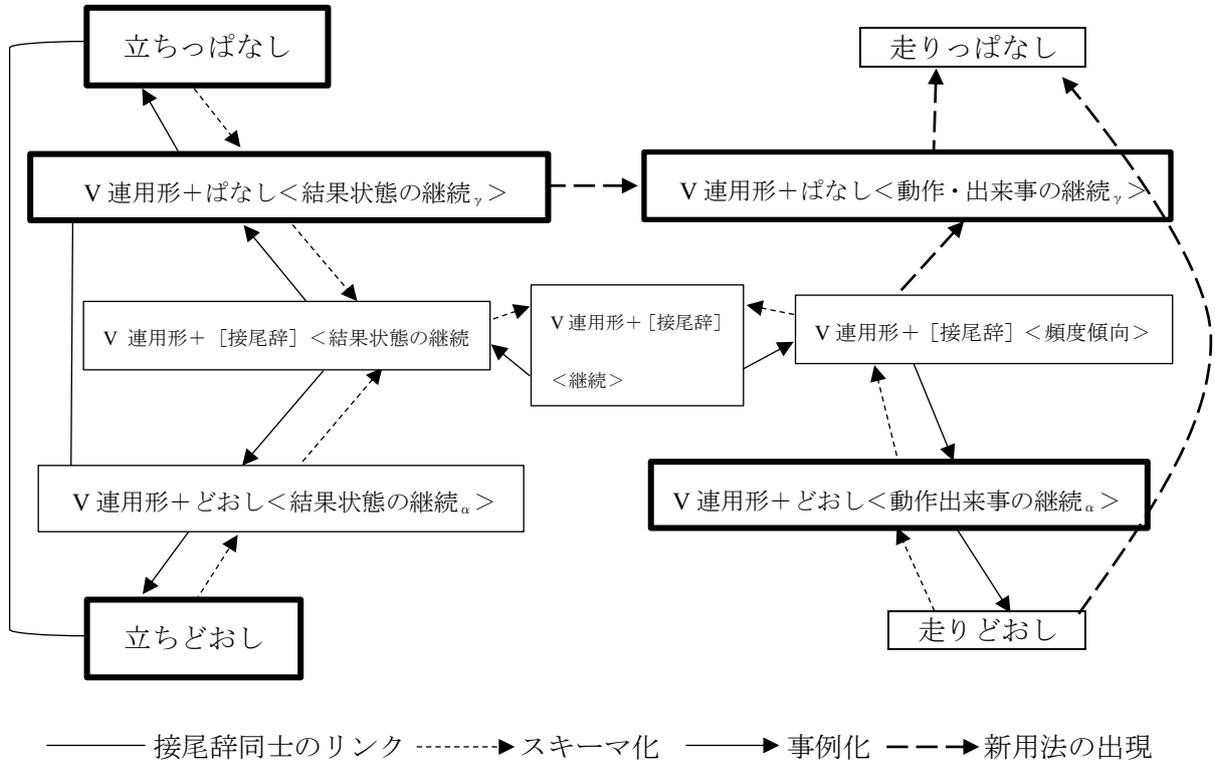


図 3.7. 「ばなし」の使用拡大

3.7. 動機付け

本章では異なる接尾辞間で繋がりができ、用法が拡大していく過程について考察してきた。しかし、このような使用の拡大は何によって動機付けられているのだろうか。

各節でそれぞれ扱ってきた接尾辞は類義的である。Cruse (2011: 142-143) は、全ての文脈において交換可能な *absolute synonyms* はほぼ存在しないと述べており、それと区別して、意味のニュアンスに違いがあることを強調した *near synonyms* という用語を設けている。Lyons (1981) は *absolute synonyms* は記述性の高い科学的な専門用語においてのみあり得るとしている。

本研究では便宜上、<継続>や<傾向>のようなラベルをつけているが、各図の中の α 、

⁴⁹ <動作・出来事の継続><結果状態の継続>の用例があるものの、接続する前接動詞が比較的限定的、つまり接尾辞自体の生産性が低い「づめ」「ずくめ」「づけ」「づくし」「きり」などを含めた用法拡大については、別稿で論じたい。

β などの記号で示されているように、それぞれの接尾辞の意味は正確には異なるはずである。

本研究における全ての接尾辞に関する意味研究があるわけではないが、例えば3.6.4節で扱った「がち」と「気味」を比べると、八尾(2006)は、〈頻度傾向〉を表す「がち」は「気味」と違い、前接要素に関わらずマイナスイメージが付加されることを指摘している。

(35) 彼は最近、公園を歩きがち/気味だ。 〈頻度傾向〉

この違いが、(35)のように同じ〈頻度傾向〉の意味でも、負の評価が付加しない「気味」を新たに使おうとする動機に繋がると思われる。抽象的には同じ意味だという理由で異なる接尾辞同士が繋がるが、一方で具体的なレベルでの意味の違いが、その接尾辞を従来から拡大して用いようとする動機になっていると考えることができる。

3.8. 本章のまとめ

本章では類推・スキーマの理論に基づきながら、異なる接尾辞同士が繋がりを持つことで、用法が広がる過程を考察してきた。

それぞれ3.6.1節では類推的な用法の拡大を、3.6.2節では主にスキーマに基づく用法の拡大を、3.6.4節では用法の拡大に意味の拡張が伴う場合について扱った。

第2章で意味と品詞性について考察してきた句接辞だが、生産性の低い句接辞を分析対象に加えることで閉じたクラスとしてではなく、動的な総体として見るようになるようになった。

新たな接尾辞を巻き込んだ用例が増えることで、「V連用形+ [接尾辞] 〈動作・出来事の継続〉」、「V連用形+ [接尾辞] 〈状態傾向〉」というような、より抽象的なレベルのスキーマが定着度を増していくことになる。

また、本研究で取り上げなかった接尾辞も含め、このような用法の拡大と接尾辞間の新たなネットワークの形成が、「句接辞」というカテゴリーそのものをより強固に定着させていくことになると思われる。

第4章 「らしい・ぽい・くさい」の意味的拡張と形式的拡張

本章では「らしい・ぽい・くさい」を扱う。本章での目的は、第3章と同様に接尾辞同士の関係から、共時的な視点でこれらの接尾辞の意味的・形式的拡張の過程を示すことである。

4.1節では「らしい・ぽい・くさい」の接尾辞用法、助動詞用法について確認する。4.2節ではこれらの接尾辞の概括的な意味用法を確認する。4.3節では、「ぽい」を対象にした接尾辞から助動詞への拡張についての先行研究を見ていき、本研究での立場を述べる。4.4節では本研究での意味分類について述べる。4.5節ではBCCWJを用いて、各接尾辞の前接品詞について比較する。4.6節では、「ぽい」の前接要素の定着度について考察する。4.7節では「ぽい」の意味的・機能的拡張について考察し、後続する「くさい」の拡張と定着したスキーマの関係について論じる。4.8節では通時的研究との関係について述べる。4.9節では、使用場面の重要性について述べる。最後に、4.10節で本章をまとめる。

4.1. はじめに

現代日本語では、＜推量＞を表す助動詞には、「らしい・ぽい・くさい」のような接尾辞由来のものも一群に含まれる。

これら＜推量＞の助動詞の前接要素として、名詞接続(1)と句接続(2)が認められる。

- (1) 服装からすると、彼はどうやら学生 {らしいっぽい/くさい}。
- (2) 最近会ってくれない。彼女は浮気している {らしいっぽい/くさい}。

これらの起源となる接尾辞としての使用は以下(3)の通りである。

- (3) a. あの人の生き方は実に男らしい。
- b. 今日のカレー、何だか水っぽい。
- c. 田舎くさい服装の若者を見つけた。

第2章、第3章で扱った句接辞については、総合的に扱った研究は少なかった。それに対して、本章で扱う形容詞性接尾辞「らしい・ぽい・くさい」については、長い歴史を持つ「らしい」、比較的近年＜推量＞の意味への変化が観察され、注目されるようになった「ぽい」（以下の(4)は岩崎 2012 で初出とみなされる用例）を中心に、接尾辞用法、助動詞用法、さ

らに通時的変遷や拡張に関わる研究など、かなりの先行研究の蓄積がある。

- (4) 雨が降りそうなことを「今日は雨ッポイ」あるいは、その可能性がごくわずかであれば、「少な目」のメをつけて「雨ッポメ」だと言うのだそうです。

（「言語生活」 1982年6月、岩崎 2012）

本章では比較的近年起こった「ぼい」「くさい」の意味的拡張・形式的拡張について、現代語の使用分布にもその変化の痕跡が残っていると考え、それを手掛かりに第3章と同様に接尾辞同士の関係から意味的拡張・形式的拡張が起こる過程を示す。

4.2. 「らしい・ぼい・くさい」の接尾辞としての意味的な概観

まず、接尾辞としての「らしい・ぼい・くさい」において、全体的な意味を概観した先行研究を確認する。

それぞれの接尾辞について意味の記述を森田（1989）から以下に引用する。

- ・「らしい」…「～らしい」には、その対象における一般的な基準、または判断者が要求し期待する基準からみて、そのものの特徴が十分に備わっていてよいという価値判断がある。（中略）「～らしい」は「～ぼい」と違って、“そのものが本来持っているべき特徴を特に強く発揮している”状態である。
- ・「ぼい」…「～ぼい」は、（中立、またはプラスの位置にあった）人物・事物がマイナス方向に強く引き寄せられ、そのような属性を傾向として強く帯びてしまった状態である。（中略）「～ぼい」は“本来はもう少し現状とは違う状態であるはずなのに、ずれている。他の傾向・要素を帯びてしまっている”という気持ちである。その点（中略）「～らしい」は、判断者の基準とする条件を特に強く帯びている状態を表し、「～ぼい」の逆である。
- ・「くさい」…（「いやな匂いが鼻を刺激して不快な状態」から発展して）嗅覚刺激そのものではなく、そのような匂いを発する環境に浸っていたために、根っからそのような性質や思想になってしまっている状態であるさまを指すよう

になる。また、そのような匂いを連想するような性質・内容の事物を指す。概してマイナス評価の状態である。これは「～ぼい」が常に自己から見た、感覚的にとらえられた特性であるのに対し、「～くさい」は自己を離れた、客観的な対象の特徴となっている。(中略) 接尾語として用いられる「～くさい」は先に述べた“...のようなようすを帯びる”意のほか、さらに発展して、主として形容動詞の語幹に付き、感情性を強調するだけの働きとなる。

森田の記述では、「らしい・ぼい・くさい」の意味説明において、それぞれが比較の対象として用いられていることがわかる。このような記述から、各接尾辞が異なる意味を持つ一方で、意味の類似性が存在していることが窺われる。

次に、接尾辞「らしい・ぼい・くさい」を意味、前接要素、前接品詞などから比較することを試みた山下(1995)では、その共通性について次のような指摘がある。

「-ぼい・-らしい・-くさい」は名詞と形容動詞語幹に結合して形容詞を派生するという点で共通している。また、話し手が自分自身の感覚に基づいて、結合語基を対象への評価・判断を表現する形容詞に変える機能を有する点でも共通している。話し手の主観的な感覚が濃厚に表明される結果、派生語はなんらかの評価性を含むことが多くなる。さらに、特に名詞に結合して多様な臨時的派生語を造語することも共通点として挙げられる。

(山下 1995: 203)

このように山下(1995)によれば、「前接する品詞」、「対象への評価・判断を表現すること」、「名詞に結合した場合の造語性の高さ」など、多くの点で、これらの接尾辞は共通する特徴を持っていることがわかる。

4.3. 拡張と意味についての先行研究(「ぼい」を中心に)

これらの接尾辞において、比較的近年使用を拡大させたことから、特に「ぼい」が注目されている。

田村(2004: 37)では近年の「ぼい」の発展の傾向について次のように端的に述べている。

「的」「風」などの類義の接辞と比べるとその規範的な使用においては、名詞を除き、それほど生産性が高いとは言えず、「ぼい」と結び付く語彙は品詞ごとにある程度決まっていた。しかしながら、近年、「ぼい」の持つ口語的な要素からか、「ダメそうっぼい」「客らしくないっぼい人」などの例のように多種多様な語句に後接し、極めて生産性の高い接尾辞として用いられている。

田村 (2004: 37)

田村が指摘するように、「多種多様な語句」、特に句(文)レベルの接続を認めることになったことから、「ぼい」について扱う研究が近年多くなっている(小松・木村 1997、尾谷 2000, 2005, 2011、小島 2003、ケキゼ 2003a、田村 2004、小出 2005、久保 2008、梅津 2009、竹島 2010、濱田 2010、小原 2010、岩崎 2012、周 2017、中村 2019 など)。本研究では、共時的視点から接尾辞から助動詞への拡張について考察した研究に注目し、小島 (2003)、ケキゼ (2003a)、小出 (2005)、尾谷 (2000, 2005, 2011) について概観する。

4.3.1. 小島 (2003)

小島 (2003) は「若者言葉」としての「ぼい」を取り上げ、これまでに使えなかった語基、あるいは句の接続が可能になっているという現象から出発し、語基部分の品詞と「ぼい」の意味の変化の関係について述べている。小島 (2003: 32-33) では『日本語語彙体系』、『大辞林』を基にして、「ぼい」の使用をいくつかの種類に分けている。

a 動詞の連用形につく場合…忘れっぼい、怒りっぼい、惚れっぼいなど

この場合、その動詞のあらゆる事態が簡単に起こりやすいことを表す。特にやすやすと行われるのがあまり望ましくない類の精神的活動を表す動詞に対して用いられる傾向がある。動詞の連用形に「ぼい」の付く形は現代語としては生産性があまり高くなく、ここにあがっているもの以外では「ひがみっぼい」「うたぐりっぼい」「あわてっぼい」「うらみっぼい」などの例がある程度である。

b 形容詞・形容動詞の語幹につく場合…あらっぼい、あわれっぼい、やすっぼい

これらは、表面上いかにもそうである様子、また、その性質が表に立って目立つ様子という意になる。

c 名詞などにつく場合…艶っぽい、ほねっぽい、大人っぽい、子供っぽい
名詞につく場合は、意味の傾向が大きく二通りにわかれる。

- c1 「艶っぽい」「骨っぽい」など…それが多い、またはそれが目立つ様子であることを表す。
- c2 「大人っぽい」「子供っぽい」など…いかにもそういう印象を与える様子であること、または、その物の性質の特徴的な一端を持ち合わせている様子、それに通じる要素が感じられる様子を表す。

小島 (2003: 32-33)

小島 (2003) は c1 と c2 は同じ名詞であるものの意味の違いは明白であり、辞書に立項されているのは、c1 が多いものの、現在活発に新しい語を作り出しているのは c2 であるとしている。

そして、近年は従来見られなかった言い切りの形の述語 (句レベルの接続) につく例が、特に話し言葉で頻繁に見られるようになってきたと指摘し、以下のような例を挙げている。

なんかやる気ないっぽい感じの絵で
世論は作られるっぽいね
たぶん登場ポーズが描きたかったっぽい CG 塗りです
BS デジタルはいずれスクランブルがかかるっぽい
親に見られたっぽい(泣)

(小島 2003: 36)

これらは「みたいだ」や「らしい」「という感じである」あるいは「そうだ」という意味であり、「っぽい」が推量・推定を表す助動詞的な用法を獲得しつつあるとし、「c2 の用法から変化した「どこか X のように感じられる」という意の「X っぽい」において、X がモノからコトへと変化したというだけのことである。従って、このような用法が生まれる背景には c2 の用法の「X っぽい」の活発な使用があると考えられる」(同上: 36) と述べている。

つまり、小島では助動詞的な用法と接尾辞としての用法 (c2) との連続性をモノからコトへの変化で説明していると言える。

4.3.2. ケキゼ (2003a)

ケキゼ (2003a) では安定した用法とその用法間の関連性を明らかにし、その後、新奇用法を分析し、それが安定した用法から派生したことを示すことを目的としている。

まず、ケキゼは「YはXっぽい」について以下の7つの用法に分類している。

「Xが内的属性を表す場合」

用法1: Yは、知覚的属性 [X] を話者の暗黙の基準値よりも多く含む。ただし、その値は最大値には至らない。(「黒っぽい」「湿っぽい」など)

用法2: Yは、内的属性 [X] を感じさせるような知覚的属性を話者の暗黙の基準値よりも多く含む。(「安っぽい」「色っぽい」など)

「Xがモノを表す場合」

用法3: Yは、[X] の典型例が持つ性質・属性を話者の暗黙の基準値よりも多く含む。(「大人っぽい」「田舎っぽい」など)

用法4: Yは、好ましくないモノ [X] を話者の暗黙の基準値よりも多く含む。(「埃っぽい」「骨っぽい」など)

「Xが行為を表す場合」

用法5: Yは、話者の暗黙の基準値よりも「[X] をすることが多い」という好ましくない性質を持つ。(「怒りっぽい」「忘れっぽい」「飽きっぽい」など)

「新奇な用法」

用法6: Yのカテゴリー認定(「どうやら明日は雨っぽい」などのような推量判断)

用法7: あいまい化(「ちょっと不安っぽい」「大変っぽいことになった」などの断定を避ける用法)

用法1~5が「安定した用法」、つまり従来の用法である。これらはXの性質の違いによって分類されているが、Xについての違いを捨象した、安定した用法のスキーマは「Yは、[X]に関わる属性を話者の暗黙の基準値よりも多く含む」ことであるとされている(図4.1)。

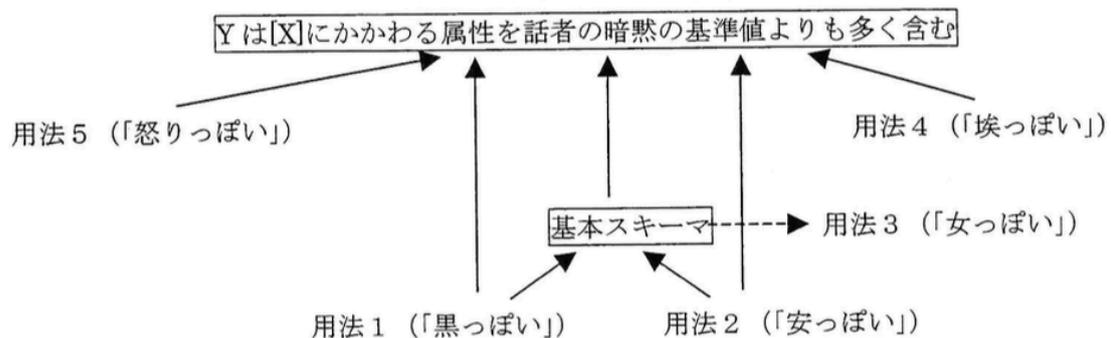


図 4.1. 安定した用法のスキーマ関係 (ケキゼ 2003a: 32)

続いて、新奇用法についてであるが、この用法は、先述の安定した用法から拡張されたとしている。

まず、用法3「Yは、[X]の典型例が持つ性質・属性を話者の暗黙の基準値よりも多く含む」から、「正体のわからない対象Yは[X]である可能性が高い」という推量的判断を表す意味(用法6)が出てくるとしている。すなわち、「橋っぽくない?」などにおいて「橋」の典型例が持つ性質・属性を多く含むことから、問題の対象は「橋」である可能性があるということである。このような認識に基づいて、「っぽい」の意味は、推量的な要素を含むカテゴリー判断へと拡張していく(同上: 33)としている。

また、用法1の「最大値に至らない」という部分から、用法1は属性に関して、その程度を下げる機能があり、その機能を活かして、あいまい化用法(用法7)が成り立つとしている。用法7についてはケキゼ(2003b)で、「そうだ」「げ」などととも「和らげ」の機能として詳しく論じられている。

ケキゼはこのように、スキーマを基盤にした認知言語学的なアプローチで、従来の用法内での関連性、そして、従来の用法と新たな用法との連続性を説明している。

4.3.3. 小出 (2005)

小出(2005)は「っぽい」の用法を旧用法と新用法に分類しており、形態論的側面の違いに注目している。

旧用法は小出が主張するところでは、以下のように動詞連用形、形容詞語幹接続も含め、全て名詞としての性質を備えているものに限られていたとして、(5)のような例を挙げている。

- (5) a. 水っぽい
 b. 飽きっぽい
 c. 嫌味っぽい
 d. 安っぽい

(小出 2005: 1 より抜粋)

一方、新用法は以下のように動詞・形容詞の終止形、助動詞終止形、「た」形などとの接続が可能になり、文のモダリティにかかわるものになっており、このような形態上の変化が意味用法の変化と表裏一体になっていると指摘している。

- (6) a. おいしいっぽい
 b. あるっぽい
 c. 疲れすぎたっぽい

(小出 2005: 2 下線は原文のまま)

小出は、旧用法、新用法にいくつかの用法を想定し、次のような拡張過程を示している。

旧用法

1.	“Y が X を通常値より多く含む” (「水っぽい」)
	↓<X のカテゴリの変化。モノから属性へ>
2.	“Y が属性 X を通常値より多く含む” (「黒っぽい服」)
	↓<X の指示先の変化。属性そのものから属性を持つものへ>
3.	“Y が X のもつ属性を通常値より多く含む” (「夏っぽい服」)

↓<形態的变化。モノ・属性の表現からコトの表現へ>

新用法

1. (命題めあての モダリティ表現)	“X という事態成立の可能性を多く含む” (「雪が降るっぽい」)
	↓<モダリティの変化。事態目当て性の消失>
2. (発話・伝達の モダリティ表現)	“X であるとする判断の可能性を多く含む” (「会ったっぽい」)
	↓<X のカテゴリの変化。モダリティからメタ言語表現へ>
3. (メタ言語表現)	“X という表現成立の可能性を多く含む” (「風邪を引いたっぽい感じ」)

ケキゼ (2003a) と違い、「モノを通常より多く含む」という段階を最初の用法として、そこから拡張が始まることを述べ、また、新用法の分類はケキゼ (2003a) より細分化されている。新用法 (コトの表現) は「推量 (命題めあてのモダリティ表現)」にとどまらず「発話・伝達のモダリティ表現」、「メタ言語表現」に至っているとしている。

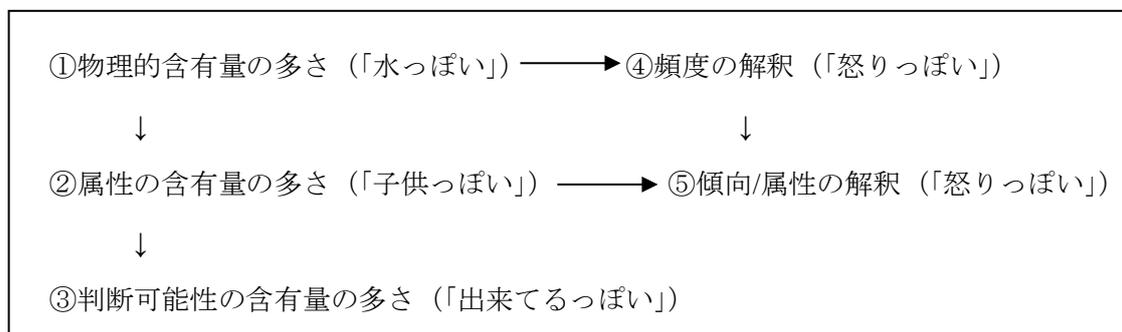
4.3.4. 尾谷 (2000, 2005, 2011)

尾谷 (2000) は「っぽい」の意味用法を考察し、その拡張をメタファーによる動機付けから説明を試みている。

尾谷 (2000) では意味用法を次のように分類している。

- ・物理的な含有量 (①) …最も典型的。「T が予測している期待値以上に X を多く含んでいる」水っぽい、埃っぽい、粉っぽいなど
- ・属性の含有量 (②) …「T は X が有する特徴/属性を期待値以上に含んでいる」子供っぽい、安っぽいなど
- ・判断可能性の含有量 (③) …「X であると判断 (もしくはカテゴライズ) される可能性を多く含んでいる」終わってるっぽい、これで最後っぽい、科学っぽいなど
- ・頻度の解釈 (④) …「怒りっぽい」の場合は「いつもよく怒る」怒りっぽい、忘れっぽいなど
- ・傾向/属性の解釈 (⑤) …「怒りっぽい」の場合、「ある一定期間の中で、立腹するという行為が多く生じる」怒りっぽい、忘れっぽいなど (④と同じ)

そして以下のような拡張の過程を想定している。



②から③のような拡張は、「Xの属性を多く含む」ということから、「TはXカテゴリーの成員である可能性が高い」と判断されるのは自然の成り行きである（<Xの属性を多く含む→Xカテゴリーの成員である>）としている。また④から⑤への拡張は、「怒るという出来事が頻繁に生じる」なら、それだけ「怒るという行為が容易に生じやすく、またその人がそのような属性を持っている」ことにつながる（頻繁に怒る→「怒りやすい」という属性を有している）ことから拡張が起こると説明される。

メタファーを意味拡張の動機付けとして用いていること、そして各用法の橋渡しをする中間段階（①、②の中間として「色っぽい人」など、②と③の中間として「探偵事務所っぽい」など）を設定していることが特徴的であると言える。

一方、本研究において注目したいのは、「っぽい」がいわゆる推量のモダリティを表すようになった際、意味の変化だけでなく、形式上の変化（終止形接続が可能になったこと）が伴うということである。ここまで挙げた先行研究では、句レベルの接続が可能になること自体は提示しても、その形式面での変化のメカニズムについては触れられていなかった。

このような「っぽい」の上接部の形式的拡張について考察を加えたのは尾谷（2005, 2011）である。これらは意味拡張については、尾谷（2000）をほぼ受け継いでいるが、それに加え、形式面に注目し、「名詞」接続は接尾辞用法、助動詞用法どちらの場合にも現れ、このような「名詞+っぽい」という構文スキーマが<推量>（尾谷 2000 での「判断可能性の含有量の多さ」）への拡張の橋渡しになったと考えている。

また、意味拡張については、Langacker（1999）が提唱する二つの理論モデル、(Dynamic) Usage-based Model と、プロトタイプとスキーマに沿ったものと言えるが、これらは「あくまでも意味の拡張に関するものであり、形式は共有されているという暗黙の了解が前提にあるように思われる」（尾谷 2005: 22）とその不十分さを指摘し、これらの理論に基づく意

味拡張の流れを一方向的な拡張のプロセス、一定の方向に「押し出す」ものだとしている。

一方、終止形接続（句レベルの接続）が可能になるという形式的な拡張については、「引っ張る」という作用によって起きると述べている。つまり、本研究でも第3章で扱ってきた「類推」によって形式的拡張がなされるということを論じているのである。

そして、類推による拡張モデルにおいて「ようだ/らしい/みたいだ」が選ばれる理由について、同じく推量の意味を持つ助動詞であったこと、特に「らしい」は「っぽい」と同様に形容詞接尾辞の用法を持つため重要な役割を果たしたことが述べられている。拡張の経過は尾谷（2011: 272）で以下のように示されている。

[s 彼は [AP 子供っぽい]]。
↓再分析・意味拡張
[s [s₁ あれは子供 (だった)] っぽい]。
↑類推（モデル効果）
[s [s₁ あれは子供 (だった)] らしい]。

尾谷の議論は、なぜ「らしい」「っぽい」がともに句レベルの接続ができるようになったかを説明するものである。一方、小島（2003）や岩崎（2012）など、より全体的に本章で扱う接尾辞が、同じような意味の接尾辞から助動詞への変化という似通った経路をたどってきたということを指摘する研究もある。

本研究が想定する拡張のモデルは、ここでの尾谷（2005, 2011）における「類推」のように、他の接尾辞「らしい」の影響により、「っぽい」が形式的な拡張を起こすという立場を支持するものである。そして、それだけにとどまらず、第3章と同様により広く「らしい・っぽい・くさい」が、具体的な事例のレベルでも、抽象的なスキーマのレベルでも繋がることで、似通った経路で用法が広がっていく過程を示すことを試みる。

4.4. 「らしい・っぽい・くさい」の意味分類

「っぽい」における先行研究では、いずれも「話者の基準以上に属性や性質が多く含まれている」という意味を持ち、そこから推量の意味へと繋がっていくことにおいて共通している。これは、山下（1995）での「話し手が自分自身の感覚に基づいて、結合語基を対象への評価・判断を表現する形容詞に変える機能を有する」という「らしい・っぽい・くさい」

三者の共通性にも通じている。

本研究での意味用法は、詳細に分類されたケキゼ（2003a）のものを基本としつつ、やや簡略化し、〈内的属性〉〈モノ的属性〉〈モノの多さ〉〈性格〉⁵⁰〈推量〉に分類する。先行研究との意味の対応は次の表4.1のようになる。下図のようにケキゼ（2003a）や小出（2005）で〈推量〉の用法からさらに拡張したと考えられている用法7〈あいまい化〉や新用法2〈伝達・伝聞〉、新用法3〈メタ言語表現〉は本研究では扱わない。

本研究での意味	内的属性		モノ的属性	モノの多さ	性格	推量		
	用法1	用法2	用法3	用法4	用法5	用法6	用法7	
ケキゼ（2003a）								
小島（2003）	c1	b/c1	c2	c1	a	c2が変化		
小出（2005）	旧2	旧2	旧3	旧1	旧2	新1	新2	新3
尾谷（2000）	②	②	②/⑤	①	④/⑤	③		

表4.1. 「ぼい」の意味分類

表4.1の分類では、先行研究に従えば、〈モノ的属性〉から〈推量〉の意味につながったことになる。

「らしい」と「くさい」の意味用法については、〈推量〉の助動詞としての用法があり⁵¹、接尾辞の意味としても「ぼい」と共通するものがあることはすでに述べた。本研究では「らしい」も「くさい」も接尾辞としては〈モノ的属性〉の意味を持つものとする⁵²。

⁵⁰ 〈性格〉の用法は「忘れっぽい」「怒りっぽい」などである。尾谷（2000）などでは〈傾向〉の意味を持つとされ、中村（2002）などでは、本研究で〈頻度傾向〉の意味を持つと分類した「忘れがち」などと比較される用法である。しかし、「忘れがち」のように「特定の期間内に複数回忘れる」というわけではなく、「忘れっぽい」は、特定の期間内での生起を超えた、その人の固有の性格を表しているという点で明確に異なると考え、〈頻度傾向〉ではなく〈性格〉という名称を用いる。

⁵¹ 寺村（1984）などで指摘されるように「らしい」にも「ぼい」と同様に〈伝聞〉の用法があるが、やはり本研究では扱わない。

⁵² 「ぼい」の接尾辞用法をいくつか分類しているように、当然、「ぼい」「らしい」「くさい」の接尾辞としての意味が完全に一致するわけではないが、ここでは、第3章と同様の立場をとり、各接尾辞が抽象的には同じ意味を持つものとする。

例えば「らしい」についても、寺村（1984）、中島（1990）、小島（1996）、北原（1981）、三宅（1994, 2006）、野呂（2016）などにおいて、個別的な意味、「ようだ」「みたいだ」などとの比較、「NらしいN」などの構文的な観点など、幅広く研究がなされてきた。「ぼい」との関係については、先述の森田（1989）での「「～ぼい」と違って、“そのものが本来持っているべき特徴を特に強く発揮している”状態」との指摘どおり、例えば「男らしい」「男っぽい」では、「らしい」

次節からは、このような意味を持つ接尾辞における前接要素の分布を見ていく。

4.5. 定着度の高い前接要素の品詞

第3章で扱ってきた句接辞の大半とは異なり、ここでの「らしい・ぼい・くさい」は比較的多くの品詞、活用形に前接する接尾辞である。山下（1995）では、名詞接続が多いことが指摘されているが、本節ではBCCWJ内での検索結果で前接要素の分布を確認し、また各接尾辞の用例数を比較する。

4.5.1. 「ぼい」の前接要素

BCCWJを用いた「ぼい」の前接要素は以下の表4.2の通りである。条件は「キー：[語彙素=ぼい][品詞=接尾辞]+前方共起：[品詞=名詞/動詞連用形/形容詞語幹/形状詞]」で検索し、誤解析など不適切な例を除いたものである⁵³。

品詞	例数
名詞	4672
動詞連用形	219
形容詞語幹	16
形状詞	105

表 4.2. 「ぼい」の品詞別用例数

各品詞別の用例は次のようなものである。

(7) 雪はまだ降っているが、大きな水っ**ぼい**雪なので積ることもなく、乗りものの停ま

は実際に「男」、「ぼい」は実際に男ではなくてもいいという違いがあると言われる。しかし、小島（2003: 38）で言及されるように、女性に「男らしい」という用例が見られ、「実際に男かどうかでなく「男っぼい」が中立的、「男らしい」がプラスという価値判断の違いになってきているとも見える」というように両者の接近も観察されている。

「くさい」の接尾辞用法には池上（2012, 2013）において上接成分の品詞性や意味に応じた詳しい分類があるが、大きく分けると実際の「におい」を表す用法（「カビ臭い」と「霽囲気」を表す用法（「人間くさい」）があり、池上は通時的には前者から後者の意味へと広がっていったとしている。本研究では「ぼい」に通じる「霽囲気」を表す用法を<モノ的属性>と呼ぶことにする。

⁵³ 本研究では「湿っぼい」などの語根接続の例は検索から除いている。

る心配もなさそうだった。(名詞)

(「薔薇の雨」 1989年、BCCWJ)

- (8) スケジュールをビッシリ立てて仕事と家事でキリキリしている、怒りっぽくなって
いる人は魅力的ではありません。(動詞連用形)

(「素敵な自分にきづく本」 1993年、BCCWJ)

- (9) 焼く前の生地は、捏ねるパンに比べると、ベタベタしてて粗っぽいけど、焼きあがり
は見た目にはほとんど遜色ないです。(形容詞語幹)

(Yahoo!ブログ 2008年、BCCWJ)

- (10) 「いいこと、あるんじゃない」知子がいたずらっぽい顔で笑う。(形状詞)

(「空想列車」 1992年、BCCWJ)

このように名詞接続が多いことは、各時代の文学作品や漫画作品など調査資料として、「ぽい」の上接部の変遷を調べた岩崎 (2012) でも検証されている。

	近世	明治	大正	昭和	平成
語根	5	31	17	58	13
動詞連用形	22	19	25	41	43
形容詞語幹	26	63	51	307	309
形容動詞語幹	13	22	15	91	144
名詞	16	41	57	512	1075
句	0	0	0	3	91
文頭	0	0	0	0	6
合計	82	176	165	1012	1681

表 4.3. 「ぽい」上接部の時代別用例数 (岩崎 2012: 57)

表 4.3 での「平成」のデータを見ると、BCCWJ での検索結果と違い、名詞の次に用例数が多いのは形容詞語幹接続であるが、これは表 4.2 での形容詞語幹の用例がわずかである (19 件) という結果と合致しない。これは色彩形容詞 (白、黒、青、赤、黄色、茶色など) が BCCWJ 内では名詞として分類されていることに由来する。

色彩形容詞とともに用いられる例は、「ぽい」に特徴的で、国松 (1970)、山下 (1995) などの先行研究においても形容詞が前接する用例の大半が色彩形容詞であり、その他の形容詞接続である「荒っぽい」「安っぽい」などは例外だと指摘している。本研究では BCCWJ 内の分類通り、「白」「黒」などを名詞として考える。

一方で、動詞連用形接続は219件と用例数において名詞に次ぐが、その前接部は「怒る」(94件)、「忘れる」(34件)、「飽きる」(48件)、「ひがむ」(19件)などと限られており、かなり固定的であると言える⁵⁴。これは、形容詞語幹にも同じことが言え、「荒っぽい」(10件)が用例の17件中のほとんどを占めている。

「っぽい」においては「助動詞」としてBCCWJで登録されていない。ただし、「キー：[語彙素=っぽい][品詞=接尾辞]+前方共起：[活用形=終止形]」を検索条件にし、不適切な用例を除くと「終止形」に接続する用例が23件のみだが抽出することができる。

- (11) a. 日本語版見返したらこのあたりのほかの台詞も全然違うこと言ってるっぽい (汗)
(Yahoo!ブログ 2008年、BCCWJ)
- b. サイン会では、エダちゃんはいいかかわらずあまり愛想がないっぽい (笑)
(Yahoo!ブログ 2008年、BCCWJ)

4.5.2. 「らしい」の前接要素

BCCWJ内における「らしい」は接尾辞と助動詞として登録されている。「キー：[語彙素=らしい][品詞=接尾辞]+前方共起：[品詞=名詞/動詞連用形/形容詞語幹/形状詞]」を検索条件としたが、抽出された用例の中で形容詞語幹接続である16件、動詞連用形接続である162件は、いずれも検索条件に対しては不適切な例であった(「10月の終わりらしく」など)。よって、接尾辞「らしい」のBCCWJ内の品詞別用例数は以下の通りであり、大半が名詞接続であると言える。

品詞	例数
名詞	6238
形状詞	224

表 4.4. 「らしい (接尾辞)」の品詞別用例数

- (12) それに、絵柄にこってみたり、動きにこってみたり、そういうアイデアも中国らしくて面白いし。(名詞)

⁵⁴ 田村(2004)ではWeb上の動詞連用形の用例として「結構泣きっぽい人」「諦めっぽい人間」「悩みっぽい自分」などが挙げられているが、稀な場合であろう。

(「中国面白雑貨買い歩る記」 1986年、BCCWJ)

(13) 子どもでも大人でも、自分にとってもっともたしからしいと思える世界がある。

(形状詞)

(「岩波講座教育の方法3」 1987年、BCCWJ)

また接尾辞用法については、前接要素は名詞が中心である。名詞、形容詞語幹、形状詞、副詞に接続するが、後者3種については「可愛らしい」「もっともらしい」「わざとらしい」など、語基が限られており、生産的ではないという山下(1995)での指摘に沿ったものと言うことができる。

助動詞については、検索は「キー：[語彙素=らしい][品詞=助動詞]+前方共起：[品詞=名詞]/[活用形=終止形]」という条件で行った。

品詞	例数
終止形	15225
名詞	3264

表 4.5. 「らしい(助動詞)」の品詞別用例数

終止形接続は15225件登録されており⁵⁵、名詞接続のものは3264件であった⁵⁶。以下に用例を示すが、助動詞用法において特に終止形接続が発達していることが窺われる。

⁵⁵ 「接尾辞」において、前接要素が終止形の接尾辞は17件だけ見つかったが、いずれも以下のような助動詞として判断して差し支えない用例であった。

- (i) 二千四年に頂いたものですが たぶん二千三年くらいになるらしい。
(Yahoo!ブログ 2008年、BCCWJ)

⁵⁶ 名詞接続は助動詞と接尾辞に跨がるが、一部、以下のように混同されている用例もある。それに加え、助動詞用法なのか接尾辞用法なのかの判断が難しい文脈もある。本研究ではこの混同に調整を加えていないが、仮に名詞接続の用例が全て助動詞あるいは接尾辞のどちらか一方だけのものであったとしても、助動詞としては終止形が多いということ、あるいは全体として名詞接続が多いという傾向は変わらない。

- (i) 「助動詞」として登録されているが、「接尾辞」として分類されるべき用例
企画を担当した日活の猿川直人常務は「昔ながらの勧善懲悪、チャンバラアクションだけでなく、時代劇のスタイルで、いかにも邦画らしい『人情味』を描き出したい」と語っている。

(「新潟日報」 2001年5月8日、BCCWJ)

- (ii) 「接尾辞」として登録されているが、「助動詞」として分類されるべき用例

(14) a. 田畑駅というのは古い地図にもなくて位置がはっきりとは分らないのだが、古い時刻表に記されているキロ程とあたりの様子とからみて、どうやらこの駐車場が駅跡らしい。(名詞)

(「消えた鉄道を歩く―廃線跡の楽しみ」 1986年、BCCWJ)

b. こちらが試験前でかっかしているのかまわず、二十分でも三十分でもたわいのない話を続けている。声さえ落として話せば迷惑にならないと考えているらしい。

(終止形)

(「アメリカン・ロイヤルの誕生―ジョージタウン・ロー・スクール留学記」 1986年、BCCWJ)

4.5.3. 「くさい」の前接要素

「くさい」も「ぼい」と同様に助動詞としては登録されていない。検索条件を「キー：[語彙素=臭い][品詞=接尾辞]+前方共起：[品詞=名詞/動詞連用形/形容詞語幹/形状詞]」とし、不適切な用例や誤解析などの調整をした結果、以下の表 4.6 のようになった。

品詞	例数
名詞	1452
動詞連用形	205
形容詞語幹	246
形状詞	31

表 4.6. 「くさい」の品詞別用例数

各品詞別の用例としては以下のようなものが挙げられる。

(15) 小学校四年生ぐらいだろうか、色の青白い、どこか都会くさい感じのする少年だっ

ロッテと広島は消えてほしくないです。残念ながら第一候補は広島らしいです。昨年唯一観客動員数百万人超えなかったそうですし・・・

(Yahoo! 知恵袋 2005年、BCCWJ)

た。(名詞)

(「長崎源之助全集第13巻」 1986年、BCCWJ)

(16) 自分の話をされるのが照れくさいからって、アルコール、ガブ飲みしなきゃいいけど...。(動詞連用形)

(「死神村の三百歳探偵団」 1987年、BCCWJ)

(17) 悲劇よりも喜劇のほうが大切にされ、涙は古くさいもの、悲しみは時代おくれのもの、そんなふうに使われているようです。(形容詞語幹)

(「自分の人生を愛するための12章」 1993年、BCCWJ)

(18) お寺は全体に輝きがなく、どうにも陰気くさい。(形状詞)

(「封印された「歴史の闇」に迫る」 2001年、BCCWJ)

名詞接続がやはり大半を占める。一方で、動詞連用形接続の場合は「照れくさい」(200件)、形容詞語幹接続の場合は「古くさい」(155件)が全体の大半を占め、かなり固定的で、かつ独占的であり、4.5.1節の「ぼい」の場合と同じ傾向を示す。このように「くさい」において、前接要素が名詞以外は限定的であることは、やはり、先行研究である山下(1995)の指摘に沿ったものである。

これら接尾辞のBCCWJ内の用例数を見ていくことで、まずは先行研究の指摘通り、名詞接続での用例が多いということが確認できた。また、動詞連用形や形容詞語幹接続においては限定的な使用であり、数種類の前接要素でその使用の大半を占めることがわかった。さらに、全体的な用例数を比べると「らしい」「ぼい」「くさい」の順で多いことがわかり、助動詞としての用法も「らしい」において広範であることが窺われる分布であった。

4.6. 前接要素と定着度

「らしい・ぼい・くさい」はいずれも名詞接続での使用が多い。ここでは、接尾辞「ぼい」について、その形式(前接要素)に注目して、スキーマを用いた上下関係を図示する。

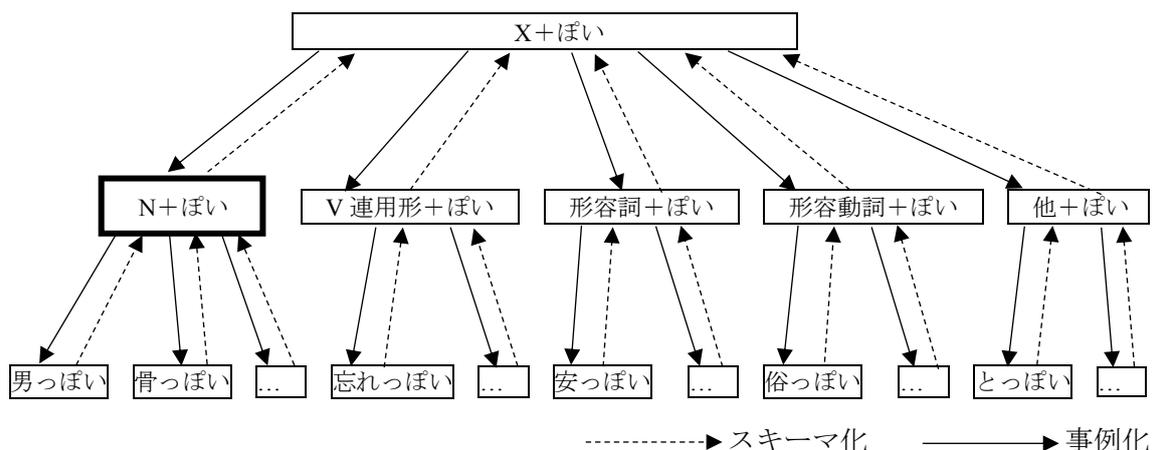


図 4.2. 形式に注目した「ばい」の上下関係

接尾辞としての「ばい」は名詞、動詞連用形、形容詞、形容動詞（形状詞）及びその他（「とっばい」「湿っばい」など）が前接要素として使用される。しかし、定着度の面で見ると、これらの形式のスキーマは等価ではない。ここで「生産性」について、Langacker (2000) の記述を確認する。

生産性とは、パターンが新しい表現をカテゴリ化するのに用いられる活性化した構造として選択される確率の高さのことになる。生産性の高いパターンに対する構文スキーマは定着度が高く、新たな表現をカテゴリ化すべく容易に活性化されるものでなければならない。生産的でないパターンに対するスキーマはおそらく妥当な一般化を表すものではあるだろうが、活性化された構造として選択されるための競合に勝てなければ、そのパターンはそのスキーマが抽出された元々のデータ以外に適用されることはない。

(Langacker 2000: 26; 坪井訳 2000: 94)

これに従えば、「N+ばい」という形式は、その他のスキーマに比べて、定着度が高い（他の品詞と比べると定着度が高いということを図4.2では太枠で示している）。それに対し、4.5.1節で述べたように、「忘れっばい」、「安っばい」などは抽象的な「V連用形+ばい」、「形容詞語幹+ばい」ではなく、具体的な語彙として定着していると思われる。

そして、この「N+ばい」は活性化しやすく、先行研究でも述べられている通り、新たな表現パターンが出現する場になると考えられる。

ただし、「N+っぽい」のうち、全ての名詞において定着度が高く、生産性が高いというわけではない。ここで「N+っぽい」の内訳について考える。検索条件は「キー：[語彙素=っぽい][品詞=接尾辞]+前方共起：[品詞=名詞]」であり、上位15位まで示すと、結果は表4.7のようになる。

順	前接名詞	例数
1	白	341
2	黒	333
3	大人	306
4	色	244
5	子供	241
6	熱	196
7	いたずら	169
8	皮肉	111
9	水	88
10	黄色	73
11	男	72
12	理屈	67
13	女	61
14	赤	53
15	埃	53

表4.7. 「っぽい」の名詞接続における前接要素

「骨っぽい」⁵⁷「水っぽい」などの<モノの多さ>を含む用法、「白っぽい」「黒っぽい」「色っぽい」のようなく内的属性>を指す用例も多いことが表4.7からわかるが、これらの用法は前接要素に限られており、他の前接要素が現れにくい。これらは先ほどの「怒りっぽい」や「忘れっぽい」（あるいは「くさい」における「照れくさい」）のように語彙的な定着度が高いということがわかる。

- (19) a. 雪はまだ降っているが、大きな水っぽい雪なので積ることもなく、乗りものの停まる心配もなさそうだった。 <モノの多さ>

⁵⁷ 「骨っぽい」は「魚が骨っぽい」のように「モノの多さ」を表す意味のほか、「手足が骨っぽい」のような「ごつごつしている」といった意味や、「骨っぽい人物」のような「気骨がある」といった意味の場合もある。

((7)再掲)

b. 青葉のときは、葉の裏が粉を帯びたように白**っぽい**ので、サトウカエデと見分けがつかず。 <内的属性>

(「世界の国家」 1999年、BCCWJ)

c. 思春期のこのくらいの少年は急に見違えるように大人**っぽ**くなり、理屈も発達する。 <モノ的属性>

(「現代人の心をさぐるーよりよい生活のために」 1986年、BCCWJ)

「N+っぽい」のうち、生産性が高いのは、「大人っぽい」や「子供っぽい」などの<モノ的属性>を表す用法である(この意味での生産性の高さについては、辞書の見出し語を観察した小島2003も指摘している)。

先ほどの図 4.2 の中でも「N+っぽい」について、意味の違いを考慮した上下関係を表すと以下のようなになる。

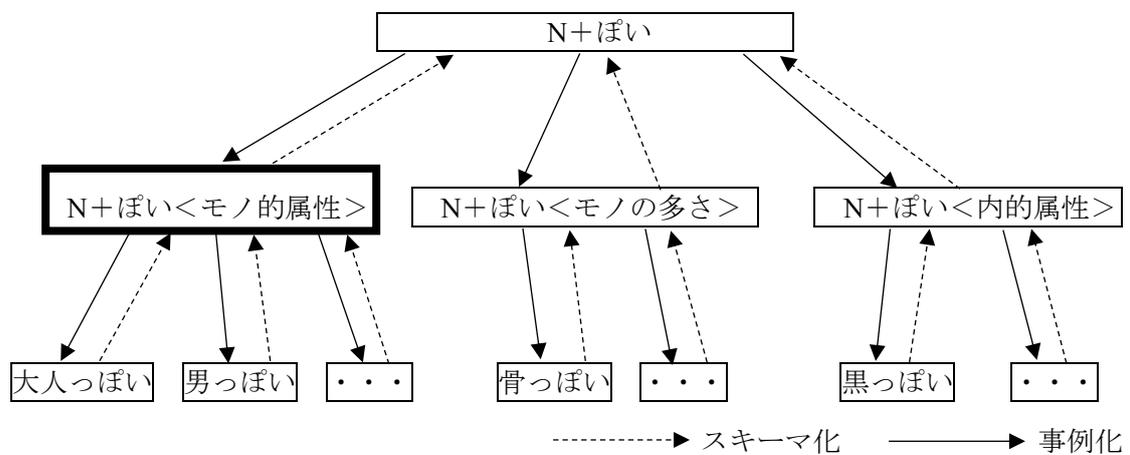


図 4.3. 「N+っぽい」の上下関係

「N+っぽい<モノ的属性>」が太枠であることは、相対的にこの意味での生産性、および定着度が高いことを示している。

「らしい」「くさい」もそれぞれ<モノ的属性>を表す「N+らしい」、「N+くさい」において生産性および定着度が高いと考えられるが、以降はこの<モノ的属性>の意味を持つ「N+っぽいらしい」「くさい」から拡張の過程を見ていく。

4.7. 拡張の過程

4.7 節では、まず、「らしい」に基づく「ぼい」の意味的拡張、形式的拡張の過程を考察し、その後起こった変化として「くさい」を扱う。

4.7.1. 「ぼい」の意味的拡張の過程

ここでは名詞接続において、より生産性の高い「らしい」に基づき、「ぼい」の用法が広がっていくと想定する。

BCCWJ 内の「らしい」と「ぼい」との前接要素の比較を試みる。「ぼい」については表 4.7 で提示済みである。「らしい」については接尾辞用法でのデータを用い、検索条件は「キー：[語彙素=らしい][品詞=接尾辞]+前方共起：[品詞=名詞]」とし、上位 15 位までを示すと以下の表 4.8 のようになる。

順	前接名詞	例数
1	男	357
2	自分	360
3	女	323
4	人間	321
5	女性	135
6	馬鹿	135
7	子供	122
8	女の子	102
9	人	80
10	もの	79
11	あほ	43
12	日本	28
13	語	23
14	母親	22
15	父親	19

表4.8. 「らしい」の名詞接続における前接要素

表 4.7 と表 4.8 の観察から、「らしい」「ぼい」に共通する用例として「子供らしい/ぼい」「女らしい/ぼい」、「男らしい/ぼい」などを見つけれられるが、これらは<内的属性>や<モノの多さ>ではなく<モノ的属性>を表している。

拡張の過程を見ていく（図 4.4）。「N+らしい」と「N+ぼい」はともに定着度が高く、<

モノ的属性 β を表す。そのため、より抽象的な「N+ [接尾辞] <モノ的属性>」を共通の背景として、「N+らしい<モノ的属性 β >」と「N+っぽい<モノ的属性 α >」の間にリンクができ、両接尾辞の比較が可能になる (図 4.4 左部分)。

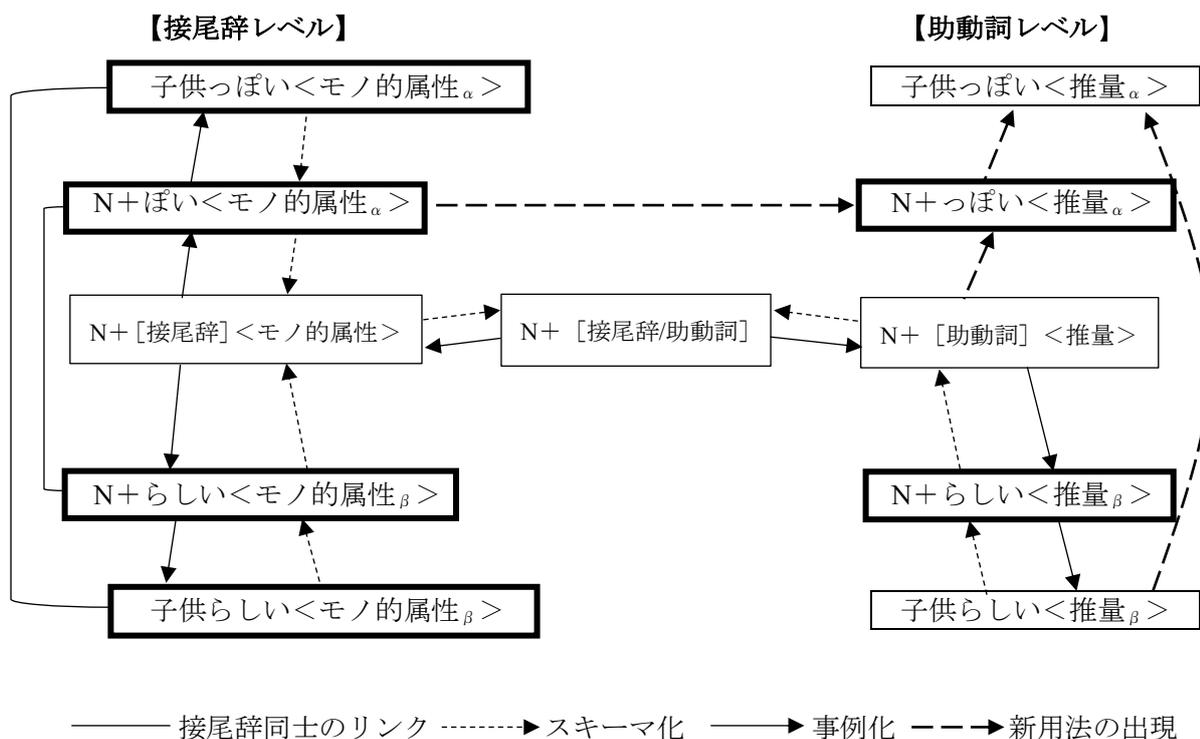


図 4.4. 「っぽい」の意味拡張の過程

事例レベルにおいても、同様に「N+ [接尾辞] <モノ的属性>」を共通の背景に、頻度の高い「子供らしい/っぽい」「女らしい/っぽい」「男らしい/っぽい」などの間にリンクができ (図 4.4 左部分)、先ほどの「N+らしい」と「N+っぽい」とのリンクが支えられる。

「N+らしい」は同様に<推量>の意味を持つ。「N+らしい<モノ的属性 β >」と「N+らしい<推量 β >」の間には、より抽象的なスキーマ「N+ [接尾辞/助動詞]」が共通している (図 4.4 内の中央)。4.3 節で先行研究として挙げた小島 (2003)、ケキゼ (2003a)、小出 (2005)、尾谷 (2000, 2005, 2011) はいずれも「属性の多さ」 (<モノ的属性>) から「可能性の判断」 (<推量>) への意味的な連続性を指摘している。図 4.4 内では表記していないが、これらの共通部分としての意味 (小島 2003 では「どこか X のように感じられる」という意味) をこの「N+接尾辞/助動詞」は持っていることになる。

このような「N+らしい<モノ的属性 β >」と「N+らしい<推量 β >」の関係に対し、先

述の「N+接尾辞<モノ的属性>」を背景にした「N+らしい<モノ的属性_β>」と「N+ぼい<モノ的属性_α>」の関係が生まれることで、「N+ぼいらしい<モノ的属性>」と「N+らしい<推量_β>」の対比が可能になり、「N+ぼい<推量_α>」の用法が出現することとなる。つまり、「N+らしい<推量_β>」の「らしい」が「ぼい」に置き換えられる形で、「N+ぼい<推量_α>」の用法が出現する（前章と同様、このスキーマが一時的に活性化していることを太枠で表している）。

あるいは、事例レベルで「子供らしい<モノ的属性_β>」と「子供っぼい<モノ的属性_α>」が結びつき、そこから「子供らしい<推量_β>」との対比で<推量_α>の意味を持つ「子供っぼい」が産出されることもあり得る。すでに前章で述べたように、抽象的なレベルで結びつくからといって、具体的なレベルで結びつくことは否定されない。

第3章までに見てきた用法拡大の過程と異なるのは、まず、図4.4内で示されているように、「らしい」「ぼい」が<モノ的属性><推量>の意味を持つという点で多義的であるだけでなく、同じ前接名詞において接尾辞のレベルと助動詞のレベルが存在するという点である。この場合、「ぼい」が上記の過程で<推量>の用法を持つことは、構造的な面から言えば、以下の(20)のように再分析がなされていることになる。

(20) [[彼は][男っぼい] > [[彼は男]っぼい]

また、この用法の拡大の過程は、意味の広がりを伴うという点で、第3章の「がち」「気味」や「ばなし」「どおし」の関係に似ているが、この場合「子供っぼい<モノ的属性_α>」から「子供っぼい<推量_α>」というように、形式ではなくもっぱら意味的拡張に関わっているように思われる。これについては第6章でもう一度触れることになる。

4.7.2. 「ぼい」の形式的拡張の過程

意味的拡張に続いて、形式的拡張の過程を考える。先行研究で句レベルの接続が指摘される「ぼい」であるが、BCCWJ内ではその用例を見つけることができない。一方、「らしい」は終止形接続の用例が15225件検出される。

このような分布に基づき、「ぼい」の<推量>への拡張が起こった後に、句レベル接続への形式的拡張が起こるということ、そして、「らしい」に基づき、「ぼい」において形式的拡張が起こると想定する。この変化は尾谷（2005, 2011）で「類推」に基づいて起こったと説

明されたものと同じであるが、本研究は（構文）スキーマという観点からこれを説明していくことになる。

4.7.1 節では形式的な共通性、つまり、前接要素が名詞接続であることを契機にして意味的な拡張が起こることを確認したが、今度は<推量>の用法を共通にして、形式的拡張（句レベルの接続への拡張）が起こると考えられる。

以下の図 4.5 のような拡張の過程について考察する。

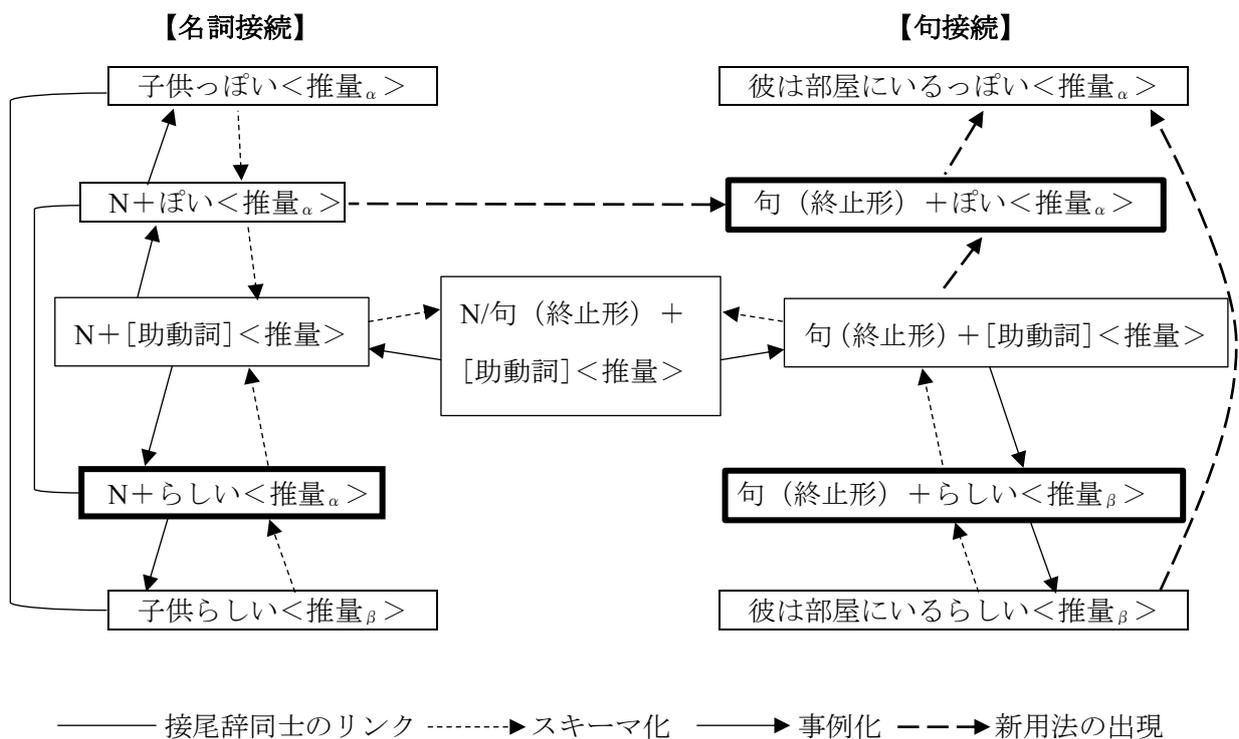


図 4.5. 「ばい」の形式的拡張の過程

「らしい」は高い定着度で<推量>の用法を持つが、名詞接続において「N+らしい<推量β>」と「N+っぽい<推量α>」が結びつく（図 4.5 左部分）。これらは、「N+[助動詞]<推量>」を共通のスキーマとして持つ。また<推量>の意味を持つ「子供っぽい」や「子供らしい」のような事例レベルのつながりもあり得る。

「らしい」は<推量>の意味において名詞接続だけでなく句レベルの接続が可能である。つまり、「N/句（終止形）+[助動詞]<推量>」というスキーマが両者の間に存在していることになる（図 4.5 中央）。

そして、4.7.1 節と同様に、「N+[助動詞]<推量>」を抽象的共通性として持つ「N+ぽ

い<推量_α>」と「N+らしい<推量_β>」の関係に比較される形で、「句（終止形）+らしい<推量_β>」に対し、「ぼい」にも句レベルの接続（「句（終止形）+ぼい<推量_α>」）が現れる（一次的に活性化しているため、「句（終止形）+ぼい<推量_α>」を太枠で示す）⁵⁸。

ここでの用法の広がりや、新たな前接要素の用例の産出に寄与しているという点で、第3章での「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」や「気味」「め」「加減」「ばなし」「きり」における過程に似ている。しかし、前接要素の性質から見れば、語レベルから句レベルへの形式的拡張に関わっているという違いがある。これは、第3章の場合、前接部が「動詞連用形」に統一されていたのに対し、図4.5の中央部の「N/句（終止形）+[助動詞]<推量>」からわかるように、意味（<推量>）を共通部分として、二つの前接形式「名詞」「句（終止形）」を統合したスキーマを基にして用法の拡大が起こっているためである。

4.7.3. 高次のスキーマの定着と「くさい」の拡張

「くさい」は名詞接続においても、句接続においても「ぼい」「らしい」ほど用例が多くない。このような分布から、「くさい」については、「らしい」「ぼい」に基づいて用法が拡大していると考えられる。

「キー：[語彙素=くさい][品詞=接尾辞]+前方共起：[品詞=名詞]」を条件にして、名詞接続における「くさい」の前接要素を、上位15位まで見ると以下のようなようになる。

⁵⁸ 事例レベルの比較（類推）から「句（終止形）+ぼい<推量>」の用例が現れたと考えることもできる（図4.5内で「彼は部屋にいるらしい」から「彼は部屋にいるっぼい」への破線で示している）。ただし接尾辞と違い、助動詞として句が前接する「らしい」の場合、前接要素は肯否、テンス、アスペクト的な要素が絡むなど非常に幅広くなる。このような句レベルが接続する「らしい」において、事例レベルで前接要素にどのような偏りがあるかの検討は、今後の課題とする。

順	前接名詞	例数
1	面倒	692
2	胡散	190
3	汗	48
4	水	47
5	人間	46
6	貧乏	35
7	邪魔	31
8	田舎	22
9	けち	21
10	偽装	21
11	辛気	18
12	インチキ	13
13	あほ	13
14	嘘	11
15	説教	9
15	分別	9

表 4.9. 「くさい」の名詞接続における前接要素

目立って多い前接名詞は「面倒」「胡散」であるが、これは語彙化されたもので分析的に考えにくい。「水」も同様に意味が特殊化している⁵⁹。また、「汗」は通常、実際の「におい」に関するものと思われるので、これを除くと「らしい」「ぼい」の用法に近くモノ的属性 > を表し、なおかつ「らしい」と共通し、比較的頻度の高い前接要素は「人間」である。

この「人間らしいくさい」のような事例レベルや、「N+らしいくさい」というスキーマレベルのつながりなど利用し、図 4.4 のような意味的拡張、さらに図 4.5 のような形式的拡張が起こると考えられるが、「くさい」が「らしい」「ぼい」の後続として拡張が起こると考えると前節までとは違う状況が考えられる。

それは構文スキーマ「N+らしい<推量_β>」「N+ぼい<推量_α>」の存在により、さらに高次の「N+助動詞<推量>」の定着度がより高まっているということである。以下の図 4.6 に「らしい」「ぼい」のスキーマの上下関係を示しているが、「N+ [助動詞] <推量>」の太枠は、両接尾辞からの抽出によって、定着度がより高くなっていることを表している。

⁵⁹ 「水くさい」については、その通時的変遷も含め、池上 (2014) で詳しいが、現代語では「情愛が薄い」といった意味を表すものとされ、「水っぽい」とは意味を共有しない。

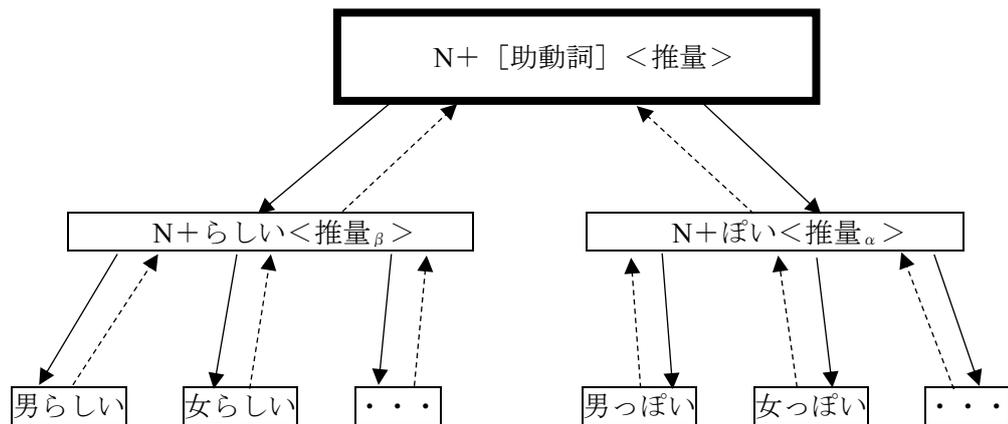


図 4.6. 「らしい」「っぽい」とスキーマの抽出

より定着度が高くなるのは「句（終止形）＋[助動詞] <推量>」にも当てはまる。このような定着度が高まった高次のスキーマは「くさい」の拡張を促進すると考えられる。

4.8. 通時的変化とスキーマの定着

本研究で扱う接尾辞について、通時的観点からの研究の概説を第1章を見た。ここでは、時期に注目して、「らしい・っぽい・くさい」の通時的変化を概観する。

岩崎（2012）では、正確な時期は特定できないものの、「らしい」は中世から存在が確認でき、その後、近世後半において名詞接続で<推量>の用法が見られるようになったとしている。

- (21) てい「サアーぷくあがらんせ。いつたいおまいは、どこを尋ねさんすのじやいな。参宮じやあるが、おひとりか。但しは、おつれでもおますかいな 弥次「さやうさ。道連ともに三人の所、わつちはそのつれにはぐれて、こんなこまつたこたアございやせん てい「イヤそのおふたりのおつれは、おひとりはお江戸らしいが、今おひとりは、京のお人で、目のうへに、此くらひな、痰癰のあるおかたじやおませんかいな 弥次「さやう／＼

（「東海道中膝栗毛」5 編追加 1806 年、岩崎 2012）

さらに、明治期には<推量>の意味において終止形接続が定着したとされる。

(22) 皆その隣の家の者の住居にしてある座敷に塊まっているらしい。

(「浮雲」 1887年、岩崎 2012)

「ぼい」は、その出自が明瞭ではない。「ぱい」(「塩っぱい」など)との比較を試みた新山(1960)は「ぼい」の使用が近世後期以前には見られないことを指摘している。そして、新山は関東方言の中の「すっぺり」「しっぽり」などの「促音・P音」を含む副詞からの類推で、形容詞的な言い切りをしたことに由来するのではないかと推察している。

岩崎(2012)は、昭和期の終わり頃に、<推量>を表す助動詞としての用例が「ぼい」に見られるようになると述べている。

(23) 雨が降りそうなことを「今日は雨ッポイ」あるいは、その可能性がごくわずかであれば、「少な目」のメをつけて「雨ッポメ」だと言うのだそうです。

((4)の再掲)

そして、終止形に接続する用法が確認されるようになる。

(24) NHK 第一放送昼のラジオ番組で、アナウンサーにペットのことを尋ねられた歌手石川ひとみいわく、「何か話しても、ワンチャンだと結構それを聞いているっぼいじゃない。猫はそうじゃない。」

(「言語生活」 1986年5月、岩崎 2012)

「くさい」について、池上(2013)は接尾辞「くさい」の用例は中古期から見られるとする。池上は名詞接続において<推量>の意味が出現した時期を特定していないが、岩崎(2016)では、それまで「人やものの性質や状態」を表していた「くさい」が、ある人物について「(ある人物) XはYに属する」ことを表す用例が明治後期ごろに見られ、このような用例が推量的判断を発達させていくきっかけになっているのではないかと推察している(ただし、岩崎が挙げている以下の例は大正期のものである)。

(25) 梅玉と初音がまた両派に分れて隣り同志で確執して居るなどは一寸滑稽である梅玉は堀派多年の恩顧に依り同志派臭味の人は一切泊めぬと頑張り初音は肥塚派より多

年の最頂を受け政友臭い人物は断然飲まさぬと主張し此処に聘せされる芸妓までが
政派熱にかぶれて互に角突き合うなど毎年政治季節になると面白い喜劇が演ぜられ
る政派熱の劇しい旅館料理屋の中に立って独り鮎狩旅館の林田屋は不偏不党といっ
た態度

(「大阪毎日新聞」 1915年5月7日-1915年8月14日、岩崎 2016)

さらに、池上 (2013) は「近年における若年層使用の印象が強い」(同上:31) 句接続で、
〈推量〉を表す用法の誕生は、以下のような大正時代の用例に遡れるとしている。

- (26) 小田原を訪ねたとき、先生は風邪を引いて寝てゐた。奥さんも丹前を着て鼻をかみ
乍ら「どうやら妾もお相伴になつたくさいのよ。」と云つてゐた。元気なのは却つて
只妹さんだけだつた。

(「竹沢先生と云ふ人」 1924年、池上 2013)

しかし、その後、句を受ける用例は 1950 年代を最後に抽出できないとされており、この時
期の〈推量〉の用法が現代まで連続しているかどうかは不明である⁶⁰。

また、通時的変遷を扱った研究ではないが、堀尾 (2015) は〈推量〉を表す「ぼい」と「く
さい」を、名詞接続と句接続ともに 1990 年代から 2000 年代の「若者言葉」として扱ってい
る。

- (27) a. 明日は駄目**っぼい**。 (堀尾 2015: 95 より抜粋)
b. 明日はテストがある**っぼい**。 (堀尾 2015: 96 より抜粋)
- (28) a. 棺おけくさくない?
b. 明日は無理**くさい**。
c. あそこにあつた**くさい**。

(堀尾 2015: 41 より抜粋)

詳細が明らかでない部分もあるが、先行研究から、「らしい」に続いて「ぼい」や「くさ

⁶⁰ 青木 (2016a) では現代語の(28c)のような例を考察に加えていないため、「くさい」は、助動
詞(「語」の段階)から接尾辞に収縮したものと捉えている。

い」が<推量>の用法を発達させていったことが窺われる。また、このような変化の流れは、現代語の使用から共時的に拡張の過程を考察した4.7節とも、ある程度整合性がある。

さらにこれらの研究から、接尾辞として長く存在してきた「らしい・ぽい・くさい」について、「らしい」が近世後期に名詞接続で<推量>の意味を表し、明治期に句接続が認められるようになった後、現代までの比較的短期間に「ぽい」「くさい」が<推量>を表し、また句に接続するようになったと考えることができる。このことも4.7.3節で述べたように「N + [助動詞] <推量>」、「句（終止形） + [助動詞] <推量>」などが強固に定着し、このような高次のスキーマに引きつけられるように拡張が進んだと考えることが可能である。

本節で見えてきたように、共時的な用例を基にした本研究の考察は、「らしい・ぽい・くさい」の通時的な変化もある程度反映したものであり、また、反対に通時的な変遷に示唆を与えるものである。

4.9. 用法基盤モデルと使用場面

第1章で言及したように、本研究では、Usage-based model に従い、実際の言語使用からの観察を重視する。本章での拡張においては、どのような用例が用いられるかに加え、その使用場面が重要な役割を果たしたと考えられる。本章で扱う接尾辞「らしい・ぽい・くさい」は名詞化接尾辞「さ」を後接させ、「子供っぽさが/を/に」など助詞を伴い文中で使われる場合、あるいは、「子供っぽい服」のように装定用法として用いられる場合もある。しかし、ターゲットとなる助動詞が基本的には「文末」で用いられる以上、文末での接尾辞使用が拡張につながったものと思われる。これは、青木（2016:37）の「使用が文末に偏って「判断」の意味がクローズアップされ」ることでモダリティ形式が成立したという指摘と一致する⁶¹。

⁶¹ 第2章で確認したように句接辞においても、句を包摂するのは文中ではなく、（連体修飾部も可能であるが）文末である⁶¹。

- (i) a. 湯の出しっ**放**しがよくない。
- b. ??湯を出しっ**放**しがよくない。
- c. 風呂は湯の出しっ**放**しだ。
- d. 風呂は湯を出しっ**放**しだ。

（第2章(28)の再掲）

このような使用環境が句を包摂する条件であることは、句接辞においても確かである。

4.10. 本章のまとめ

本章では、比較的近年起こったと思われる「ぼい」「くさい」の拡張過程を、コーパスでの検索結果に基づいて、共時的に考察した。

変化における考察は「ぼい」が中心であったが、4.7.1 節は、生産性が高い「N+らしい<モノ的属性_β/推量_β>」との比較から、「N+ぼい<モノ的属性_α>」にも<推量>を表す用法が現れる過程を示した。4.7.2 節では、生産性が高い「N/句(終止形)+らしい<推量_β>」との比較から、「N+ぼい<推量_β>」にも「句(終止形)」接続が現れる過程を示した。また、後続して起こる「くさい」は、より定着度の増したスキーマによって拡張が促進されると考えられることを述べた。

また、ここで想定される変化の過程は、通時的にも、ある程度妥当性があるものであることを示したが、「らしい・ぼい・くさい」も第3章と同様に、用法が拡大することで「句(終止形)+[接尾辞]<推量>」というスキーマを定着させていくような動き、つまりカテゴリーを形成していく動きを想定することができる⁶²。

⁶² 3.7 節で、接尾辞間の微妙な意味の違いが、新たな表現を生み出す動機付けになるのではないかということについて述べたが、本章での「らしい・ぼい・くさい」についても、「ぼい」は「あいまい化」「和らげ」の機能があること(ケキゼ 2003a, 2003b)、「くさい」はマイナスイメージがあること(池上 2013)などが指摘されており、同じ推量用法であっても、三者には違いが存在すると思われる。

第5章 プロファイルと句を包摂する接尾辞

第5章では今まで見てきた句接辞、および「らしい・ぼい・くさい」が Langacker 流の認知図式を用いてどのように記述されるかを示し、そこからどのようなことが明らかになるかを論じる。

5.1 節では、本章で扱う接尾辞とその意味、そして目的を確認する。5.2 節では理論的外観を確認する。5.3 節ではプロファイルの仕方による意味の表示を試み、各接尾辞の意味同士の間関係を考察する。5.4 節では先行研究で指摘される「内項主語構造」に対し、認知図式の表示から、その可否の根拠を与えることを試みる。5.5 節では、接尾辞同士の意味の連続と多義性の表示を認知図式で明確に示す。5.6 節は本章のまとめである。

5.1. はじめに

句接辞は新山 (2020a) で指摘されるように、個別的な研究はあっても、ひとくくりに扱われることが少なかったものである。

本研究では第2章において、句接辞が特定の意味を持っていることと、それらが名詞性の強弱に従って連続的な関係を持つことについて述べてきた。第2章で扱ってきた句接辞と第4章で扱った「らしい・ぼい・くさい」の意味分類を前接要素の例とともにまとめると、以下のようなになる⁶³。

⁶³ 本章では前接要素が少ないことから議論の簡潔さのために、第3章で扱った「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」「加減」「め」などの生産性が低い接尾辞は除いている。

意味	接尾辞
既然	論文を書きたて
途中	本を読みかけ
結果状態の継続	窓を開けっぱなし/つきり/放題/どおし
動作・出来事の継続	歌を歌いっぱなし/つきり/どおし/まくり/すぎ
状態変化の程度	パンを焦がしすぎ
動作・出来事の反復	ミスをしまくり/すぎ
頻度傾向	漫画を読みがち/気味
状態傾向	恋人を持て余しがち/気味
様態	本を落としそう
推量	新しい本を出すらしい/っぽい/くさい

表 5.1. 句接辞の意味と用例

本章では、表 5.1 に示した各接尾辞の意味とその連続性について考察を深める。具体的には、プロフィール⁶⁴とスケールを用いた認知的な図式（以下「認知図式」）で表示を行うことにより、次のことが可能になると主張する。

- ① 散発的に研究されてきた句接辞の意味を、プロフィールの仕方とスケールの意味領域によって、体系的かつ簡潔に記述し、その意味的な連続性を示すこと
- ② 先行研究で指摘されてきた「他動詞内項の主語化」に一定の根拠を与えること
- ③ 接尾辞間の意味の連続や接尾辞の多義性を認知図式によって明確に示すこと

5.2. 理論的概観

5.2 節では本章で用いる認知図式、プロフィール決定子、スケールについて概観する。

5.2.1. 認知図式

第 1 章でも触れたように、Langacker (2008) は認知的な図式を用いることの意義について

⁶⁴ 本研究におけるプロフィール (profile)、trajector (Tr)、landmark (Lm) の定義は Langacker (2008) に従う。

て、次のように述べている。

図表は本質的に**理解を手助けするもの**であると考えている。どのように慎重に描かれた図表であっても数学的な厳密さは欠けている。しかし、作成過程において、分析者は、意味の記述と文法の記述の際に普通は無視される、無数の詳細な記述を吟味しなければならない。図表の大半は、ほとんどの目的を達成するために正確に描かれており、明示的でわかりやすく、発見を促すようなある種の有用性も兼ね備えている。

(Langacker 2008: 10 ; 山梨監訳 2011: 12 太字は原文のまま)

このように Langacker は、認知図式を用いることによる、その発見的な有用性を主張しているが、本章では認知図式を用いることで、今まで指摘されてこなかった本研究で扱う接尾辞の意味同士の関係が明らかになると主張する。

5.2.2. プロファイル決定子 (profile determinant)

「合成構造レベルにそのプロファイルが受け継がれる成分構造」(Langacker 2009: 13 ; 訳は筆者による) のことをプロファイル決定子と言う。例えば、Langacker (2009) では図 5.1 で示すように接尾辞がプロファイル決定子として働く例として *-er* を挙げ、*throw* における「行為者」「対象」の関係のうち、*-er* が付加されると (*thrower*)、行為者だけがプロファイルされることを示している。

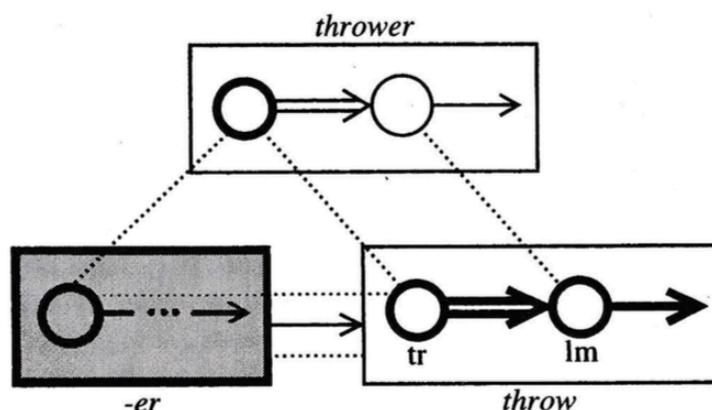


図 5.1. 名詞化接尾辞 *-er* の合成過程 (Langacker2009: 25)

5.2.2. スケール (scale)

Taylor (2002: 220) は、名詞や動詞にはない特徴として、形容詞はそれが表す特定の領域との関係をプロファイルするとしており、形容詞の持つ程度性をスケールで表示している。Taylor は形容詞の中でも典型的なものとして tall を挙げているが、以下の図では、tall が Tr (モノ) と基準 (norm) を上回る垂直領域との間の関係をプロファイルしている。

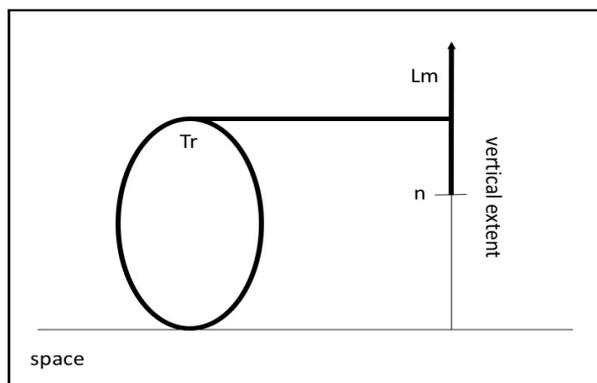


図 5.2. tall の意味構造 (Taylor2002: 220)

仲本 (2017) では、このような段階性に関するモデルにおける Tr として選択される名詞句が「行為」や「出来事」になる場合の図式として、以下のような図を示している。

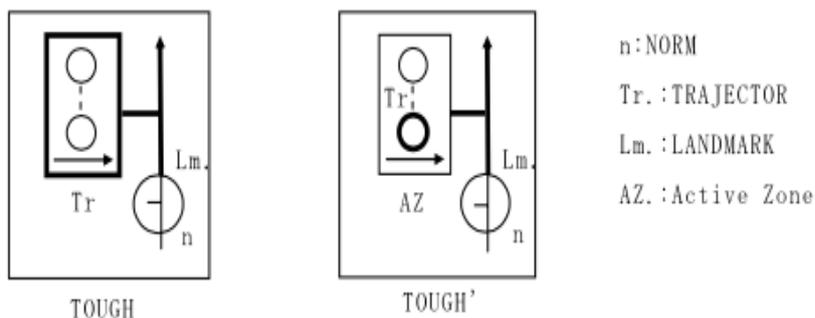


図 5.3. Conceptualizaion of Tough-constructions (仲本 2017: 288)

左は To drive Honda is easy. で、右は Honda is easy (to drive). をそれぞれ表したものである。この場合、「どちらにしてもここで比較されているのは、Honda という事物ではなく drive Honda という事象であり、後者 (Honda is easy (to drive).) の場合も、そういった事象が活性化されており、そのような背景 (活性化領域 active zone) の中で Honda という事物に焦点が

あてられていることを表す」(仲本 2017: 288) としている。

本研究においてもスケールに関係づけられる事象は図 5.3 のような「行為」や「出来事」であり、認知図式の表示はこれに類するものとなる。

5.2.3. 接尾辞と認知図式

村尾 (2013b) は、接尾辞「かけ」の使用によって動詞の「焦点シフト」が起こり、「アスペクトに関わるドメイン、「過程」「完結」が活性化し、中でも「過程」ドメインの途中過程がプロファイルされる」(村尾 2013b: 127) と主張し、様々な動詞に付加した際、「かけ」がどのように機能するかを効果的に示すために、以下の図 5.4 のような認知的な図式を用いている。

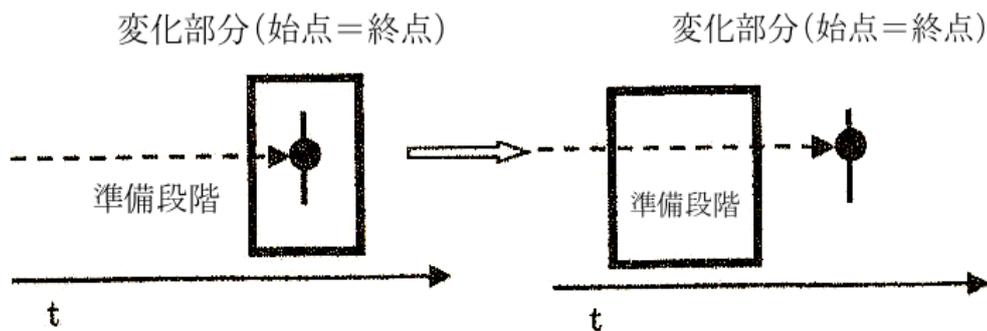


図 5.4. 到達動詞の焦点シフト (村尾 2013b: 133)

接尾辞の機能を示すために認知図式を用いるという点では、本研究も同じ立場であるが、村尾が接尾辞「かけ」の付加により、様々な動詞のアスペクトがどのように発現するか注目しているのに対し、本研究は接尾辞自体に注目し、様々な意味を持つ接尾辞がどのように記述できるかに関心を置く。

5.3. 句接辞と認知図式

5.3 節では、句接辞がプロファイルを用いてどのように表示できるかを見ていく。

5.3.1. <既然><途中>の認知図式

以降の図は基本的に、sequential scanning (Langacker1987) で記述しており、□が動作主、○が対象を指すものとする。

(1) 彼は論文を書きたてだ。 <既然>

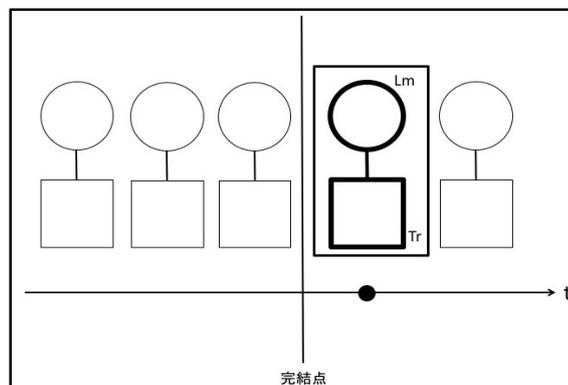


図 5.5. <既然>の認知図式

(1)のような「たて」では、図 5.5 のように完結点が存在し、その直後をプロファイルしている。

(2) 彼は本を読みかけた。 <途中>

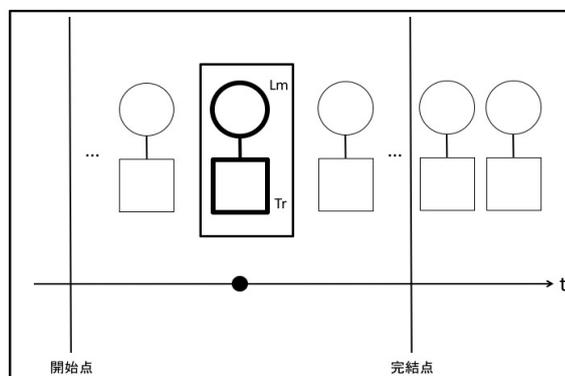


図 5.6. <途中>の認知図式

一方で、(2)のような「かけ」は「たて」と違い、図 5.6 で示すように「開始点」と「完結点」の二つが存在し、その間のいずれかの時点のプロファイルする。

「たて」「かけ」はいずれも時間軸上の「点」をプロファイルしている点で共通している。

なお、本来は下の図 5.7 のように、例えば「彼は本を読みかけた」において、斜線で示されたスキーマ的な Tr や Lm である精緻化サイト (elaboration site) を他の要素である「彼」や「本」が精緻化していくという合成の過程が存在するが、簡潔さのため、その過程を省略

し、結果のみを示している⁶⁵。

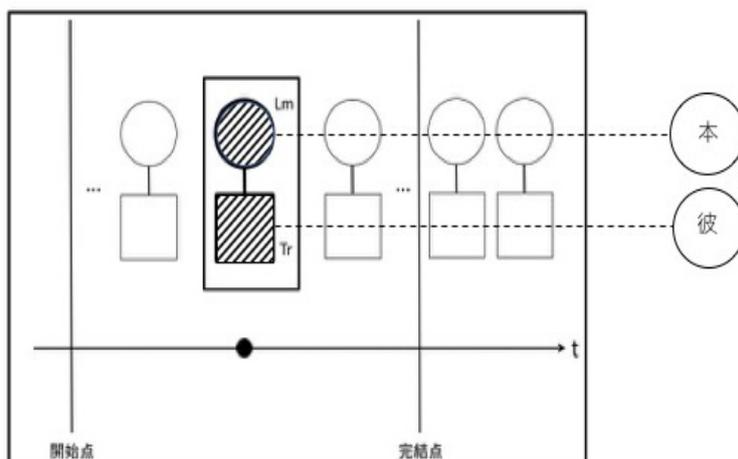


図 5.7. 「彼は本を読みかけた」の合成

5.3.2. <結果状態の継続><動作・出来事の継続>と認知図式

5.3.2 節は<結果状態の継続><動作・出来事の継続>など<継続>を表す接尾辞を扱う。

(3) 彼は窓を閉め**っぱなし/つきり/放題/どおし**だ。 <結果状態の継続>

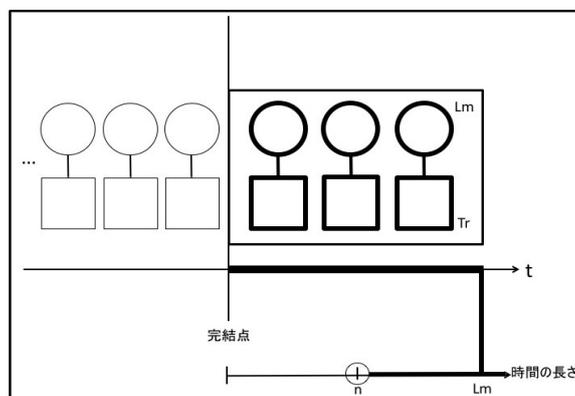


図 5.8. <結果状態の継続>の認知図式

⁶⁵ 第2章で述べたように、ほとんどの句接辞は第三形容詞性であり、名詞的なものと形容詞的なもの之间存在すると考えられる。Langackerは一連の研究で、形容詞が「(時間的変化を伴わない) 関係」をプロファイルするのに対し、名詞は「モノ」をプロファイルするものとしているが、一方で、叙述名詞は「関係」をプロファイルするとしており、be動詞はこの関係が持続することをプロファイルすると述べている (Langacker 1991: 65-66)。また、テイラー・瀬戸 (2008: 221) でも、このような叙述名詞と(叙述)形容詞とが近い関係にあるとしている。本章の認知図式はこのような指摘を反映したものとなっており、句接辞が持つ名詞的か形容詞的かの品詞的曖昧性はここでは問題にならない。

(3)のように接尾辞が<結果状態の継続>を表している場合、図 5.8 で示すとおり、「完結点」が存在し、接尾辞はそれ以降の時間軸上の「幅」をプロファイルしている。

(4) 彼は歌を歌い**ぱなし/つきり/どおし/まくり/すぎだ。** <動作・出来事の継続>

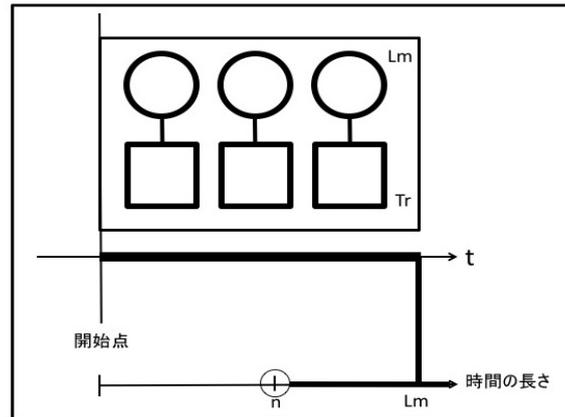


図 5.9. <動作・出来事の継続>の認知図式

一方で、(4)のような<動作・出来事の継続>を表す接尾辞の場合、図 5.9 のように今度は「開始点」が存在し、それ以降の時間軸上の「幅」をプロファイルする。

これらが時間軸上の「幅」をプロファイルすることは、「たて」「かけ」が時間軸上の「点」をプロファイルしていたことと対照的である。

また、「たて」「かけ」の認知図式では見られなかった特徴として、(3)(4)における接尾辞は「時間の長さ」のスケールにおける特定領域との関係性をプロファイルしている。ここでの認知図式においてスケールを用いる必要性は、次の(5)のように単純な<継続>を表す「ている」を用いた場合と比較すれば、はっきりする。

(5) a. 彼は店先に車を止めている。 <結果状態の継続>

b. 彼は料理を作っている。 <動作・出来事の継続>

「ぱなし」などの上記の接尾辞を用いた場合、継続する時間の長さが「通常・基準より長い」

と感じられる点で、「ている」と差があることがわかる⁶⁶。このことから、これらはスケールを持つと想定し、Taylor (2002) での表記に基づいて表示している。ただし、その関係性のプロファイルは時間軸上のプロファイルほど前面に現れていないと考えられる。それを示すために、時間軸上のプロファイルにおける太線に対し、関係性のプロファイルは「やや太い線」で表現している⁶⁷。

5.3.3. <状態変化の程度>と認知図式

「すぎ」は<状態変化の程度>⁶⁸を表すが、ここまでの接尾辞と違い、時間軸上のプロファイルは見られず、図 5.10 のように関係性のプロファイルだけが見られ、スケールが現れる。

(6) 彼はパンを焦がしすぎだ。 <状態変化の程度>

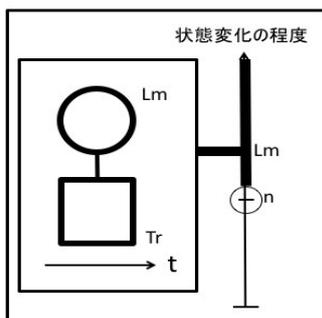


図 5.10. <状態変化の程度>の認知図式

⁶⁶ 「ばなし」については、「過去形+まま」と比較した場合の同様の指摘が渡邊 (2000) にある。

⁶⁷ プロファイルに強弱をつけることの理論的可否については、Tr、Lm の関係がそもそも「際立ち」の程度の違いであることを考えると、妥当性はある程度あると思われるが、ここでは詳細な議論は避ける。

⁶⁸ なお「すぎ」が持つ数量の過剰> (由本 2005, 2012) の意味については、本研究では「複数」の主語あるいは目的語を表す点から、<動作・出来事の反復>に属するものとする。このような数量の多さについての意味用法は「まくり」も持つと思われるが、扱いは同様である。

また、「まくり」において<状態変化の程度>を表していると感じられる用例も散見される。

(i) 彼は太りまくりだ。

この場合も回数的や量的なニュアンスが感じられ、あくまで、これから派生する形で臨時的に<状態変化の程度>の解釈が現れていると考えられる。

筆者の内省ではあるが、(6) の用例を「まくり」に置き換えた「彼はパンを焦がしまくりだ」の場合も、<状態変化の程度>よりも「時間の長さ」や「回数の多さ」が一義的に感じられる。

5.3.4. <動作・出来事の反復>と認知図式

「まくり」「すぎ」は(7)のように<動作・出来事の反復>を表すこともある。以下の図 5.11 の認知図式は、開始点以後、複数の事態が生起したことを①②③と数字を用いて表現しているが、一回一回の事態を表す際に、動作主(□)と対象(O)との関係は summary scanning (Langacker1987) で示している。

(7) 彼は(さっきから) ミスをしまくり/すぎだ。 <動作・出来事の反復>

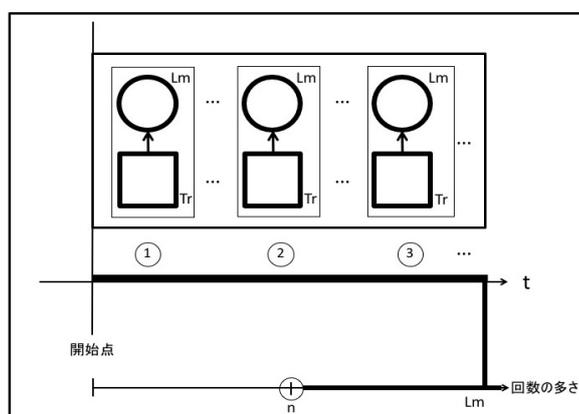


図 5.11. <動作・出来事の反復>の認知図式

この場合も、時間軸上の幅をプロファイルしていると言える。

また、先ほどの<継続>の場合と同様、<動作・出来事の反復>は、次の(8)のように「た」や「ている」を用いても表すことができる。

- (8) a. 葉子は次郎に三回電話をかけた。
 b. 安田はこれまで2度蜃気楼を見ている。

(加藤 2010: 62)

しかし、「まくり」「すぎ」の場合、やはり、その回数が「通常・基準より多い」ことが含意される点で違いがあり、「回数の多さ」についてのスケールを持つことが想定される。なお、図 5.8 や図 5.9 と同様に、関係性のプロファイルは前面に現れていない。

5.3.5. <頻度傾向>と認知図式

(9)のような「がち」は図 5.11 での「まくり」「すぎ」と同様に「複数回の動作・出来事の生起」を指すが、「まくり」「すぎ」と異なり、生起の回数が「複数回」であることよりも、生起の回数が「多い」ことがより強く表れる。そのため、図 5.12 で見られるように時間軸上のプロファイル（「やや太い線」で表示）より、関係性のプロファイル、スケールが前面に現れる（「太線」で表示）。また「回数の多さ」ではなく「傾向性」という、より属性的なスケールを持つ⁶⁹。なお、第 3 章で論じたように「気味」の一部にもこの用法が認められる。

(9) 彼は（最近）漫画を読みがち/気味だ。<頻度傾向>

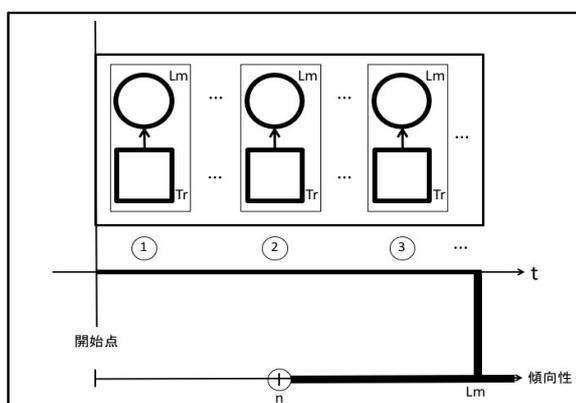


図 5.12. <頻度傾向>の認知図式

5.3.6. <状態傾向>と認知図式

(10)の「気味」と一部の「がち」は、図 5.13 のとおり<傾向>の中でも<状態傾向>を表す。

(10) 彼は恋人を持て余し気味/がちだ。<状態傾向>

⁶⁹ 八尾 (2006: 137) では「がち」(及び「やすい」)が表す「事例の多さ」(本研究での<頻度傾向>)について、「一過性の現象ではなく時間を超えてみとめられる一定した性質と考えられ、反復というよりむしろ属性に近いものである」との指摘がある。実際、「がち」は以下のように「とかく」を伴い、恒常的な性質を表す場合が多い。

(i) 大きい犯罪というものは、とかく簡単でありがちだ。
(「シャーロック・ホームズの冒険」、八尾 2006)

このことも、「がち」においてスケールが前面に現れることを示唆している。

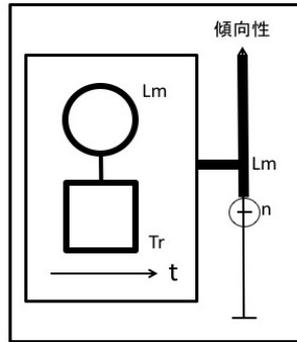


図 5.13. <状態傾向>の認知図式

<頻度傾向>と違い、時間軸上のプロファイルはなく、関係性をプロファイルし、一時的な状態（井上 1998）を表している。その一方で<頻度傾向>と共通する点として、「傾向性」というスケールを持つ。

5.3.7. <様態>と認知図式

(11)のような「そう」の認知図式は、Langacker (1999) で取り上げられた、probability をスケールとして持つ likely を参考に行っている。Langacker によれば likely は多義であり、意味に応じて、例えば That Don will leave is likely. と Don is likely to leave. の二つの表示があるとされる。ここでは「そう」が「助動詞」として扱われることが多いことを鑑み、コト全体をプロファイルする前者を参考にし、図 5.14 のように「可能性」に関するスケールを持つと考えている⁷⁰。

⁷⁰ ここでは probability に対応する形で「可能性」のスケールを持つとしているが、「そう」についての先行研究を踏まえると、ここでの「可能性」のスケールとは「兆候や様相の表れ」（杉村 2000）がどの程度存在するかという、より性質的なものとして解釈するほうが正確であろう。

主語が Tr となるか、コト全体が Tr となるかについては議論の余地がある。統語構造上の分析においても、近年の坂東 (2021) の研究では「そう」は「推量」の解釈の場合、補部は命題（節）レベルを取り、「アスペクト（直前）」の解釈では動詞句を取るという二つの構造を持ち得るとしている。このような分析が認知文法ではどのように反映されるかは今後の課題としたい。

(11) 彼は本を落としそうだ。 <様態>

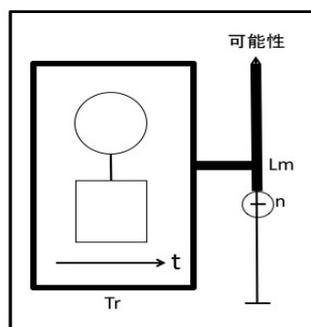


図 5.14. <様態>の認知図式

本節では、それぞれの句接辞が、時間軸上のプロファイルによって表されるアスペクト的な面の背景化と、それに対応するスケールの前景化という軸の上に連続的に分布することを見た。これは、第2章において「-な」形式の出現率の高さなど複数の基準で名詞性の強弱について考察した以下の図 5.15 とも、ほぼ対応していることがわかる。

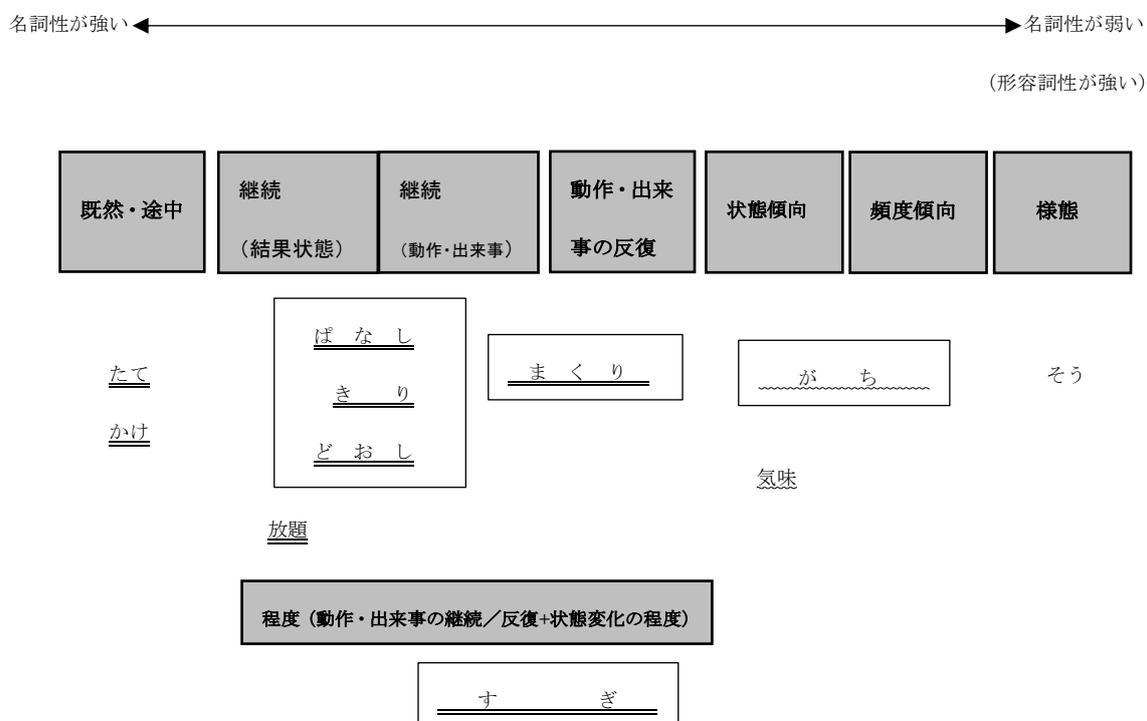


図 5.15. 名詞性の強弱と意味 (第2章図 2.1 の再掲)

5.3.8. <推量>と認知図式

また、第4章で扱った「らしい・ぼい・くさい」は終止形（あるいは名詞）接続で<推量>を表すが、「そう」と同じく「可能性」についてのスケールを持っており（図 5.16）、前接要素の活用形の違い（動詞連用形接続か、終止形接続か）はあるものの、句を包摂する接尾辞群全体の意味の連続性を示すことができる⁷¹。また、品詞的にも第三形容詞性接尾辞（「がち」など）>形容動詞性接尾辞（「そう」）>形容詞性接尾辞（「らしい」など）という連続性を想定することができる。

もっとも、「そう」は寺村（1984:239）で、「頭の中で推量するという色彩が最もうすい」とされており、大場（1999）などの意味研究で<寸前>の意味に解釈できるという指摘があるように、「らしい・ぼい・くさい」よりも「アスペクト」側に近いことが窺われる。

(12) 彼は（来週）新しい本を出すらしい/っぼい/くさい。 <推量>

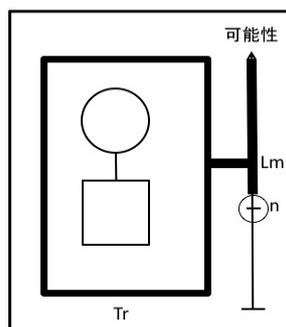


図 5.16. <推量>の認知図式

⁷¹ 「そう」と「らしい/ぼい/くさい」の図は、ここでは抽象的に「可能性」というスケールを共通項として、等しいものとなっている。実際は、認識的なモダリティ表現（日本語記述文法研究会 2003）に分類されるものの中でも、いわゆる<推量>を表す助動詞とされる「らしい」、<様態>の助動詞とされる「そう」は、<比況>を表す助動詞とされる「ようだ」も含めて、その相違点について多くの研究がなされてきており、個々の形式が持つ特徴についても第2章、第4章で示してきたように先行研究の蓄積が多くある。

本研究はその相違点を考察するものではないが、以下に「そうだ」と「らしい」の違いについて端的に示した柏木（2001）の記述を示しておく。

- (i) 「そうだ」＝眼前的状況・様子から、次に来たるべき（＝そこから導かれるべき）事態を推測する。
- 「らしい」＝眼前的状況・様子が何によって導かれたのか、その導く所以のものを推測する。

（柏木 2001: 56 より抜粋）

5.3.9. 句を包摂する接尾辞が表す意味の連続的な関係

本章では、認知図式を用いることで句接辞の意味を体系的、簡潔に記述することを試みた。これによって、認知図式におけるプロファイルの仕方と、スケールの現れ方を通して句接辞、「らしい・ぼい・くさい」の意味に関する連続性が明らかになった。その連続性とは、次のようなものである。

<既然><途中>においては時間軸上の一点をプロファイルしている。

次に時間軸上の幅がプロファイルされるようになる。まず、<結果状態の継続>においては、先ほどと同様に指しているのは単一の事態であるが、結果の存続において、完結点後の時間軸上の幅をプロファイルするようになる（これについては 5.4.4 節で図示する）。<動作・出来事の継続>においては、開始点後の時間軸上の幅をプロファイルし、<動作・出来事の反復>においても開始点後の時間軸上の幅をプロファイルする点は変わらないが、複数の事態の生起を捉えるようになり、これらにおいてスケールが現れるようになる。

そして、スケールの方が前面に出る接尾辞が現れるようになる。すなわち<状態変化の程度>と<傾向>である。<傾向>は「傾向性」のスケールを持つものとして、複数の事態の生起を捉える<頻度傾向>、それに対し、一時的な状態を示す<状態傾向>である。

最後に、「そう」と「らしい・ぼい・くさい」は、それぞれ可能性についてのスケールを持つ<様態>と<推量>を表す。

5.4. 内項主語構造

ここまでは、プロファイルとスケールを用いて意味を記述することを試みてきたが、5.4 節では、句接辞の意味について認知図式を用いて記述すれば、より広い範囲において「内項主語構造」と呼ばれる現象に一定の根拠を与えることができることを主張する。

5.4.1. 内項主語構造に関する先行研究

新山 (2020a) では(13)のように他動詞の内項が主語になる現象を示し、これを「内項主語構造」と呼んでいる⁷²。

(13) a. 本が置きっぱなしだ。

⁷² 本研究では、この現象を便宜的に「内項主語構造」と呼ぶが、その理論的な立場は新山 (2020a) とは異なる。

- b. パンが焼きたてだ。
- c. ビールが冷やしすぎだ。
- d. チョコレートが溶かしかけだ。

(第1章(11)の再掲)

また、新山 (2020b) は、この構造の成立には接尾辞が LCS 上の STATE の焦点化を起こすタイプである必要があるとしている。新山 (2018) では、「ぱなし」において<結果状態の継続> (及び<放置の状態>) を表す場合に、「内項主語構造」が可能であると指摘されており、まとめると以下ようになる。

- (14) 新山 (2018, 2020a, 2020b) において内項主語構造が可能なもの
 たて、かけ、ぱなし<結果状態の継続>、すぎ<状態変化の程度>

5.4.2. 「気味」「がち」と内項主語構造

「気味」について、新山 (2020a) では内項主語構造が可能なものとされていない。

BCCWJ 内で、「気味」が動詞連用形を前接させる用例は 566 件ある。「を」格が現れるものに注目すると、全部で 65 件数えられるが、「X を Y 気味にして」、「X を Y 気味に」、「X を Y 気味にする」という特定の構文で現れるものが 49 件と多い。このような特定の構文に現れるものを除き、今までの用例で見てきたような「X を Y 気味だ」の形で現れるものを抽出すると、「持て余し気味」7 件、「サボり気味」4 件が存在し、その他には 1 件ずつの用例が計 5 件(「忘れ/崩し/伸ばし/上げ/当て気味」)あるのみである⁷³。以下にその用例を示す。

⁷³ ここで「X を Y 気味にする」などの特定の構文を除くのは、以下の「乾かす」(他動詞)、「乾く」(自動詞)の用例が示すように、「気味」の前接部が他動詞かどうかに関わらず、「を格」が出現することがあるため、句を包摂していると判断するのに不適切だと考えるためである。

- (i) 植えかえる 1 週間前から腰水をやめて、パーミキュライトを乾かし気味にする。
 (「人気のパンジー」 1997 年、BCCWJ)
- (ii) 夏越し中は、鉢を高いところに吊るす、遮光する、用土を乾き気味にする、肥料を与えないなど、さまざまな気づかいが必要。

<http://heboen3.g1.xrea.com/kyuukon/kyu_bego.html>

このような「A を B にする」「A を B にして」の構文的な特徴を扱った研究としては、村木(1983)や寺村 (1992) などがある。

(15) それでも納得できない祐泉を毛利清雅は持てあまし**気味**だった。

(「慟哭の明治仏教」 1999年、BCCWJ)

(16) 最近では、ブログの記事更新をサボり**気味**です。

(Yahoo!ブログ 2008年、BCCWJ)

これら「持て余す」「サボる」などを、上記の特定の構文以外で「気味」とよく共起する他動詞と考えると、新山の指摘に反し、以下に示すように内項主語構造がまま見られる。

(17) a. せっかくのキャパシティが持て余し**気味**？

<<https://www.ajr-news.com/2021/05/22/7527/>>

b. なんやかんやでバタバタしてて投稿がサボり**気味**だった

<<https://cartune.me/notes/hjRWWFdzQi>>

c. Bクラスも夏休み前の復習からスタートしました。単語が忘れ**気味**だったので、
また頑張って覚えよう！

<<http://bright-gakuin.co.jp/blog/4439/>>

d. アクセントは関東よりで語尾が伸ばし**気味**だとイメージすると、とても分かりやすいといえます。

<<https://mayonez.jp/topic/1005835?page=3>>

また「がち」についても、(18ab)の「食べがち」「飲みがち」の場合と違い、(18cdef)の「持て余しがち」「サボりがち」など、上記の「気味」と同様の前接要素なら、内項主語構造が現れ得る。

(18) a.*オムライスが**食べがち**だ。

b.*ビールが**飲みがち**だ。

c. 落って美味しいのですが、、、葉っぱが持て余し**がち**になるのはわたくしだけで
しょうか。。。)

(第3章(17b)の再掲)

d. 帰りが遅くなると書き込みがサボり**がち**だなあ。

(第3章(17c)の再掲)

- e. 今回の講座を聞いたなかで、「完了時間」の設定が忘れがちだとありましたがまさにそうだと痛感しました。

<<https://aircourse.com/elearning/allreview/1639/20/>>

- f. 私も親しい人に送るメッセージでは、語尾が伸ばしがちです。

<https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q12120641817>

上記の内項主語構造が現れるような「がち」の用法は、<頻度傾向>と違い、「気味」と同様に<状態傾向>を表していると考えられる。

5.4.3. 意味と内項主語構造

その他の接尾辞についても確認する。次の(19)のように<動作・出来事の継続>や<動作・出来事の反復>を表す「きり」「どおし」「まくり」「すぎ」の場合や<様態>を表す「そう」の場合、内項主語構造は現れない。

(19) a.*歌が歌いっきり/どおし/まくり/すぎだ。

b.*本が落としそうだ。

一方で、「ばなし」において指摘されたのと同様に<結果状態の継続>を表す「きり」「放題」もまた、内項主語構造が可能である⁷⁴。

(20) a. 前に座席が無い、遮るものが無いので、足が伸ばし**放題**です！

<<https://neko22.info/2018/01/04/airplane-emergency-seat/#toc3>>

- b. 初めの頃、斜向かいの従姉妹やご近所さん、民生委員の人が門扉から見える雨戸が閉めつきりだと心配して電話や実際に来てくれたりしてたのだが、母が戸袋から雨戸を出すのに重たいから閉めつきりにしていると伝えてからは誰も声をかけなくなったみたい。

<<https://ameblo.jp/taroten010288/entry-12770895568.html>>

⁷⁴「どおし」の<結果状態の継続>の用例は第3章で確認したように前接する動詞が少なく、適切な用例が見当たらなかった。

ここまでの観察から、内項主語構造成立の可否は、形式ごとではなく、意味ごとに分類した方が適切であると言える。以下にその結果を示す。

(21) 内項主語構造が可能なもの

< 既然 >、< 途中 >、< 結果状態の継続 >、< 状態変化の程度 >、< 状態傾向 >

(22) 内項主語構造が不可能なもの

< 動作・出来事の継続 >、< 動作・出来事の反復 >、< 頻度傾向 >、< 様態 >

5.4.4. 認知図式からの観察

(21)(22)の分類をここまでの認知図式の観察から考えると、以下のような一般化が可能である。

- ① 単一の事態を捉えるもの（「たて」「かけ」のような時間軸上の点をプロファイルするものと「気味」など）は内項主語構造が可能
- ② 複数の事態を捉えるもの（時間軸上の幅をプロファイルするもの）、あるいはコト全体をプロファイルするものは内項主語構造が不可能

これは、変化のない一時的な状態を捉えることができるか、そうではないかと言い換えることができる。

内項主語構造の認知図式は、(2)に対応する(23)のような「かけ」の例を用いると、図 5.17 のように表される。

(23) 本が読みかけた。

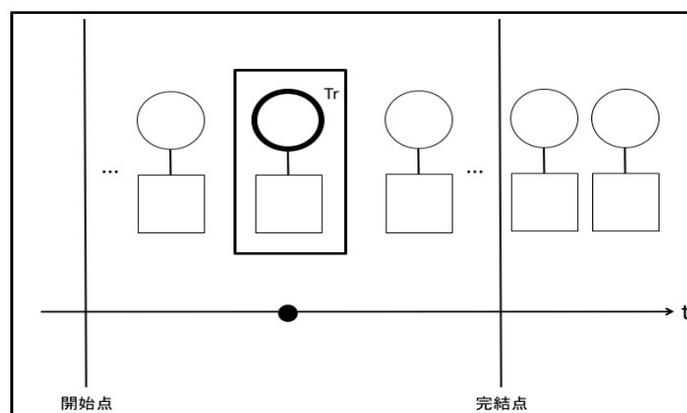


図 5.17. 内項主語構造の認知図式（「かけ」の場合）

つまり、この構造においては、接尾辞が動作主を背景化し、モノ（「対象」）をプロファイルすることで、そのモノ（「対象」）の一時的な状態を表している。

単一の事態を捉える接尾辞の中でも、「ばなし」「すぎ」「がち」などは、内項主語構造が現れるかどうかは、それが表す意味用法（あるいは前接する動詞の種類）に依存する。それとは異なり、「たて」「かけ」は、そのような制限がないという点で内項主語構造が広く見られると言える。このような「たて」「かけ」は、藤巻（2018）で指摘される「パンの焼きたて（＝焼きたてのパン）」「りんごの食べかけ（＝食べかけのりんご）」のように「たて」「かけ」自体がモノを表し得る。このことは図 5.17 の認知図式で示された、動作主を背景化し、モノ（「対象」）をプロファイルするという内項主語構造で見られる特徴とも符合する。

一方、＜動作・出来事の継続／反復＞＜頻度傾向＞といった対象の変化の連続を捉える用法や、コト全体をプロファイルする（つまり対象をプロファイルしない）「様態」を表す「そう」においては、モノの一時的な状態が取り出せず、内項主語構造は現れない。

また図 5.8 で見たように、「ばなし」など＜結果状態の継続＞を表す接尾辞は(13a)のように内項主語構造が現れ、時間軸上の幅をプロファイルしているため、一見、上述した①の条件に当てはまらないように思われるかもしれない。しかし、「ばなし」などが＜動作・出来事の継続＞を表す場合は、開始点後の変化の連続、つまり複数の事態を捉えているのと対照的に、＜結果状態の継続＞を表す場合は、以下の図 5.18 で示すように、捉えられる完結点後の事態とは、変化が起こらない単一の事態である。そのため、内項主語構造が現れるのだと考えられる。

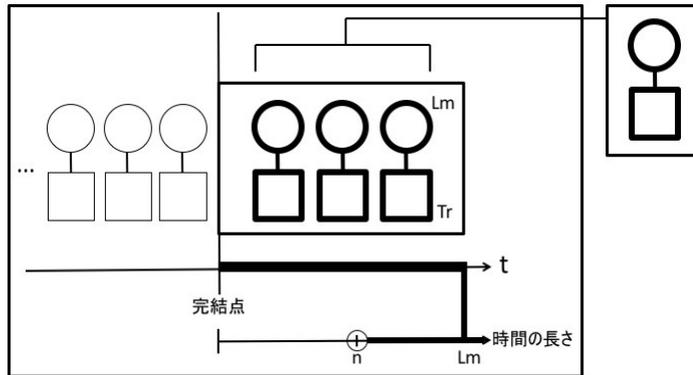


図 5.18. <結果状態の継続>における完結点後の単一事態

5.5. 抽象的な認知図式

ここでは、意味を表した認知図式を抽象化（スキーマ化）することで、各意味の連続性、あるいは多義的な接尾辞の詳細な意味の記述が可能になることを論じる

5.5.1. 各意味の連続性と抽象的な共通性

5.4.8 節で確認したように、「句を包摂する接尾辞」の意味が連続していることを述べたが、その連続性、つまり、ある意味と意味との抽象的な共通性は、認知図式でより明確に表現することができる。

例えば、<既然>と<途中>の共通性は次のように表される。

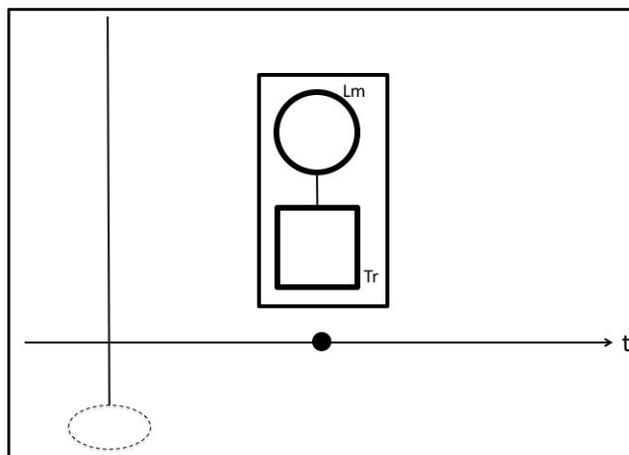


図 5.19. <既然>と<途中>の共通性

この図の場合、完結点か終結点かの指定はされていないが、時間軸上の一点をプロファイルしているということになる。指定が「完結点」になった場合は、〈既然〉、「終結点」になった場合は、〈途中〉の意味となる。

次に〈結果状態の継続〉と〈動作・出来事の継続〉の共通性は次のように表される。

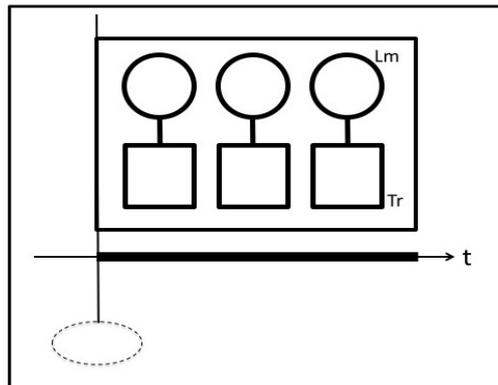


図 5.20. 〈結果状態の継続〉と〈動作・出来事の継続〉の共通性

この場合、時間軸の幅をプロファイルしているのは共通であるが、完結点か終結点かの指定はされていないということになる。もし完結点が指定されると、〈結果状態の継続〉、終結点が指定されると〈動作・出来事の継続〉が表される。

〈動作・出来事の継続〉と〈動作・出来事の反復〉の共通性は次のように示される。

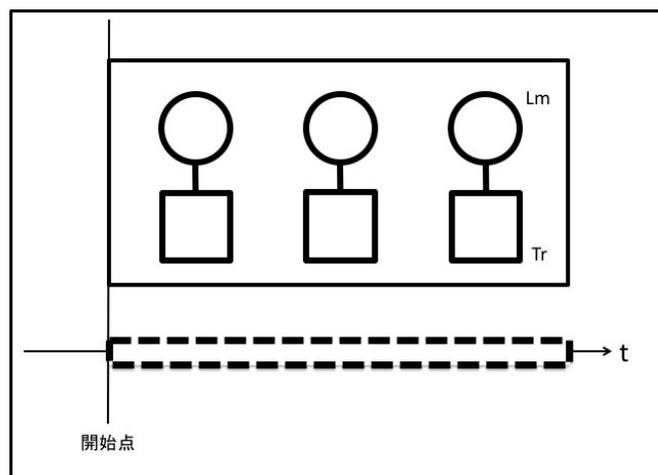


図 5.21. 〈動作・出来事の継続〉と〈動作・出来事の反復〉の共通性

図 5.21 の場合、開始点以後の時間軸上の幅をプロファイルすることは指定されてい

るが、どのような事態に適用するかが指定されていない。一度の事態に適用される場合は、
 <動作・出来事の継続>、複数回の事態に適用された場合は<動作・出来事の反復>の意味
 となる。

<動作・出来事の反復>と<頻度傾向>の共通性は以下の通りである。

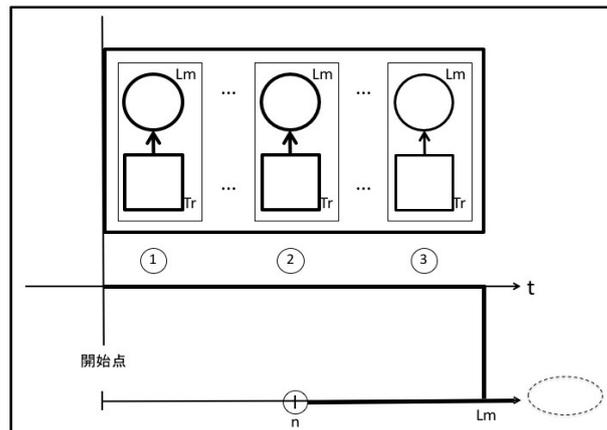


図 5.22. <動作・出来事の反復>と<頻度傾向>の共通性

図 5.22 では開始点後の時間軸上の幅をプロファイルし、複数の事態の生起を指す点は同じ
 であるが、どのようなスケールを持つかは指定されていない。これが「回数の多さ」の場合
 は<動作・出来事の継続>、「傾向性」の場合は<頻度傾向>である。

<頻度傾向>と<状態傾向>の共通性は図 5.23 のようになる。

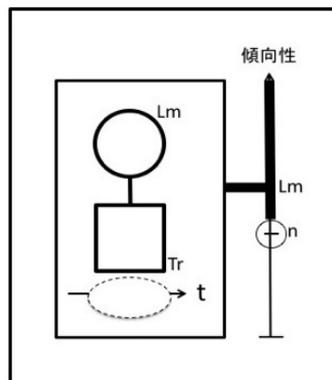


図 5.23. <頻度傾向>と<状態傾向>の共通性

この場合、どのような事態の「傾向性」を表すかは指定されていない。複数の事態の場合は

<頻度傾向>、単一の事態の場合は<状態傾向>の意味となる。

5.5.2. 多義性と認知図式

第3章、第4章での用法の広がりにおける考察について、形式的なスキーマの段階性と定着度について記述する反面、意味の側面にはあまり注意を払ってこなかった。だが、意味と形式がペアである以上、実際には、意味にも5.5.1節で見た抽象度の段階と定着度が存在するはずである。ここでは、個々の接尾辞の多義性が本章における認知図式を用いた場合、どのように記述することができるかを「ばなし」を用いて論じる。

多義性について、改めてここで確認すると、Goddard (1998) では次のような定義がなされている。

(24) POLYSEMY designates a situation in which a single word has a set of distinct but related meanings.

(Goddard1998: 23)

ここで一つの接尾辞が持つ「ひとまとまりの意味 (a set of meanings)」がどのような関係にあるのかを本章での認知図式を用いて表すことにする。

本章内の表 5.1 でも確認できるように、「ばなし」は<結果状態の継続>と<動作・出来事の継続>という意味を持つ。

本章で扱った認知図式を用いれば、「ばなし」全体の意味は次の図 5.24 のように表される。

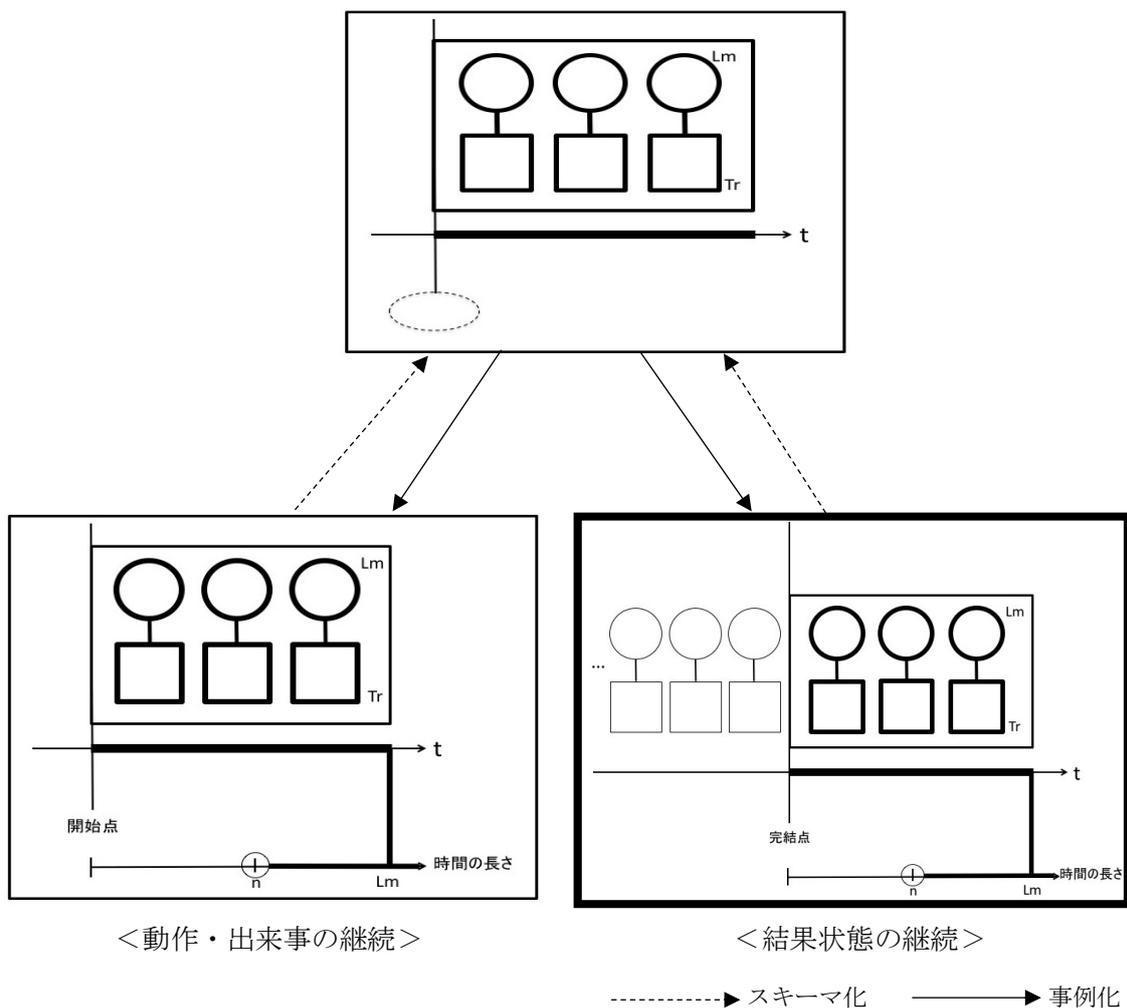


図 5.24. 「ばなし」の意味と認知図式

まず、「ばなし」は単に<結果状態の継続>と<動作・出来事の継続>という意味を表すというだけでなく、その背景（図 5.24 の上部）には、図 5.20 で示したような、より抽象化された意味（ここでは<継続>と呼ぶことができる意味）を持っているということである。

しかし、この説明だけでは、同様に<動作・出来事の継続><結果状態の継続>の意味を表す「どおし」などと区別がつかなくなる。しかし、第 3 章で見てきたように、明らかに「ばなし」は<結果状態の継続>、「どおし」は<動作・出来事の継続>の用例に偏っている。そこで、「ばなし」において十分に定着している<結果状態の継続>の認知図式（図 5.24 の右下部）を太枠で囲んで表示している。図 5.24 全体を「ばなし」の意味と考えるのである。これによって、「どおし」との意味の違いを表すことができる。「どおし」の意味表示の場合は、<動作・出来事の継続>（図 5.24 の左下）の方が太枠で囲まれた表示になり、また、

第3章で扱ったような「づくし」「づけ」のように、ほぼ語彙的な定着であると言えるものは、<動作・出来事の継続><結果状態の継続>の枠自体を、より細い線で表示することで、それらが定着していないことが表せるだろう。

このように、認知図式を用いれば、多義的な接尾辞の意味表示をより詳細にすることができ、同じ用法を持つ他の接尾辞との区別も定着度の違いから表現できるのである。

5.6. 本章のまとめ

本章では、まず句接辞の意味を、プロファイルの仕方とスケールの意味領域によって、体系的かつ簡潔に記述することを試みた。その結果、その意味的な連続性を示すことができ、それは第2章で確認した、名詞性の強弱に基づく句接辞の連続性とも対応していることがわかった。そして、<推量>を表す「らしい・ぼい・くさい」も、その連続性の中に位置付けられることを示した。

次に「他動詞内項の主語化」に対して、その接尾辞が「単一の事態を捉える」か、そうでないかによって、その可否が決定されることを論じた。

さらに、認知図式を用いれば、接尾辞間の意味の連続や多義性を明示的に捉えることができ、また「ばなし」と「どおし」のような、意味の違いを表しにくい接尾辞も、認知図式を用いた抽象的な意味表示で、その違いを表現することができることを述べた。

第6章 結論

第6章では本研究の結論を取り扱う。6.1節ではこれまで行なってきた議論をまとめ、主張を提示する。6.2節では本研究の意義を述べる。最後に、6.3節では今後の研究課題について述べる。

6.1. 本研究のまとめと主張

本節では本研究の課題を確認し、各章をまとめた上で、課題に対する主張を述べる。

6.1.1. 研究課題の確認

第1章で提示した本論文の課題とは以下のようなものであった。

- I. 語が前接する通常の接尾辞に対して、句を包摂する接尾辞は、どのような形式があり、またそれらはどのような意味と品詞的な特徴があるのか。そして、それらの接尾辞同士はどのような意味的、品詞的に連続する関係を結んでいるのか。
- II. 変化の側面に注目した時、これらの接尾辞がどのような用法拡大の経路をたどり、どのように構文ネットワークを形成していくと想定できるのか。

次節からこの課題に対して、各章の議論の結果をまとめていく。

6.1.2. 第2章のまとめ

第2章では、句接辞「たて」「かけ」「ばなし」「きり」「どおし」「放題」「まくり」「すぎ」「がち」「気味」「そう」を扱った。

まず、これらの接尾辞がそれぞれ<既然><途中><結果状態の継続><動作・出来事の継続><動作・出来事の反復><程度><頻度傾向><状態傾向><様態>という意味を持つことを確認した。

次に、その品詞性について、これらの句接辞が第三形容詞性接尾辞と形容動詞性接尾辞（「そう」のみ）に分かれることを確認した。

さらに、同じ第三形容詞性接尾辞に属しながらも、「が」格に後接することができるか、前接動詞の項が「を」格だけでなく「の」格でも標示できるどうか、さらに、接尾辞が「もの」を表すことができるかという点で名詞性の強いから弱いものまで連続していることが

わかった。この連続は、形容動詞性接尾辞「そう」を含め、「-の」「-な」の出現傾向とも対応しており、名詞性が弱いとされるものほど「-な」形式が現れやすいという傾向が見られた。

結果として、名詞性が弱いものほど「句の包摂」が起こりやすいことが明らかになったが、その全体図は以下の図 6.1 のようになった。

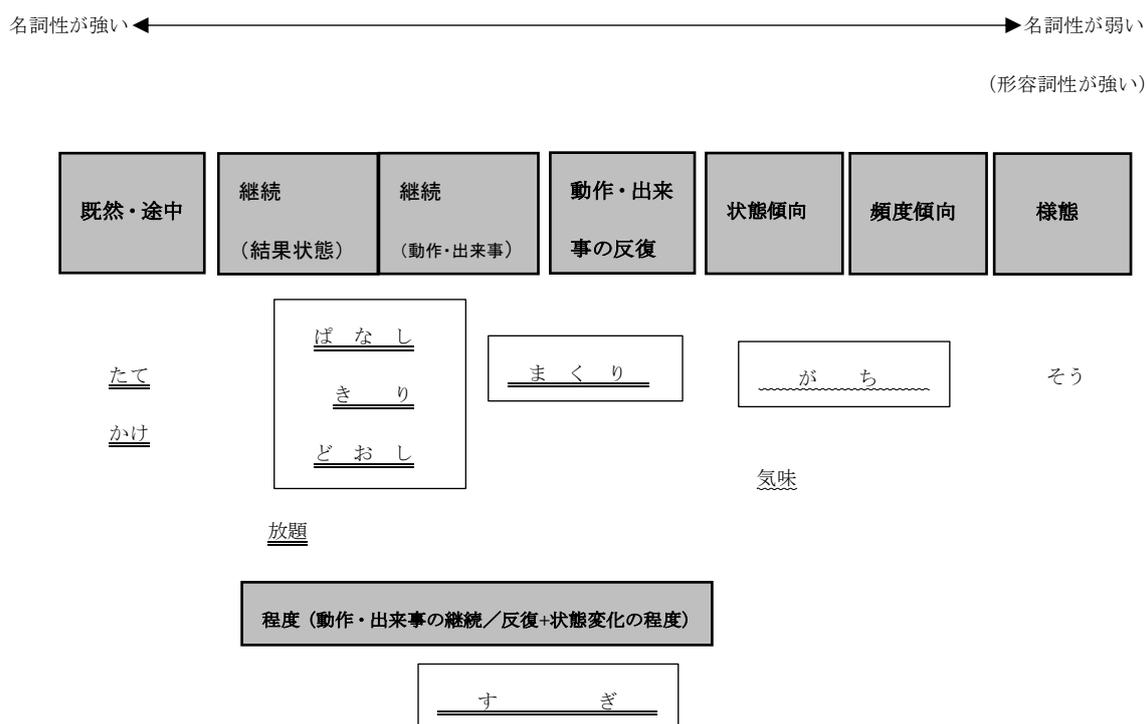


図 6.1. 名詞性の強弱と意味（第 2 章図 2.1 の再掲）

6.1.3. 第 3 章のまとめ

第 3 章では第 2 章で主に扱ってきた生産性の高い句接辞に、生産性の低いもの（「づめ」「づくし」「づけ」「め」「加減」）を分析に加え、さらに、多義的な接尾辞にも注目し、句接辞の変化の側面に焦点を当てた。

そして、類推・スキーマによる新表現拡大の理論を援用し、類似した意味を持つ、異なる接尾辞同士が繋がりを持つことで、用法が広がっていく過程を想定できることを示した。この拡大の過程は現代語のコーパスで採取した用例の観察に基づいたものである。

用法の拡大は、概して以下のようにまとめることができる。

①類推的な用法の拡大（「どおし」「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」）

これは、＜継続＞を表し、生産性の高い「どおし」における高頻度の前接動詞である「働く」「歩く」「立つ」などが「づめ」「ずくめ」「づくし」「づけ」にも現れるというものである。

②主にスキーマに基づく用法の拡大（「気味」「め」「加減」と「ばなし」「きり」）

これは、例えば＜状態傾向＞を表し、生産性の高い「気味」の前接動詞が、低い頻度で広く「め」「加減」にも現れるというものである。

③意味の広がりを伴うもの（「がち」「気味」と「ばなし」「どおし」）

これは、例えば「がち」「気味」はともに＜傾向＞を表すが、＜頻度傾向＞の意味において生産性の高い「がち」の前接要素が＜気味＞に現れ、反対に＜状態傾向＞の意味において生産性の高い「気味」の前接要素が「がち」に現れるという、用法の拡大に、意味の拡張が伴うものである。

ここから、先行研究で扱われてきた句接辞が、閉じたクラスとしてではなく、動的な総体として捉えることができるようになり、このような過程で用法が広がっていくことによって、「句接辞」というカテゴリーそのものをより強固に定着させていくこととなると考えられる。

6.1.3. 第4章のまとめ

第4章では形容詞性接尾辞「らしい・ぼい・くさい」の拡張について扱った。

これらは、接尾辞の段階と助動詞の段階に大きく分けることができるが、接尾辞の段階において各接尾辞は様々な意味と前接動詞を持つが、＜推量＞の助動詞へつながると思われるものは、＜モノ的属性＞と名詞接続である。一方、助動詞の段階においては、＜推量＞の意味を表すが、前接要素は名詞と句（終止形）接続が可能である。

「ぼい」「くさい」においては比較的近年に起こったと見られるが、この変化について、第3章と同様の立場に立ち、現代語のコーパス内の用例を観察することから、これらの接尾辞同士の関係に基づいた拡張の過程について考察した。

「らしい・ぼい・くさい」において起こる拡張は、大きく以下の二つに分類することができる。

①意味拡張に関するもの（＜モノ的属性＞ → ＜推量＞）

これは、生産性が高い「名詞+らしい＜モノ的属性/推量＞」との比較から、「名詞+ぼい＜モノ的属性＞」にも＜推量＞を表す用例が現れるといったものである。

②形式的拡張に関するもの（「語（名詞）接続」→「句（終止形）接続」）

これは、①に続いて起こり、生産性が高い「名詞/句（終止形）+らしい＜推量＞」との比較から、「名詞+ぼい＜推量＞」にも「句（終止形）接続」の用例が現れるといったものである。

また、続いて起こる「くさい」の拡張は、より定着度の増したスキーマによって拡張が促進されると思われるが、ここで想定される変化の過程は、通時的にも、ある程度妥当性があるものである。

「らしい・ぼい・くさい」においても第3章同様に、動的にカテゴリーが形成されていく過程を想定することができた。

6.1.4. 第5章のまとめ

第5章では、第4章までに扱ってきた句接辞と「らしい・ぼい・くさい」における意味についてプロファイルの仕方とスケールの意味領域に基づいた認知図式をもって統一的に示すことを試みた。

各句接辞の意味は、時間軸上のプロファイルのされ方、そして、時間軸上のプロファイルが背面に行くにつれ、スケール面が前面に現れてくるという点で、連続的に表すことができるが、これは第1章で示した名詞性の強弱に基づく、句接辞の連続性（図6.1）とも対応していることがわかった。そして、その意味と品詞性においては「らしい・ぼい・くさい」も、これに連続して捉えられることを示した。

また「他動詞内項の主語化」に対して、認知図式の観察から、句接辞が「単一の事態を捉える」場合に、それが現れることを示した。

最後に各接尾辞間の連続性と接尾辞の持つ多義的な側面に認知図式によって明確に示した。

6.1.5. 本研究が扱った領域

全体を通して、本研究は、第2章での句接辞における、品詞的な連続と意味の関係(図6.1)を基に、各章は以下の図6.2内に示した範囲を扱ってきたことになる。すなわち、第3章では、「句接辞」の範囲内における用法の拡大、第4章では「らしい・ぼい・くさい」の範囲内における用法の拡大、第5章は、本研究で扱う「句を包摂する接尾辞」の全体としての意味的、品詞的連続である。

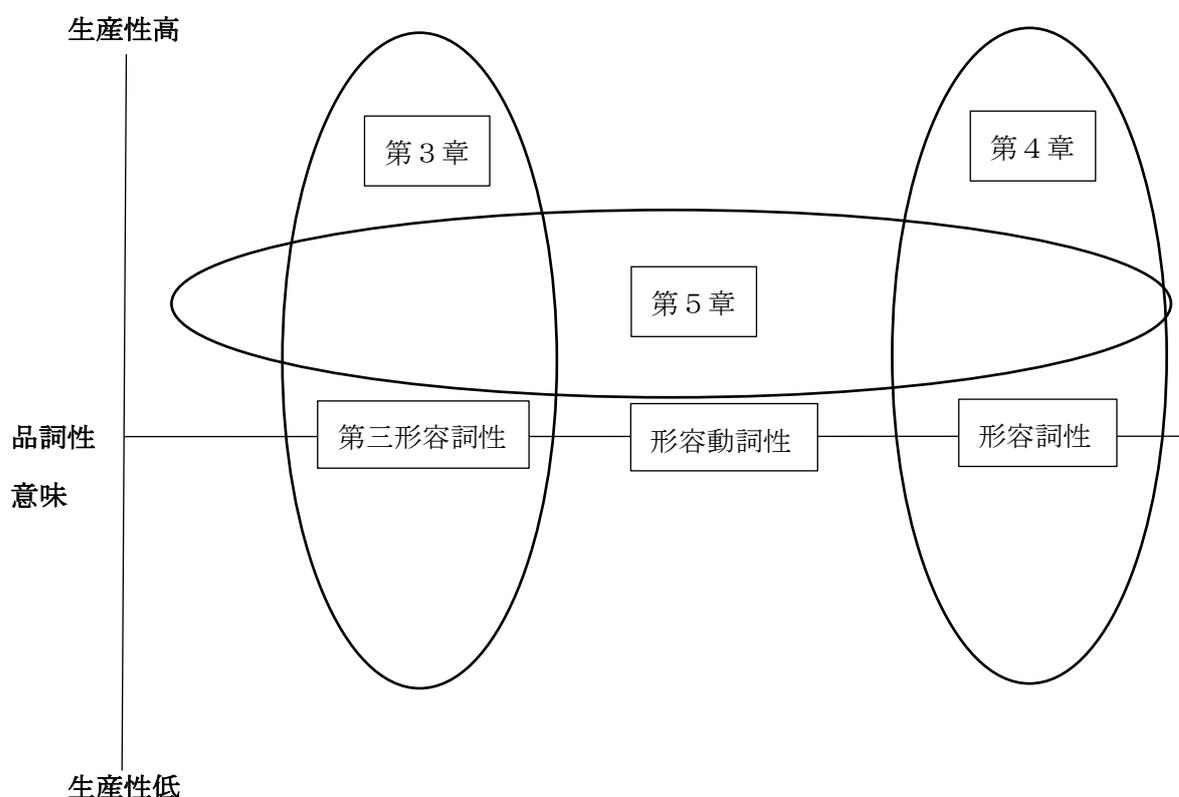


図 6.2. 第3章・第4章・第5章が対象とする領域

6.1.6. 研究課題に対する主張

研究課題に対する主張は次のようなものになる。

1) 課題 I に対して

句を包摂する接尾辞は形態・統語的な振る舞いから品詞的な連続性を持っており、その意味についてはプロフィールとスケールのあり方からその連続性を認めることができる。そして、連続する特定の意味と品詞性を持つ「句接辞」、「らしい・ぼい・くさ

い」、さらにその上位の「句を包摂する接尾辞」というカテゴリーを想定することができる。

2) 課題Ⅱに対して

各接尾辞が意味的類似性と品詞的な同一性を基盤として、生産性の高い接尾辞が生産性の低い接尾辞に影響することで、新たな用法、意味、形式が拡張していく過程を想定することができる。さらに、それによって特定の形式と意味を持つグループが形成され、全体として「句接辞」、「らしい・ぼい・くさい」及び、さらに上位の「句を包摂する接尾辞」というカテゴリーが動的に形成されていくというモデルを提示することができる。

6.2. 本研究の意義

ここでは、本研究による意義を述べる。6.2.1 節は構文文法について、6.2.2 節は拡大理論について、6.2.3 節は文法カテゴリーについてのものである。

6.2.1. 構文文法の適用

本研究で依拠した構文文法の理論について、早瀬（2019）によれば、構文は生成文法において周辺に置かれており、文生成プロセスの結果生み出される形式でしかないと考えられていた。

その中で Fillmore et. al (1988) での第 1 章で確認したような let alone 構文や、Kay & Fillmore (1999) での What is X doing Y 構文などが取り上げられてきた。

(1) A: Did the kids get their breakfast on time this morning?

B: I barely got up in time to EAT LUNCH, let alone COOKING BREAKFAST.

(第 1 章(21)の再掲)

(2) Diner: Waiter, what's this fly doing in my soup?

Waiter: Madam, I believe that's the backstroke.

(Kay & Fillmore 1999: 4)

(1)は「句構造規則」で産出できないと思われる構文、(2)は字義通りの意味を表さない構

文（「このハエはどうして俺のスープにいるんだ？」程の意味）であり、いずれも生成文法では扱うことが困難なものであった。

早瀬（2019）はこの時期の構文文法の潮流について次のように述べている。

このような一見非標準的な事例に焦点を当て、その形式に結びついた特定の機能や意味があることを説き、「周辺」事例を説明できる理論こそが「中心」現象も包括して扱えるという信念のもと、構文文法という一つの礎が築かれた。こののち、いわゆる「中心的」文法規則では組み立てることができない意味や形式を持った、（中略）次のような現象を扱う構文文法的研究が次々に積み重ねられることになる。

（早瀬 2019: 208）

このように初期の構文文法で扱われた構文はイディオマティックなものであったようである。

そのため Goldberg (1995) が二重目的語構文や使役構文など「動詞の項構造に基づく構文」を「構文」として捉えて分析したことについて、「「構文」という考え方を（中略）文法の「中核的」現象に当てはめたことで注目を浴びた」（早瀬 2019: 208）とされる。

現在、構文についての定義は様々であり、研究者によって異なるが、例えば第 1 章で一度示したように、Goldberg (1995) で「部分から全体が厳密に予測できないもの」と定義された構文は Goldberg (2006) では完全に分析的な場合も構文であるとされ、Goldberg (2013) ではあらゆるレベルに構文が存在すると述べているように、構文を広く捉える立場も生まれている。

本研究は Goldberg (2013) のように、分析的なものも含め、広く構文を認める立場に立つことで、構文文法が日本語の文法の中で、「アスペクト」「モダリティ」などの中核部分に適用できる可能性を示唆した点に意義があると考ええる。

6.2.2. 類推的拡張と意味拡張

Traugott & Dasher (2002) は、言語変化のメカニズムについてまとめている。以下にその概要を引用する。

形態統語論的・音韻変化においては二つの大きなメカニズムある。「再分析」と「類

推」である。三つ目のメカニズムである「借用」はここでは検討からはずす。20世紀の大半は、再分析が形態統語論的变化の主要な要因と考えられてきた(中略)。再分析は極端に狭い性質ばかりが取り挙げられ、類推(拡張)が一般化の希望が持てるメカニズムとして認められるようになってきた。その結果、類推の役割に対する興味がふくらみ(中略)、類推と再分析を根本的に区別することが実際にできるのかという疑問が提示されることとなった(中略)。

意味変化においても、二つのメカニズムが認められる。隠喩と換喩である。

(Traugott & Dasher 2002: 227; 日野訳 2019: 26)

このように、意味変化のメカニズムについては *metaphor* (隠喩)、*metonymy* (換喩) が担い、類推は形態統語論的・音韻変化のはずである。

本研究は、事例レベルの比較である類推だけでなく、スキーマレベルの繋がり、比較を通じた用法の拡大も扱ってきたが、いずれにせよ、本来意味変化には関わらないように思える。

ところが、第3章、第4章で見たような用法拡大には、意味変化(拡張)に関わるように見えるものがあつた。

第3章では、「がち」「気味」と「ばなし」「どおし」においてである。「がち」と「気味」で説明すると、<状態傾向>での使用が多い「気味」が「がち」を通じて<頻度傾向>を、<頻度傾向>の使用が多い「がち」は「気味」を通じて<状態傾向>を意味する用例が現れるというものであつた。

この場合は、<状態傾向>と<頻度傾向>の意味において、現れる前接動詞というのは異なることが多いので(例えば、<状態傾向>の意味で「書く」は認めにくい)、事例の広がり付随して他の意味を表す用例が増えるというように考えることもできる⁷⁵。

一方、第4章の場合は、「らしい・ぼい・くさい」であり、<推量>と<モノ的属性>を表す「らしい」に基づき、<モノ的属性>を表す「ぼい」にも<推量>の意味が現れるといったものであつた。

この場合の用法の拡大は、「N+らしい<モノ的属性>」と「N+ぼい<モノ的属性>」が上位の共通のスキーマを背景に結びついて両接尾辞が比較できるようになり、「N+らしい<推量>」に比較される形で、「N+ぼい」にも<推量>の意味の用例が加わる、あるいは事

⁷⁵ なお、すでに観察してきたように「遅れがち」「忘れがち」など<頻度傾向>か<状態傾向>かが判然としない用例もある。

例レベルで「子供らしい<モノ的属性>」と「子供っぽい<モノ的属性>」が結びつき、「子供らしい<推量>」に対し「子供っぽい<推量>」が出現するというものであった。

「がち」「気味」においては、前接要素の拡大と意味の拡大が同時に起きていたのに対し、この場合、共通の前接要素（例えば(3)における「子供」）において、<モノ的属性>と<推量>という二つの意味が伴われる。

(3) a. あの人は時々**子供っぽい**仕草をする。 <モノ的属性>

b. 一見、そうは見えなかったが、彼はどうやら**子供っぽい**。 <推量>

<モノ的属性>から<推量>への意味変化自体は、先行研究に分析があるが（ケキゼ 2003a, 尾谷 2000 など）、このような変化が、「らしい」などの他の接尾辞によって誘引されたと考えるとき、類推的であれ、スキーマ的であれ、他の接尾辞からもたらされる新しい表現パターンの型が、形式的な新パターンの産出ではなく、意味的拡張に寄与していることになる。

比例式に代表される類推は、既存の形式やパターンに基づき、新たな形式を生み出すことである。本研究のように構文として扱う以上、形式には必ず意味が伴う。この場合の類推的な拡張は、意味的な共通性が前提とされていると思われる。本研究も、抽象的な意味の共通性を根拠にした新たな表現パターンの拡大を論じてきたが、本節内で振り返った「らしい・っぽい・くさい」の用法拡大のパターンは、反対に形式の共通性に基づき、新たな意味が生み出されるという、従来の類推的な拡張理論の適用範囲を拡大する可能性を示唆している。これは、構文が意味と形式のペアであるという基本的な前提から導かれることである。

6.2.3. 文法カテゴリーに対する位置付けとその形成

本研究は、ボトムアップ主義を取り、個々の具体的な用例や、個々の接尾辞の使われ方を重視し、そこからそれぞれの用例や接尾辞の関係を少しずつ構築していこうというものであった。そこから得た、図 6.1 や図 6.2 で示した連続性や用法拡大の過程は結果として、次のような可能性を示唆するものである。

6.2.3.1. 文法カテゴリー内における位置付け

まずは、文法カテゴリー内での位置付けである。第 1 章でも触れたことだが、「アスペク

ト」「モダリティ」に与る複合動詞、文末名詞文ほど、句を包摂する接尾辞の研究は多くなかった（「らしい」「ぼい」を除く）。

日本語の文構造は南（1993）、寺村（1984）、北原（1981）など様々な研究者によって考察されてきたが、例えば仁田（1989）では、日本語の文構造を「文法カテゴリー」が集まって層状の構造をなしているものと考え、次のように図示している。

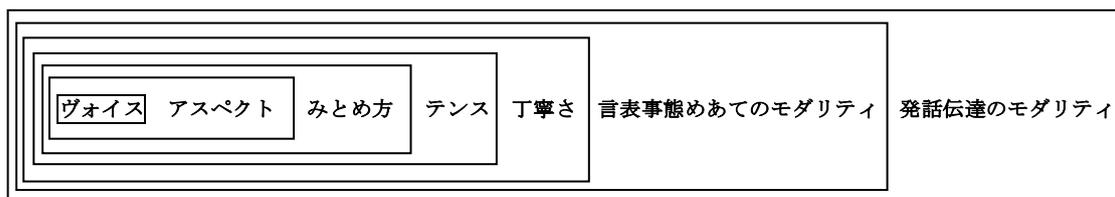
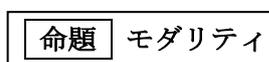


図 6.3. 文（節）の階層⁷⁶（仁田 1989: 48）

また、仁田（2009）によると、日本語の基本的な意味—統語構造は、「命題」と「モダリティ」という質的に異なる二つの部分が存在し、モダリティが命題を包み込む、という層状の構造にあるものとしている。



より近年の仁田（2013）は、モダリティを、従来より広く捉えようと試み、その広義モダリティの体系として「発話・伝達のモダリティ」「(言表) 事態めあてのモダリティ」に加え、「客体的モダリティ」を設けている。

「客体的モダリティ」とは、「事態の実現の可能性や傾向性といった事態実現の様相や、主体の意図性・願望性といった主体の事態への構えを表したもの」（同上: 154）と説明されるが、これは「事態実現の様相（可能性、傾向性）」、「主体の事態への構え（意図性、願望性）」に二分される。そして、「事態実現の様相」の下位に当たる「傾向性」は、「事態実現の容易さ・困難さという、事態の出現・成立に向かったの傾きを表したものである」（同上: 156）とされる。この中に「がち」が分類されている。

⁷⁶ 原典では縦書きであるが、紙面の都合上、横書きにしている。

「客体的モダリティ」はモダリティと名付けられているが、「命題内容内の存在」とされており、詳細な階層図はないものの、(アスペクトとモダリティで大きく分けると)アスペクトと「言表事態めあてのモダリティ」の間に位置することが窺われる。

(4) 「アスペクト」 > 「客体的モダリティ」 > 「言表事態めあてのモダリティ」

本研究で示した意味と品詞の連続性は、文法カテゴリーの階層に対して、次のように位置付けることができる(主だった接尾辞だけを取り挙げている)。

(5) 「アスペクト」 > 「客体的モダリティ」 > 「言表事態めあてのモダリティ」

たて	ばなし	まくり	がち	そう	らしい
かけ	どおし		気味		ぼい

このように、本研究で論じた連続性は、アスペクトからモダリティへの連続を支持し、文の階層とも関わっている可能性を示している。

6.2.3.2. 文法カテゴリー形成に対する示唆

また、本研究では、個々の接尾辞の事例を観察することを通して、異なる接尾辞同士の関係に基づき、徐々にグループを拡大していき、カテゴリーを強固していくというように、「句を包摂する接尾辞」というカテゴリーが動的な総体であると想定できることを示した。

現代日本語の助動詞は古代語と比べ、分析的になっているとの指摘がある(高山・青木 2011 など)。例えば、古代語の助動詞「む」は、根本的には<非現実>を表しており(川端 1997 など)、<推量>や<意志>の意味は、その文脈から解釈されるものであったが、現在は<推量>は「-だろう」、<意志>は「-よう」などが担っている。

本研究によって、現代語において所与のものとされる「文法カテゴリー」、そしてそれに属する「アスペクト」「モダリティ」という範疇自体も、元々明確なカテゴリーと範囲を持つものとして存在していたわけではなく、本研究で示したような過程をたどることにより、動的に形成されていったという見方が示唆される。

6.3. 今後の課題

本研究の最後に、今後の課題について述べる。

6.3.1. 句接辞と接尾辞の境界

本研究では句接辞かどうかを統語的要素が前接する用例があること（「を」格の包摂やサ変動詞の接続など）で判断してきた。

しかし、第3章で扱った「づくし」「づけ」は、現時点で、句を包摂するような用例を見つけることができなかつたものの、「仕事づくし」や「仕事づけ」のような名詞接続の用法から、「働きづくし」「働きづけ」のような動詞連用形接続が発達していく過程を見出せるものであり、句接辞である「どおし」「づめ」「づくめ」とは、この「働く」などの前接要素、意味、品詞性に共通性を見出せるものであった。本研究が従う用法基盤モデル（Langacker 2000 など）の特徴においては語彙と文法は連続体（continuum）とされているが、やはり、接尾辞と句接辞も明確な区別ができない、連続するものとして捉えることができるのではないかと考えられる。複合動詞に対しては、浅尾（2007）が定量的な違いを調査しており、「統語的な現象」は生産性がもたらしたものだとして主張しているが、本研究もそれに従うものである。

また、本研究において、同じように句を包摂する用例が見つからず、使用される用例自体があまり見つからなかつたため、扱わなかつたものとして「さし」「くさし」「調子」などがある。

「さし」「くさし」は、『日本国語大辞典（第二版）』での記述を引用すると次のようなものであり、「かけ」が表す＜途中＞と近い意味を持つと思われる。

くさし

動詞の連用形に付いて、その動作の途中にあることを示す。さし。かけ。

さし【止】（接尾語「さす」の連用形が転じたもの）

動詞の連用形に付いてこれを名詞化し、継続していたその動作が中止の状態になっていること、また、そのものを表わす。

これらは BCCWJ においても ja Ten Ten11 においても件数がごくわずかであり、第3章の

分析対象には加えなかった。

(6) a. シャワーから出ると、司はベッドに横たわって、読みくさしの本を読んでいた。

(「薔薇の契約」 2004年、BCCWJ)

b. ドリンクやジュースの飲みくさしを袋詰めしたり、食器を割れないように箱に詰めしたりと細かな作業に半日！

<<https://ebisu-support.com/data/voice/4976/>>

(6a)のように他動詞を用いた「V くさし/さしの N」や、(6b)のような「もの」を表す「Nの V くさし/さし」などの用例は見つかるものの、句を包摂する用例を見つけることができなかった。

また、「調子」は『日本国語大辞典(第二版)』では、「名詞」としての用法はあるものの、接尾辞としての用法は見つからなかった。しかし、以下の用例がウェブコーパス上からは見つかるとは異なる。これらは「気味」などと同様に<状態傾向>を表しているのではないかと思われる。

(7) このTシャツを着はじめてからというもの**のぼり調子**に部員も増え、いつも勝利に導かれます

(ja Ten Ten 11)

しかし、用例が見つからないからといって、句を包摂する可能性がないとは限らない。次のような「を格」を包摂する用例は、筆者の内省ではやや容認が可能のように思える。

(8) a. ?彼女はずっと本を読み**ずくめ/づけ**だ。

b. ?彼はタバコを吸い**くさし/さし**だ。

c. ?あの人は声を抑え**調子**だ。

(8)のような用例に対し、母語話者による容認テストを今後実施する必要があるだろう。もし、容認可能な者の数が多ければ、それは、「句(V連用形) + [接尾辞] <継続>」、「句(V連用形) + [接尾辞] <途中>」、「句(V連用形) + [接尾辞] <状態傾向>」など、前接部が句であるスキーマの定着度が、それぞれ「かけ」「どおし」「気味」などの使用によ

り、高まっているからだと考えられる可能性がある。

いずれにせよ、これらを対象に加えることで、本研究で表した以上に接尾辞から句接辞への連続性をさらに詳細に分析することができるであろう。

6.3.2. 前接要素と周辺の例

句を包摂する接尾辞を対象にした本研究において、扱うことができなかつた項目がある。ここにそれを列挙したい。

まずは、前接要素をより広く見る必要があると思われる。本研究内において分析対象とする句接辞の用例は、ほぼ動詞連用形接続だけに限定した⁷⁷。しかし、実際は「山がち」「風邪気味」「ひどすぎ」「高め」など、名詞や形容詞語幹接続のものもある。これらの使用頻度や接尾辞同士の関係などを探ることで、より接尾辞間のネットワークを詳細に描写することができるであろう。

また、前接要素がサ変動詞であるものとして森山 (1986) や影山 (1993) で挙げられる「済み」「中」などもある。

(9) a. 私はその件を調査済みだ。

b. アメリカ海軍の第一線で活躍中の戦闘機

(森山 1986: 23 より抜粋)

また、同じく影山 (1993) で提示された句接辞のうち、「接続詞的なもの」も本研究で分析対象にしなかつた。

(10) (「接続詞的なもの」)

- | | |
|---------------------------------------|----------------------------------|
| a. [アルバイト <u>し</u>] <u>ながら</u> 大学に通う | f. [友人を <u>訪ね</u>] <u>がてら</u> |
| b. [真実を知り] <u>ながら</u> | g. [学校から <u>帰り</u>] <u>しな</u> に |
| c. [そう <u>思い</u>] <u>つつ</u> | h. [羽田を <u>離陸</u>] <u>後</u> |
| d. [後ろを <u>振り向き</u>] <u>ざま</u> に | i. [仕事 <u>が片付き</u>] <u>次第</u> |
| e. [買い物に <u>行き</u>] <u>ついで</u> に | |

⁷⁷ 「らしい・ぼい・くさい」については、第4章で見たように、名詞接続と終止形接続に加え、その他の品詞・活用形の使用状況を考慮に入れた。

(第1章の(6)を再掲)

副島(2005)では句接辞への言及はないものの、これら「複合接続詞」を対象に、日本語の中でこれらがどのような位置にあるのかを考察している。

南(1974)と城田(1998)の分類をクロスさせて得た結果が次の表6.1である。

		城田(1998)の分類			
		語形(接続形)			接続助詞
		語尾形(語形変化)		二次語幹形 (語形変化+接辞)	
		シ、シテ	シ、シテ以外の語形 変化		
南 1 9 7 4 の 分 類	A 類	シテ(様態)		シナガラ/シツツ(同時動作)、 <u>シシ</u> (←連用形反復)、 <u>シツイデニ</u> 、 <u>シカタガタ</u> 、 <u>シガテラ</u> 、 <u>シガケニ</u> 、 <u>シシナニ</u> 、 <u>シザマニ</u>	
	B 類	シテ/シ(理由、時間)、 <u>シナイデ/セズ</u>	スレバ、シタラ、シテモ、シタリ、シタッテ	<u>シシダイ</u> 、スルト	
	C 類	シテ/ シ(並列)			～ので、～のに ～なら、～が、 ～けれど、 ～し、 ～から(理由)
	D 類				～と(引用) ～という

表 6.1. 従属句の分類(副島 2005: 92 下線は筆者による)

この中で句接辞に相当すると思われるもの(影山 1993 で扱われていなかった「かたがた」、
「がけに」も含んでいる)を、下線で示しているが、南(1974)の分類では「しだいに」以
外では全て A 類に属していることがわかる。A 類は最も副詞的の性質が強く(逆に D 類が最
も文に近い)、これらの句接辞が共通の性質を持っていることが示唆されており、また、本
研究で扱った句接辞とどのような関係を結んでいるのか考察する必要がある。

最後に「やすい」である。「やすい」は「難易文」として、井上(1976, 2005)などをはじめ、
多くの研究がなされてきた。以下に井上(2005)での分類を示す。

- (11) a. 学生にはこの辞書が使い**やすい**。 (I 型)
 b. 水泳選手にはこの台から飛び込みに**にくい**。
(12) 私は高音で歌いに**にくい**。 (II 型)
(13) 木綿物は乾き**やすい**。 (III 型)
(14) 若者は誤植を見落とす**やすい**。 (IV 型)

(井上 2005: 79)

これらのうち、(14)は<傾向>を表し、この場合、目的語に「が」格が来ないと指摘され
ている。つまり<難易>と違い<傾向>の意味では、格が交替せず維持されている。このよ
うな「やすい」は格標示の上でも句接辞と同じであり、また意味の上でも「がち」の<頻度
傾向>と類似しており、それを比較した意味分析の研究もある(井上 1998、八尾 2006、大
江 2014 など)。また、「やすい」は品詞としても形容詞性であり、第三形容詞性接尾辞であ
る「がち」との近さが感じられる。

このように本研究で扱えなかった用例を増やすことで、さらに句を包摂する接尾辞全体
の性質と関係性が明らかになるものと思われる。

参考文献

- 青木博史 (2002) 「古代語における「句の包摂」について」『国語国文』71(7), 40-52.
- 青木博史 (2016a) 『日本語歴史統語論序説』ひつじ書房.
- 青木博史 (2016b) 「語から句への拡張」藤田耕司・西村義樹 (編) 『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ-生成文法・認知言語学と日本語学-』408-422. 開拓社.
- 阿久澤弘陽 (2018) 『コントロール現象の統語的・意味的分析:主文動詞と補文形式の対応関係』筑波大学博士論文.
- 浅尾仁彦 (2007) 「複合語の生産性と文法的性質」『日本言語学会第 134 回大会予稿集』416-421.
- 浅尾仁彦 (2013) 「2.6 日本語複合語への認知形態論的アプローチ」李在鎬・村尾治彦・浅尾仁彦・奥垣内健『認知音韻・形態論』(認知日本語学講座 第2巻) 82-87. くろしお出版.
- 石井正彦 (2007) 『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房.
- 石崎保明 (2020) 「第 I 部 認知言語学に基づく文法化・語彙化・構文化の分析」加藤信広・西岡宣明・野村益寛・岡崎正男・岡田禎之・田中智之監修『文法化・語彙化・構文化 (最新英語学・言語学シリーズ 22)』1-86. 開拓社.
- 池上尚 (2012) 「嗅覚表現形容詞「クサシ」「〜クサシ」接尾辞「-クサシ」の発達を中心に」国語語彙史研究会 (編) 『国語語彙史の研究』31, 195-210. 和泉書院.
- 池上尚 (2013) 「接尾辞-クサシ再考-古代・近代の使用状況から-」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』21, 25-38.
- 池上尚 (2014) 「水クサイの意味変化-水ッポイとの共存過程から考える-」『日本語の研究』10 (2), 33-48.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (下)』大修館書店.
- 井上和子 (2005) 「日本語の難易文をめぐって」鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ (編) 『言語教育の新展開: 牧野成一教授古希記念論集』21, 61-74. ひつじ書房.
- 井上次夫 (1997) 「容易性・傾向を表す「〜やすい」の分析」『Studium』24, 98-113.
- 井上次夫 (1998) 「傾向を表す表現について-〜がちだ・〜ぎみだ・〜やすい-」『国文研究と教育』(21), 61-74.
- 岩崎真梨子 (2012) 『形容詞性接尾辞の意味変化に関する史的研究-「-ぽい」と「-らしい」-』岡山大学博士論文.

- 岩崎真梨子 (2016) 「接辞「-くさい」の推量的判断に関する一考察」『岡大國文論稿』44, 40-63.
- 上原聡 (2003) 「何故プロトタイプ構造か：日本語の「形容動詞」に見るプロトタイプ構造形成の歴史的考察」山梨正明 (編) 『認知言語学論考 No.3』 51-91. ひつじ書房.
- 上原聡 (2007) 「第4章 認知語形成論」上原聡・熊代文子 『音韻・形態のメカニズム—認知音韻・形態論のアプローチ』 (講座 認知言語学のフロンティア 1) 99-151. 研究社.
- 梅津聖子 (2009) 「現代日本語にみる接尾辞「ぼい」の広がり」『拓殖大学日本語紀要』 (19), 55-64.
- 大江元貴 (2014) 『日本語と中国語の可能・難易表現に関する認知的・語用論的研究』筑波大学博士論文.
- 大場美穂子 (1999) 「いわゆる様態の助動詞「そうだ」の意味と用法」『東京大学留学生センター紀要』 (9), 75-99.
- 尾谷昌則 (2000) 「接尾辞「ぼい」に潜むカテゴリー化のメカニズム—「女っぼいは女ですか？」—」『日本言語学会第120回大会予稿集』 168-173.
- 尾谷昌則 (2005) 「接尾辞ポイのモダリティ化」『日本語用論学会大会研究発表論文集』 1, 17-24.
- 尾谷昌則 (2011) 「5. 4. 3 ポイ構文—語レベルから文レベルの構文へ—」尾谷正則・二枝美津子 『構文ネットワークと文法—認知文法論のアプローチ—』 (講座 認知言語学のフロンティア 2) 269-272. 研究社.
- 小原真子 (2010) 「接尾辞「-ぼい」について」『島大言語文化：島根大学法文学部紀要言語文化学編』 29, 59-76.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系：その理論的・応用的意味合い」影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて』 1-46. ひつじ書房.
- 柏木成章 (2001) 「「そうだ」・「ようだ」・「らしい」」『別科論集』 3, 55-70.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房.
- 加藤重広 (2010) 「外的アスペクトと内的アスペクト」『言語研究の諸相—研究の最前線—』 47-73. 北海道大学出版.
- 川端善明 (1997) 『活用の研究Ⅱ』 清文堂出版.
- 北原保雄 (1981) 『日本語助動詞の研究』 大修館書店.

- 北原保雄（2013）「量修飾の可能性と、被修飾句のスケール構造の違いに基づいた、現代日本語の程度副詞の分類」『国語学研究』59, 29-43.
- 国松昭（1970）「「ぼい」雑考（接尾語ノートⅠ）」『日本語と日本語教育』2, 185-208.
- 久保有佐（2008）「現代語における 接尾辞「ぼい」の用法」『玉藻』44,1-10.
- ケキゼ, タチアナ（2003a）「「ぼい」の意味分析」『日本語教育』118, 27-36.
- ケキゼ, タチアナ（2003b）「現代日本語における表現の「やわらげ」～「そうだ」、「げ」、「ぼい」などの場合～」『言葉と文化』4, 293-306.
- 小出慶一（2005）「接辞「～ぼい」の用法の広がりー「雪が降るっぼい」という表現はどのように成立したかー」『群馬県立女子大学紀要』(26), 1-13.
- 黄其正（2004）『現代日本語の接尾辞研究』溪水社.
- 幸田佳子（2011）「接尾辞「がち」と「ぎみ」について」『語学教育研究論叢』(28), 287-301.
- 小島聡子（1996）「「らしい」について」『山口明穂教授還暦記念 国語学論集』563-578. 明治書院.
- 小島聡子（2003）「接尾語「ぼい」の変化」『明海日本語』(8), 31-38.
- 児玉一宏・野澤元（2009）『言語習得と用法基盤モデル』（講座 認知言語学のフロンティア 6）研究社.
- 小西正人（2001）「現代語の「～ばなし」とアスペクトの意味：動詞の意味論への予備的考察として」『京都大学言語学研究』20,119-137.
- 小松裕子・木村秀次（1997）「接尾辞「ぼい」小考」『明海日本語』3, 41-51.
- 小柳智一（2018）『文法変化の研究』くろしお出版.
- 阪倉篤義（1966a）「接尾語の位置」『国語国文』35(5), 197-209.
- 阪倉篤義（1966b）『語構成の研究』角川書店.
- 阪倉篤義（1986）「接辞とは」『日本語学3月号』4-10.
- 島岡紀子（1998）「難易文と「-がちだ」文」『筑波大学応用言語学研究』5, 15-28.
- 周瑛瑛（2017）『推量の助動詞の意味・用法』大東文化大学博士論文.
- 焦曉璐（2020）「接尾辞「-さ」の接続性からみるナ形容詞とノ形容詞の性質」『国語学研究』(59), 128-143.
- 城田俊（1998）『日本語形態論』ひつじ書房.
- 新屋映子（1989）「“文末名詞文”について」『国語学』159, 88-75.
- 新屋映子（2014）『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房.

- 杉村泰 (2000) 「ヨウダとソウダの主観性」『言語文化論集』 22 (1), 85-100.
- 須賀章夫 (2003) 「金田一の動詞分類の再評価—「V-っぱなし」「V-ておく」の分析を通して—」『人文論研究』 72, 75-86.
- 副島健作 (2005) 「複合接続詞の分類と副詞節の性格」『言語文化研究紀要：Scripsimus』 14, 87-109.
- 副島健作 (2007) 『日本語のアスペクト体系の研究』 ひつじ書房.
- 高見健一・久野暉 (2006) 「第3章 「V かけの N」 構文」『日本語機能的構文研究』 69-100, 大修館書店.
- 高山善行・青木博史 (編) (2011) 『ガイドブック日本語文法史』 ひつじ書房.
- 竹島奈歩 (2010) 「接尾辞「ぼい」と共起する名詞について—新聞記事の見出しを例に—」『同志社大学日本語・日本文化研究』 8, 20-37.
- 田中寛 (1990) 「動詞連用形の構文・語彙的な機能：日本語教育の立場から」『言語と文化』 3, 35-80.
- 谷守正寛 (2018) 「動的事態を表す名詞で締める名詞文とその主題：「駅は次の角を左折だ」等を中心に」『言語と文化』 22, 149-171.
- 田野村忠温 (2002) 「ノート 形容動詞連体形における「な/の」選択の一要因—「有名な」と「無名の」」『計量国語学』 23(4), 207-213.
- 田村泰男 (2004) 「接尾辞「ぼい」が結び付く語句について」『広島大学留学生教育』 8, 37-44.
- 田村泰男 (2016) 「和語系接尾辞（接尾語）について」『広島大学国際センター紀要』 6, 49-58.
- 趙海城 (2016) 「傾向を表す接尾辞「～がち」「～ぎみ」について」『明星国際コミュニケーション研究』 8, 31-49.
- 陳佳秀 (2007) 「日本語の形容詞の位置づけについて」『日本語教育方法研究会誌』 14(2), 14-15.
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」鈴木泰・角田太作 (編) 『日本語文法の諸問題：高橋太郎先生古希記念論文集』 139-161. ひつじ書房.
- 角田太作 (2011) 「人魚構文：日本語から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論文集』 1, 53-75.
- テイラー, ジョン・R, 瀬戸賢一 (2008) 『認知文法のエッセンス』 大修館.

- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版。
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。
- 寺村秀夫（1992）「「付帯状況」表現の成立条件－「Xヲ……スル」という文型をめぐる－」
『寺村秀夫論文集 1：日本語文法編』113-126. くろしお出版。
- 永澤済（2011）「漢語「-な」型形容詞の伸長：日本語への同化」『東京大学言語学論集』31,
135-164.
- 中畠孝幸（1990）「不確かな判断：ラシイとヨウダ」『三重大学日本語学文学』1, 25-33.
- 中村愛（2009）「「～っぱなし」の意味・用法に関する研究」『実践国文学』75, 114-119.
- 中村重穂（2001）「「～たて」に関する一考察：「～たばかり」との比較を通して」『北海道大
学留学生センター紀要』5, 16-30.
- 中村真子（2019）「接尾辞「ばい」の用法拡大について」『思言』15, 203-210.
- 中村亘（2002）「傾向・傾きを表す接尾辞－「気味」「がち」「っぱい」をめぐる－」『北條
淳子教授古稀記念論集』108-119.
- 仲本康一郎（2017）「形容詞：言語類型論と認知言語学からの眺め その1」『山梨大学教育
学部紀要』1, 281-288.
- 中山陽介（2004）「「特別な思い」と「特別の思い」：＜第二形容詞＞と＜第三形容詞＞の揺
れについて」『阪大日本語研究』16, 131-158.
- 新山茂樹（1960）「形容詞の接尾語「…っぱい・…っぱい」の生成」『国語研究』10, 48-58.
- 新山聖也（2018）「名詞性を持つ複雑述語・文末形式における自動詞構造の分析」『日本言語
学会第156回大会予稿集』51-56.
- 新山聖也（2020a）「統語的に形成される述語名詞について」『日本言語学会第160回大会予
稿集』244-250.
- 新山聖也（2020b）「述語名詞「-すぎだ」の内項主語構造における他動詞と非対格自動詞の
比較」『日本言語学会第161回大会予稿集』292-298.
- 新山聖也（2020c）「「-放題だ」における＜可能＞と＜結果状態＞の分析」『日本語文法学会
第21回大会発表予稿集』57-64.
- 西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法』秀英出版。
- 西尾寅弥（1988）『現代語彙の研究』明治書院。
- 仁田義雄（1989）「文の構造」北原保雄（編）『日本語の文法・文体（上）』（講座日本語と日
本語教育 第4巻）, 25-52. 明治書院。

- 仁田義雄 (2009) 『日本語のモダリティとその周辺』 ひつじ書房.
- 仁田義雄 (2013) 「モダリティ的表現をめぐって」 遠藤喜雄 (編) 『世界に向けた日本語研究』 135-162. 開拓社.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』 くろしお出版.
- 野呂健一 (2016) 『現代日本語の反復構文—構文文法と類像性の観点から』 くろしお出版.
- 濱田佳苗 (2010) 「接尾辞「ぼい」について」 『愛知大学国文学』 49, 85-99.
- 早瀬尚子 (2019) 「構文文法」 辻幸夫・楠見孝・菅井三実・野村益寛・堀江薫・吉村公宏 (編) 『認知言語学大辞典』 207-218. 朝倉書店.
- 坂東美智子 (2021) 「推量の助動詞「(し) そうだ」の意味的・統語的特徴」 岡部玲子・八嶋純・窪田悠介・磯野達也 (編) 『言語研究の楽しさと楽しみ—伊藤たかね先生退職記念論文集—』 343-354. 開拓社.
- 藤城浩子 (2006) 「-キリ、-ママ、-ツパナシーその基本義と提示方法—」 『早稲田大学日本語教育研究』 8, 107-121.
- 藤巻一真 (2018) 「アスペクト形式の「たて」と「かけ」の名詞的用法について」 『神田外語大学紀要』 30, 93-113.
- 堀尾佳以 (2015) 『若者言葉にみられる言語変化に関する研究』 九州大学博士論文.
- 松村輝 (編) (1969) 『古代語現代語 助詞助動詞詳説』 学燈社.
- 三尾砂 (1942) 『話し言葉の文法—言葉遣篇』 帝国教育会出版部.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店.
- 三宅知宏 (1994) 「認知的モダリティにおける実証的判断について」 『国語国文』 63(11), 20-34.
- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化：内容語と機能語の連続性をめぐって」 『日本語の研究』 1(3), 61-76.
- 三宅知宏 (2006) 「実証的判断」が表される諸形式-ヨウダ・ラシイをめぐって-」 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編) 『日本語文法の新地平 2 文論編』 119-136. くろしお出版.
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版.
- 村木新次郎 (1983) 「「地図をたよりに、人をたずねる」という言いかた」 渡辺実 (編) 『副用語の研究』 267-292. 明治書院.
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』 ひつじ書房.

- 村木新次郎 (2019) 『語彙論と文法論と』 ひつじ書房.
- 村尾治彦 (2013a) 「第9章 構文」 森雄一・高橋英光 (編) 『認知言語学 基礎から最前線へ』 205-230. くろしお出版.
- 村尾治彦 (2013b) 「3.10. 派生名詞の語形成: 「かけ」名詞構文」 李在鎬・村尾治彦・浅尾仁彦・奥垣内健 『認知音韻・形態論』 (認知日本語学講座 第2巻) 125-138. くろしお出版.
- 森田富美子 (1990) 「いわゆる様態の「そうだ」について—用法の分類を中心に—」 『東海大学紀要. 留学生教育センター』 10, 55-70.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店.
- 森山卓郎 (1986) 「接辞と構文」 『日本語学 3月号』 19-27. 明治書院.
- 八尾由子 (2006) 「傾向を表す接辞 ガチ、ギミ、ヤスイ」 『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』 21, 127-139.
- 山下喜代 (1994) 「接辞分類表の作成—三省堂国語辞典第4版を資料として—」 『講座日本語教育』 第29分冊, 378-400.
- 山下喜代 (1995) 「形容詞接尾辞 「-ばい・-らしい・-くさい」 について」 『講座日本語教育』 30, 183-206.
- 山田昌史 (2005) 「結果の焦点化: 「たて」構文の分析」 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.1』 267-293. ひつじ書房.
- 山田昌史 (2016) 「基本述語のアスペクトをきりとる接辞「たて」についての考察」 『常葉大学外国語学部紀要』 32, 11-28.
- 山梨正明 (2009) 『認知構文論—文法のゲシュタルト性—』 大修館書店.
- 山本佐和子 (2012) 「モダリティ形式「ラシイ」の成立」 高山善行・青木博史・福田嘉一郎 (編) 『日本語文法史研究 1』 165-188. ひつじ書房.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 ひつじ書房.
- 由本陽子 (2012) 「「動詞+過ぎる」と述語名詞としての「動詞+すぎ」」 影山太郎・沈力 (編) 『日中対照理論言語学の新展望 3 語彙と品詞』 123-143. くろしお出版.
- 楊舒涵 (2012) 『「V かけの N」構文の意味解釈と成立条件—アスペクトを中心に—』 東北大学修士論文.
- 渡邊ゆかり (2000) 「「動詞の過去形+ままだ」述語文と「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味的相違」 『広島女学院大学日本文学』 10, 1-20.

- Barlow, Michael, and Kemmer, Suzanne (2000) *Usage-Based Models of Grammar*. Stanford, CA: CSLI Publications,
- Barðdal, Jóhanna, and Spike, Gildea (2015) "Diachronic Construction Grammar: Epistemological Context, Basic Assumption and Historical Implications," Jóhanna Barðdal, Elena Smirnova, Lotte Sommer and Spike Gildea eds., *Diachronic Construction Grammar*, 1-49. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Booij, Geert (2010) *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Bybee, Joan L. (2015) *Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press, (小川芳樹・柴崎礼士郎 (監訳) (2019) 『言語はどのように変化するのか』 開拓社.)
- Croft, William. (2001) *Radical Construction Grammar*. Oxford: Oxford University Press, (山梨正明 (監訳) (2018) 『ラディカル構文文法—類型論的視点から見た統語理論—』 研究社.)
- Cruse, D. Alan (2011) *Meaning in Language (3rd ed.)*, Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, Charles J., Kay, Paul, and O'Connor, Mary C. (1988) "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *let alone*," *Language* 64(3), 501-538.
- Goddard, Cliff (1998) *Semantic Analysis: A Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago and London: University of Chicago Press, (河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子 (訳) (2001) 『構文文法論英語構文への認知的アプローチ』 研究社.)
- Goldberg, Adele. E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele. E. (2013) "Constructionist Approaches," Thomas Hoffmann and Graeme Trousdale eds., *The Oxford handbook of construction grammar*, 15-31. Oxford: Oxford University Press.
- Hopper, Paul J., and Traugott, Elizabeth Closs (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press, (日野資成 (訳) (2003) 『文法化』 九州大学出版会.)
- Kay, Paul, and Fillmore, Charles J. (1999) "Grammatical constructions and linguistic generalizations: The What's X Doing Y? Construction." *Language* 75(1), 1-34.
- Kay, Paul (2013) "The Limits of (Construction) Grammar," Thomas Hoffmann and Graeme Trousdale eds., *The Oxford handbook of construction grammar*, 32-48. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Vol. I: Theoretical Prerequisites*. Stanford, CA: Stanford University Press.

- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. 2: Descriptive application*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2000) "A dynamic usage-based model," Michael Barlow and Suzanne Kemmer eds., *Usage-based Models of Language*, 1-63. Stanford, CA: CSLI Publications, (坪井栄治郎 (訳) (2000) 「動的使用依拠モデル」坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』 61-143. ひつじ書房.)
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press, (山梨正明 (監訳) (2011) 『認知文法序説』 研究社.)
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigation in Cognitive Grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Lyons, John (1981) *Language and Linguistics : An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sugioka, Yoko (1984) *Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English*. Doctoral dissertation. University of Chicago.
- Taylor, John R. (2002) *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus*. New York: Oxford University Press, (西村義樹・平沢慎也・長谷川明香・大堀壽夫 (編訳) (2017) 『メンタル・コーパス—母語話者の頭の中には何があるのか』 くろしお出版.)
- Tomasello, Michael (2003) *Constructiong a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Toratani, Kiyoko (1997) *Typology of split-intransitivity: lexical aspect and the unaccusative hypothesis in Japanese*. Master's Thesis. State University of New York, Buffalo.
- Traugott, Elizabeth Closs, and Dasher, Richard B. (2002) *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press, (日野資成 (訳) (2019) 『意味変化の規則性』 ひつじ書房.)
- Traugott, Elizabeth Closs, and Trousdale, Graeme (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*. Oxford: Oxford University Press.
- Tsujimura, Natsuko, and Iida, Masayo (1999) "Deverbal nominals and telicity in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 8(2), 107-130.

Tuggy, David (2007) "Schemacity," Dirk Geeraerts and Hubert Cuyckens eds., *The Oxford handbook of cognitive linguistics*, 82-116. Oxford: Oxford University Press,

Uehara, Satoshi (1998) *Syntactic Categories in Japanese: A Cognitive and Typological Introduction. Studies in Japanese Linguistics 9*. Tokyo: Kurosio Publishers.

【辞書】

『日本語国語大辞典 第二版』(2000~2002) 小学館

【使用コーパス】

『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』(検索ツール「中納言」)

『Japanese Web 2011 corpus (jaTenTen11)』(検索ツール「Sketch Engine」)

謝辞

博士論文を執筆するに当たり、お世話になった方々に感謝いたします。

主指導教員である今井忍先生には、ご多忙にも関わらず、多くのご指導の時間をいただきました。生活に忙しく、研究に対して挫けそうになるたび、先生の言葉に元気付けられ、なんとか踏みとどまることができました。研究相談の中でもいつも寛容で忍耐のある態度で、私の意見を尊重して下さいました。先生が主指導教員になってくださっていなければ、私はここまで研究生生活を続けられたかどうかわかりません。先生のおかげで歩み遅くとも論文を少しずつ進め、無事書き終えることができました。

博士論文第一次中間発表、第二次中間発表、予備審査発表、最終発表で研究の開始から終わりまで研究過程を見て下さり、研究の上で重要なお指摘、貴重なご意見をくださった、副指導教員の荘司育子先生と山泉実先生にも深く感謝を申し上げます。荘司先生には、いつも励ましの言葉に救われる思いをし、また研究者の姿勢を学ばせていただきました。山泉先生には博士前期課程に在籍していた折、学生たちで開く勉強会に、ご多忙にもかかわらず、ご参加いただき、そこで幅広い言語学の知識を教えていただきました。それが研究していく上での基盤になりました。先生の理知の鋭さにはいつも感服する思いでした。

また、本学研究科に所属している学生、同じゼミに所属する皆様にも大変お世話になりました。同じ立場で研究する皆様からは気付かされることが多く、また、長い間に渡って多くの助言をいただいてまいりました。

最後になりますが、長い大学院での生活を許し、いつも応援してくれた最も大切な妻といつも私に元気をくれた最愛の娘に、心よりの謝意を表したいと思います。